平成２３年度生涯学習基礎データ調査事業

家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究

～　保護者編・支援者編　～

平成２４年３月

佐賀県立生涯学習センター

はじめに

子育てや教育はいつの世にあっても決して手抜きのできない重要な課題ですが、今日ほど子育て支援や家庭教育支援、学校と家庭と地域の連携について熱く語られることがあったのでしょうか。子育てに自信をなくし、孤立する母親。虐待に走り苦しむ母親。妻や子どもに気持ちと時間を注ぐ余裕をなくした父親。「昔はこうではなかった」「住みにくい世の中になった」と言われますが、その昔に比べれば、社会は総じて豊かで、モノや情報があふれ、便利で娯楽に事欠くことはなく、すべての動きがスピーディーになっています。一方で悲惨な事件が多発し、いつしかそのような社会事象に慣らされているすさんだ空気をなんと説明すればよいのでしょう。モノではなくこころ。だれが言うでもなく、子育てや家庭・地域教育の重要性を叫び始めたのです。

生涯学習基礎データ調査事業は、平成 22 年度、23 年度の 2 ヵ年継続で「家庭の教育力向上にむけた支援の方策」をテーマとして取り組んできました。ここにきてどうしてもこのテーマでの基礎データ調査に取り組むことの必要性を迫られたのは、ままならない子育てと家庭教育の実態を見るに見かね、子どもたちの将来に危機感を募らせてのことではなかったかと思うのです。私たちもこの調査を通して「教育の原点は家庭にあり」ということを復唱しています。

2 ヵ年にわたる調査では上野景三・佐賀大学文化教育学部長はじめ 7 名に調査研究委員をお願いし、委員会およびワーキング委員会を重ねていただきました。平成 22 年度調査は「行政編」として、佐賀県と県内全市町（117 課・係）にアンケート調査を実施し、100％の回答を得ました。23 年度には県内 5 つの教育事務所管内の小学校 10 校を対象に「子育てに関する保護者アンケート」を行い、回収率 83.9％（825 件）で集約しました。なかでも保護者から寄せられた地域、行政、学校への要望、保護者の悩み、子どもの友人関係の悩みなどは傾聴に値します。さらに支援者 6 名へのヒアリング調査は、それぞれの経験をもとにお答えいただき、示唆に富む内容となっています。

調査の最中に東日本大震災が発生しました。日常を根こそぎ奪い去ってしまう自然災害の猛威になす術もなく、そして苦境のどん底から生き抜こうとする人々の「生きる力」を目の当たりにし、支え合うこと、助け合うこと、こころの絆の大切さをだれもが学ぶことになりました。先ごろの朝日新聞社の世論調査では、震災後の日本社会をみて、人と人との絆を「実感した」と思う人が 86％に達したことが報じられました。子育ても教育も地域活動もすべては人と人との絆が不可欠なのだと思いに至るのです。

今回の調査では、調査研究委員やワーキンググループのみなさんをはじめ、県内 20 市町の担当者の方々、県内 10 小学校の先生方、家庭教育支援者 6 名のみなさんに大変お世話になりました。その多くのご協力によって基礎データ調査研究事業を成し遂げることができました。心からお礼を申し上げ、事業成果が各方面で生かされることを願ってやみません。

平成２４年３月

佐賀県立生涯学習センター
館　長　大　草　秀　幸

目　次

はじめに

Ⅰ　委員長まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　生涯学習基礎データ調査事業の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
1　調査研究のテーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
2　調査研究の期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
3　調査研究の趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
4　調査研究の進め方と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ　保護者アンケート調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1　調査の名称・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3　集計結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
4　調査結果の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

Ⅳ　支援者ヒアリング調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
1　調査の名称・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
2　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
3　ヒアリングのまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
4　調査結果の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

Ⅴ　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

Ⅵ　調査結果を受けて　調査研究委員のコメント・・・・・・・・・・・・ 63

Ⅶ　資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
1　保護者アンケート調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
2　保護者アンケート自由記述・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
3　保護者アンケート集計データ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

※平成２２年度「家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究～行政編～」をアバンセホームページ（http://www.avance.or.jp/）で公開しています。

Ⅰ　委員長まとめ

家庭の教育力向上にむけた支援方策創造のために
家庭・行政・支援者のトライアングル

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員長
上野　景三（佐賀大学文化教育学部長）

この報告書は、平成 22～23 年度の 2 ヶ年にわたる調査研究のまとめである。本調査に取り組んだ背景には、21 世紀に入り社会が成熟してきた反面、家族形成は多様な問題をかかえるようになり、家庭教育が教育政策の主要な課題になるのではないかという問題意識をもっていたからである。佐賀県においても教育基本計画策定が準備されており、学力向上の面からも家庭教育の充実は不可避の課題であることから、基本計画の主要課題として位置づけられると考えられる。

以上の問題意識をもって、2 ヶ年にわたる調査・研究を行った。この調査では、次の三つに取り組んだ。

一つは、行政調査である。現在でもすでに多様な家庭教育支援が行政機関によって行われている。しかし、実態としては「隔靴掻痒」状態とでもいうべき状況がある。つまり、必要とされているところに、必要な家庭教育支援が行われているのかどうか。そこで、家庭教育支援のために行政機関はどのような支援を行うことが求められているのか、また効果的な支援の在り方を探るために、まず家庭教育支援を行っている行政部局の実態を調査する作業である。支援策の何が届いており、何が届いていないのか。その「総量」と実態を把握する作業である。

二つには、保護者意識の調査である。現在、家庭の教育力低下や再生の必要性が指摘される一方で、いまほど家庭が教育に熱心な時代はないとの指摘もある。この両者の指摘は、一見、対立しているようにみえるが、おそらくどちらも間違いではない。というのは、問題が複雑で錯綜しているからである。経済的格差が家庭の経済力に影響を及ぼしていることからわかるように、家庭教育も二極化が言われる。そのことから、困難を抱える家庭が増え、家庭での教育がままならないというものである。極端なケースが、子どもの養育に関心をもたなくなり、養育放棄というネグレクトが生み出されてくる。ところが、子どもへの無関心さは、家庭の経済力だけに起因するわけではない。経済的に豊かであっても、子どものしつけがままならないというケースも少なくない。つまり、家庭の教育力の問題は、経済力に規定されながらも、単にそれだけではなく、他の要因からの影響も少なくないということである。その点を、保護者の意識から描き出すことを試み、家庭教育支援策の内容構築につなげていく作業である。

三つには、家庭教育支援者の育成である。超少子化の進行を背景に、家庭教育支援を担うマンパワーの育成は喫緊の課題である。しかし、その量と質については、ほとんど議論されることがなく、また育成の方法についても、県内では行政担当者等の経験則からしか構成されるしかないのが現状である。つまり、支援者の必要性は言われるものの、実態としては市民のボランタリーな善意や担当者の熱意に委ねられている現実がある。それだけでは、市民の善意が

潰え去り、担当者の異動によって、支援者の育成が左右されてしまいかねない。そうではないとしたら、支援者の計画的な育成という課題が正面に据えられる必要があろう。そのためには、まず、現在活動している支援者のライフコースから、量的にも質的にも示唆を得なければならない。そのために支援者に対するインタビュー調査を行った。

以上の調査課題に対して、1年目に行政調査、2年目に保護者意識調査、及び支援者調査を行った。それぞれの結果と考察については本論に詳しく分析されている。ここでは、調査の目的との関連について、いくつか留意すべき点のみ指摘しておきたい。

一つには、まず行政調査であるが、これは昨年度の報告書で詳しく分析されている。ここでのポイントは、自治体間によって家庭教育支援について差異があり、そのことが「隔靴掻痒」状態を生じさせているのではないか、と考えられるのではないかという点にあった。確かに自治体によって、家庭教育支援の内容と方法については違いがあり、必要な支援策が届きにくいのではないかと考えられる面もあった。しかし、行政による支援策の充実は、「家庭教育支援づけ」にする危険性もあり、保護者が主体的に家庭教育にかかわっていくことを阻害する場合も生じさせかねない。行政としては、家庭教育に関する縦割り行政の弊害をなくし、行政目的の達成のためだけでなく保護者の要求との整合性を検討し、保護者の子どもへの主体的な関わりかたを育成していく支援策を創出していかなければならない。

二つには、保護者の立場からすれば、行政の直接的な支援策へ期待する面もあれば、そうではない場合もある点である。つまり、まだまだ「敷居が高い」という面もあれば、仮に敷居が低くとも、行政の関与を受けるものではないとの考え方もある。しかし、いずれにしても、行政との回路をもちにくくなるという面では共通している。行政との回路をもちにくい状態をそのままにしておけば、場合によっては家庭の教育力の育成が困難になることも考えられる。だからこそ、これまでの行政の回路だけではなく、保護者の立場に寄り添った多様な回路づくりが求められることになる。

三つには、その一つの典型として、ボランタリーな家庭教育支援者に注目する必要がある。都市化の進行とは、共同体的・相互扶助的なムラ地域組織が解体し、行政が個別の家庭に対して直接サービスを行う過程として理解される。しかし実際には、財源やマンパワーには限界があることから、行政の代替としてボランティアに注目するという経緯をたどり、善意をもった家庭教育支援ボランティア頼みということになる。支援者インタビューから読み取れることは、家庭教育における行政でもなく保護者でもないという中間的領域の成立と活動の必要性であり、行政的な専門的業務ではない「職務」の成立がみられるのではないかという点である。いわば、教育領域におけるある種の「隙間」の成立であり、そこに弱くても効果的な半専門的「職務」がボランタリーな支援員たちによって成立してきているのではないかという点である。

以上の点については、まだ議論の過程にある。今後も、家庭・行政・支援者の関連については継続した調査・研究が必要であると同時に、支援者養成のプログラム開発にも着手する必要があろう。

Ⅱ　生涯学習基礎データ調査事業の概要

１　調査研究のテーマ

家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究

２　調査研究の期間

平成２２年度～２３年度

３　調査研究の趣旨

近年、家庭教育が重要視され、家庭教育への支援の必要性が高まっている。家庭における教育は全ての教育の出発点であり、家庭の教育力向上に向けた取組が様々な形で実施されている。しかし、核家族化や都市化、情報化の進展など社会状況の変化により、家庭の形態も多様化しており、支援の在り方もそのニーズに応えるものでなければならない。

そこで、本調査では佐賀県の家庭教育、家庭教育支援に関する現状と課題を調査分析し、家庭を支える地域や企業、関係団体、学校等の具体的な支援の在り方について研究する。そして、今後の家庭教育支援施策や事業の参考となる資料を関係団体等に提供する。

４　調査研究の進め方と経過

（１）生涯学習基礎データ調査研究委員会を設置し次に掲げる事項について検討を行った。

・調査・研究の方法
・効果的な事業展開
・調査報告書の作成

また、当委員会には調査票や分析資料作成について専門に話し合う、ワーキンググループを設置した。

＜平成２２年度～２３年度　調査研究委員＞　◎印委員長

委　員　氏　名	所　属　・　職　名
◎ 上 野 景 三	佐賀大学文化教育学部長
永 田　　誠	西九州大学短期大学部幼児保育学科准教授
大 橋 隆 司	小城市教育委員会こども課長
山 口ひろみ	特定非営利活動法人唐津市子育て支援情報センター長
橋 口 満 洋（平成 22 年度）	県くらし環境本部こども未来課副課長
新 保 哲 也（平成 23 年度）	
田 中 裕 子（平成 22 年度）	県教育庁学校教育課義務教育担当指導主事
庄 嶋美奈子（平成 23 年度）	
向 井 文 子	県教育庁社会教育・文化財課社会教育主事

＜平成２２年度～２３年度　ワーキンググループ＞　◎印グループ長

委　員　氏　名	所　属　・　職　名
◎永 田　　誠	西九州大学短期大学部幼児保育学科准教授
相 戸 晴 子	佐賀女子短期大学大学連携ＧＰコーディネーター
向 井 文 子	県教育庁社会教育・文化財課社会教育主事

（２）調査研究に関する基本的な考え方

佐賀県立生涯学習センターは、県民の生涯学習を推進する中核施設として、生涯学習に関する情報の提供、指導者の養成・研修、学習機会の提供等に取り組んでいる。その中で、社会状況の変化に対応する生涯学習のあり方についても調査研究を行い、県内の関係機関等へ施策立案の基礎資料となる情報の発信や、新たな課題に対する事業モデルの提示を行う拠点としての役割も担っている。

こうした当センターの役割から、取り組むべき地域社会の問題を考えた時、近年の少子高齢化や核家族化、単独世帯の増加、または地域コミュニティの衰退等に伴う、家庭教育力の低下の問題が浮上してきた。この問題は佐賀県のみならず、全国共通の課題であり、家庭教育の重要性、支援の必要性は日々高まっている。

今後、当センターにおいても、家庭教育支援者を育成する人材育成研修事業及び、保護者への学習機会の提供となる家庭教育講座のプログラム開発事業は、ますます重要な位置づけになってくるものと考える。

そこで、「家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究」というテーマのもと、佐賀県における「家庭教育、家庭教育支援」の現状と課題をつかみ、今後の支援の方向性・方策の検討を行うこととなった。保護者や家庭教育支援者、関係機関など対象を幅広く捉え、調査研究事業に取り組む。実施に当たっては、生涯学習基礎データ調査研究委員会を設置し、調査方法、内容を検討し、進めていく。

＜生涯学習基礎データ調査研究委員会の基本方針＞

①佐賀県立生涯学習センターとして行う家庭教育支援の方向性、方策を探る。
（佐賀県立生涯学習センターの事業、活動に資するものであること）
②県および市町、関係機関等での施策や事業の参考となる資料提供を行う。
③調査期間を２ヶ年に設定する。

・平成２２年度は、行政（県および各市町）調査を実施し、家庭教育支援、子育て支援の全体量や過不足の現状、課題について把握する。
（※報告書…行政編　平成２３年３月作成
アバンセホームページ（http://www.avance.or.jp/）で公開）

・平成２３年度は、保護者の実態調査を実施し、どのような家庭の何が課題なのか、支援を求めている家庭の姿をつかむ。また、家庭教育支援者の形成過程を調査し、これまでの家庭教育支援施策の成果を検証するとともに、今後の家庭教育支援者の養成に生かす。
（※報告書…保護者編・支援者編　平成２４年３月作成）

＜平成２３年度委員会のスケジュール＞

期　日	委員会	内　容
６月　７日	**第１回調査研究委員会**	**・調査研究の方向性の確認 ・調査方法の検討**
６月２８日	第１回ワーキング委員会	・調査対象者設定および調査内容の検討
７月１５日	第２回ワーキング委員会	
８月１１日	第３回ワーキング委員会	
８月２５日	**第２回調査研究委員会**	**・調査方法の決定 ・調査票の検討**
９月　６日	第４回ワーキング委員会	・調査票内容の検討
１０月２６日 ～ １１月１４日	保護者アンケート調査の実施、調査票回収	
１２月１３日 ～ １２月２４日	家庭教育支援者へのヒアリング調査の実施	
２月　８日	**第３回調査研究委員会**	**・調査結果報告および報告書のとりまとめについて**
３月　６日	第５回ワーキング委員会	・調査結果分析
３月２８日	**第４回調査研究委員会**	**・調査結果最終報告および総括**

Ⅲ　保護者アンケート調査の結果

１　調査の名称

子育てに関する保護者アンケート

２　調査の概要

（１）調査の目的

保護者の子どもとのかかわり、地域社会とのかかわりについての現状を把握し、今後の本県における家庭教育支援、子育て支援の在り方を探るための基礎データとする。

（２）調査の対象

※県内教育事務所（５ヶ所）所管区域の市・町より各１校を抽出し、計１０校の小学１年生の保護者９８３人を対象に実施した。

ただし、佐城教育事務所の所管区域は佐賀市、多久市、小城市のため、３市から２校を抽出した。

※佐城教育事務所を「佐城地区」、三神教育事務所を「三神地区」、杵西教育事務所を「杵西地区」、東松教育事務所を「東松地区」、藤津教育事務所を「藤津地区」と記載する。

（３）調査の方法

佐賀県立生涯学習センターから直接各調査協力小学校に調査票を持参し、学級担任をとおして各家庭に配布し記入をお願いした。調査票の回収も各家庭より学級担任に提出してもらい、佐賀県立生涯学習センターが直接各学校に訪問し回収した。

（４）調査期間

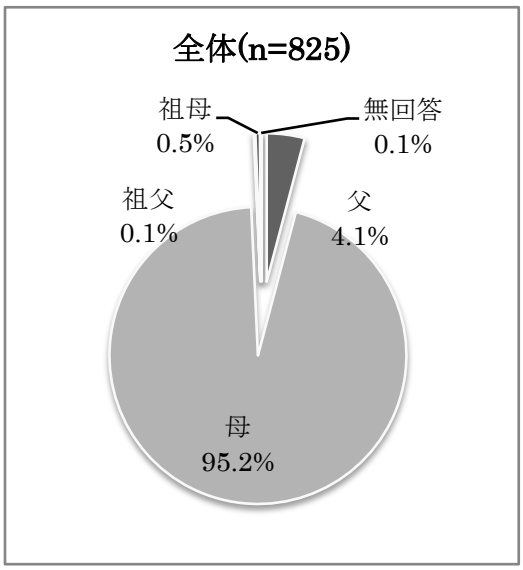
平成２３年１０月２７日（木）～１１月１４日（月）

（５）アンケート回収状況

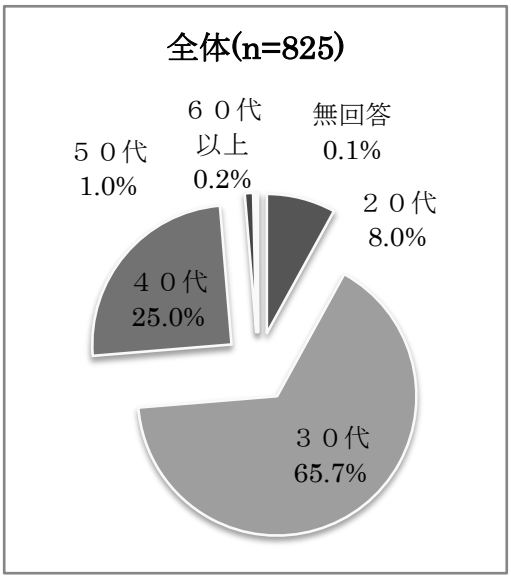
	配布数	回収数	回収率
佐城地区（２校）	２７６部	２３０部	８３．３％
三神地区（２校）	２３１部	１９２部	８３．１％
杵西地区（２校）	１８３部	１５６部	８５．２％
東松地区（２校）	１６７部	１３５部	８０．８％
藤津地区（２校）	１２６部	１１２部	８８．９％
計（１０校）	**９８３部**	**８２５部**	**８３．９％**

３　集計結果

問１　あなたについて（お子さんからみた続柄）



問２　あなたの年齢について

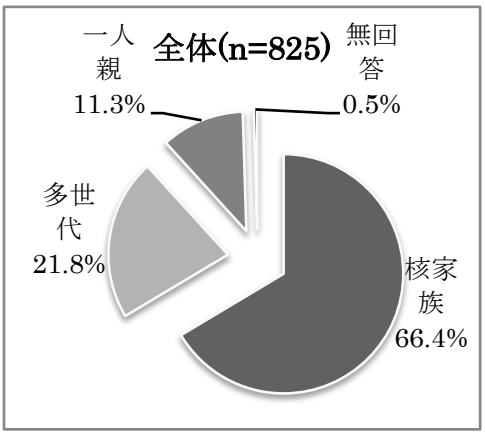


	20代	30代	40代	50代	60代以上	無回答	計 上段(人) 下段(%)
父	2	23	6	2	1	0	34
	0.2%	2.8%	0.7%	0.2%	0.1%	0.0%	4.1%
母	64	519	199	2	0	1	785
	7.8%	62.9%	24.1%	0.2%	0.0%	0.1%	95.2%
祖父	0	0	0	1	0	0	1
	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%
祖母	0	0	0	3	1	0	4
	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.1%	0.0%	0.5%
無回答	0	0	1	0	0	0	1
	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
計	66	542	206	8	2	1	825
	8.0%	65.7%	25.0%	1.0%	0.2%	0.1%	100.0%

母親による回答が９５．２％と圧倒的で、年代別にみると３０代の保護者からの回答が６５．７％と最も多い。

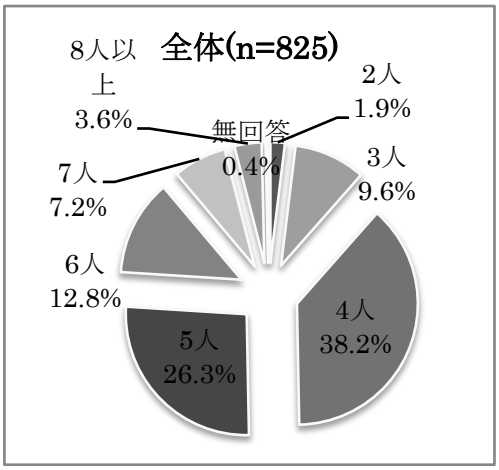
問３　世帯の家族構成、家族人数および子どもの人数について

（家族形態）



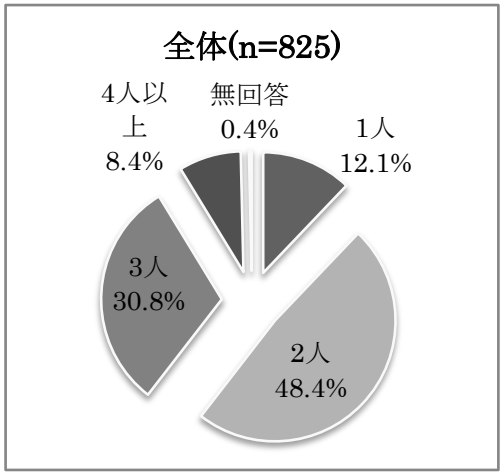
両親とその子どもからなる核家族の割合が、６６．４％と最も多い。多世代同居は２１．８％で、その内訳は３世代同居１９．１％、４世代同居２．７％であった。また、母親または父親の片方いずれかと、その子どもからなる一人親家庭の割合は１１．３％であった。

（家族人数）



家族人数は４人が３８．２％で最も多い。次いで５人家族が２６．３％となっている。

（子どもの数）

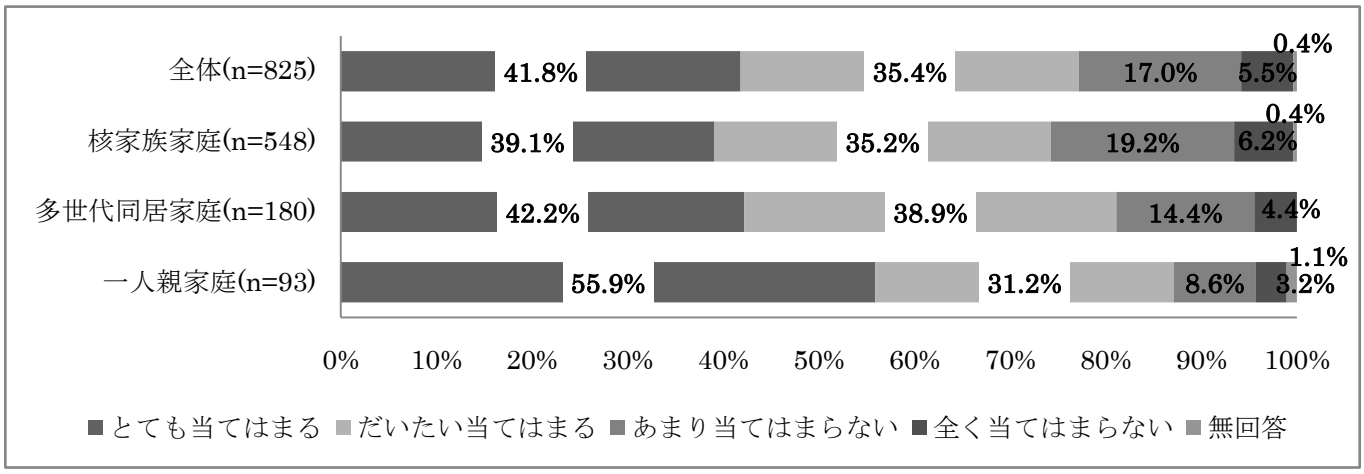


子どもの数は２人が４８．４％で最も多い。次いで３人が３０．３％、一人っ子は１２．１％。

		子どもの人数					計
		1人	2人	3人	4人以上	無回答	
家族形態	核家族	6.9%	34.2%	20.5%	4.8%	0.0%	66.4%
	多世代	1.8%	9.8%	7.9%	2.3%	0.0%	21.8%
	一人親	3.4%	4.4%	2.3%	1.2%	0.0%	11.3%
	その他・無回答	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.4%	0.5%
計		12.1%	48.4%	30.8%	8.3%	0.4%	100.0%

家族形態と子どもの人数からみると、両親と子ども２人の核家族家庭が３４．２％と最も多く、次いで両親と子ども３人の核家族家庭が２０．５％となっている。

問4　　日に一度は、家族全員が揃って食事をとっている



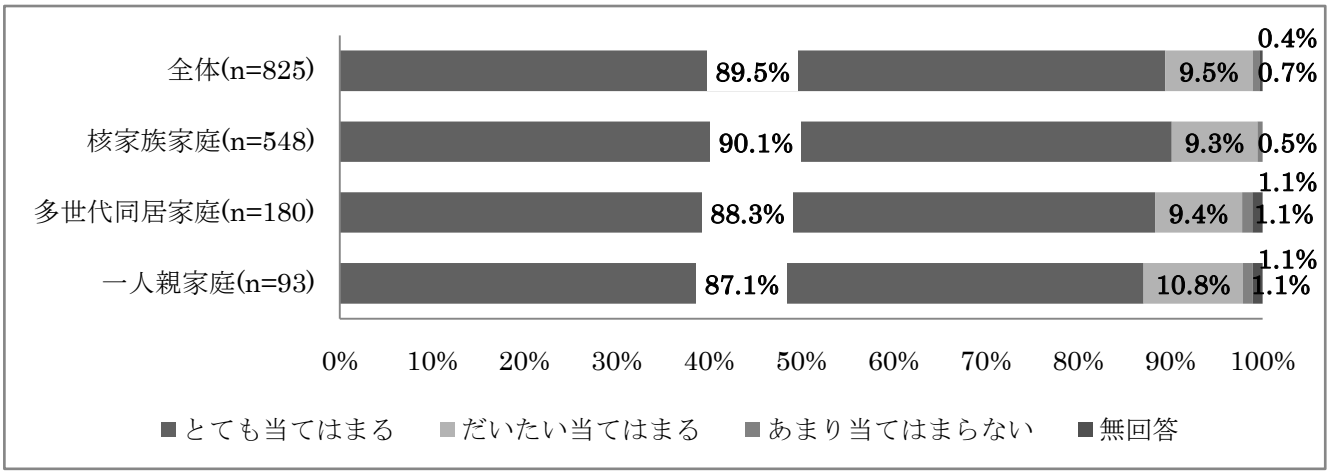
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて７７．２％。８割近い家庭が日に一度は家族全員で食事をとっていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は２２．５％で、その内、５．５％の家庭で家族全員が揃って食事をとることがないと回答している。

【家族形態別集計】

一人親家庭が他の家族形態と比べ、日に一度は家族全員で食事をとっていると回答した割合が８７．１％で最も高い。反対に、核家族家庭では家族全員で食事をとっていると回答した割合が、他の家族形態の回答割合と比べ３．１～１６．８ポイント低い。

問5　　子どもは、毎日、朝食を食べている



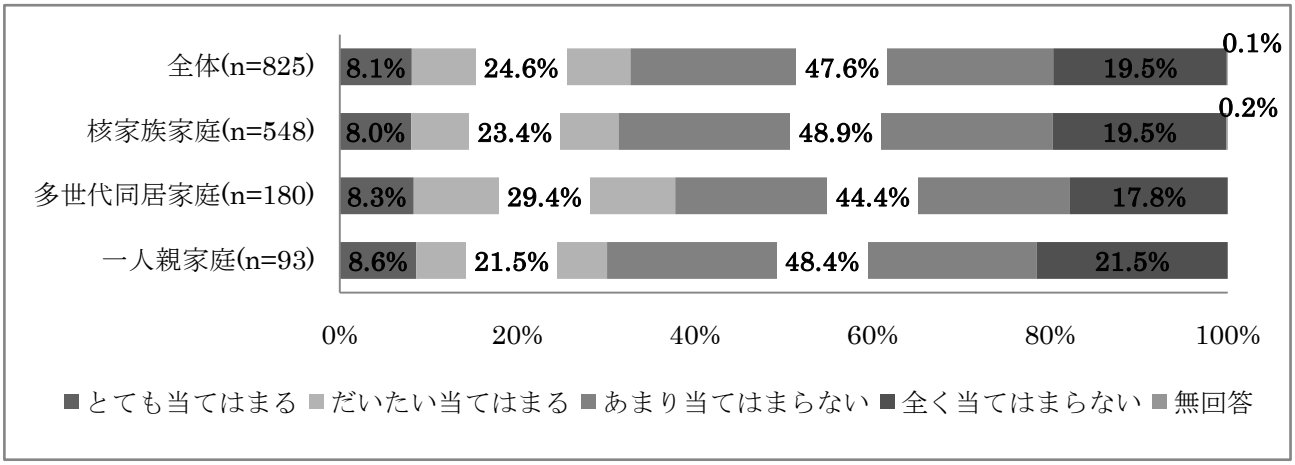
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせると９９．０％の家庭で、子どもは毎日、朝食を食べていると回答している。「あまり当てはまらない」は０．７％とごくわずかで、「全く当てはまらない」と回答した家庭はなかった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられない。

問6　　学校がある日の朝は、親などが声をかけなくても子どもは自分で起きる



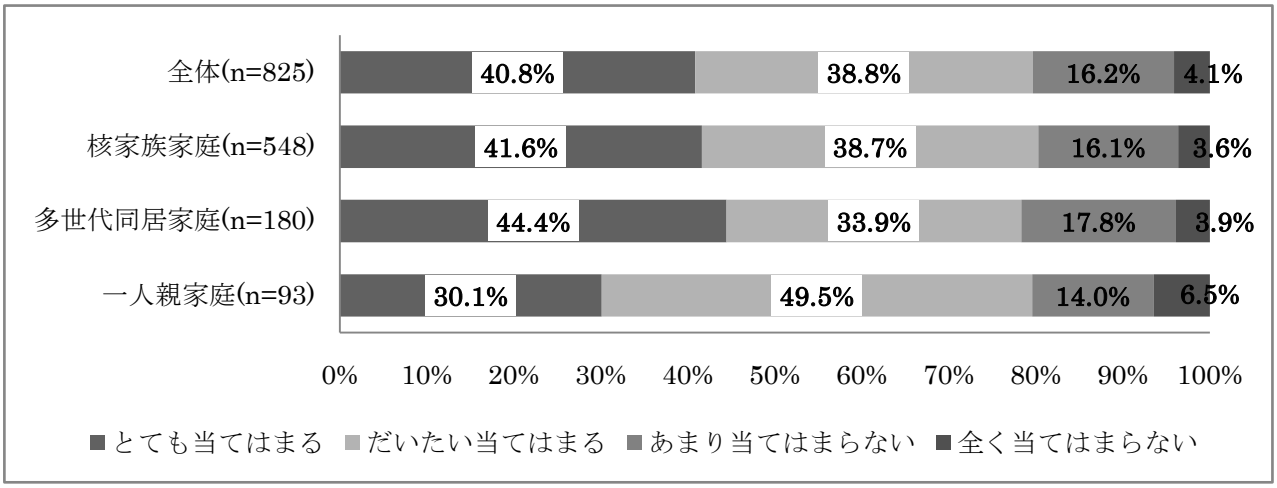
【全体集計】

子どもは自分で起きると回答した家庭は「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と合わせても３２．７％。自分で起きることができないと回答した家庭が「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」合わせて６７．１％。７割に近い家庭で子どもの起床には親などの声かけを必要としている。

【家族形態別集計】

多世代同居家庭が子どもは自分で起きると回答した割合が３７．７％で、他の家族形態と比べ６．３～７．６ポイント高い。

問7　　平日、子どもは 21 時頃には就寝している



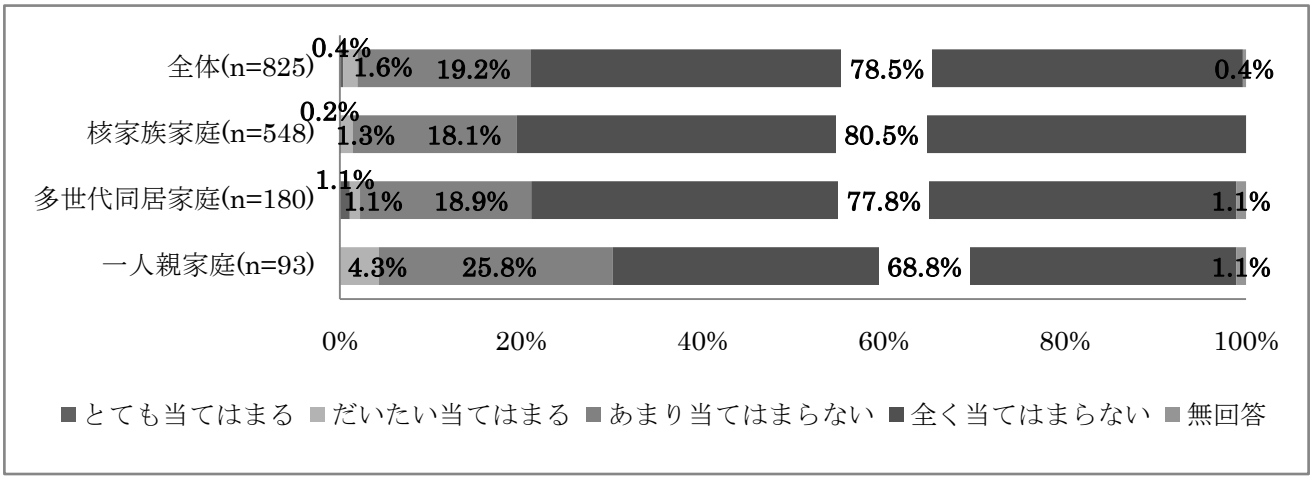
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて７９．６％で、約８割の家庭で、子どもは２１時頃までには就寝している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて２０．３％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭の「とても当てはまる」と回答した割合が、他の家族形態と比べ１１．５～１４．３ポイント低い。

問8　　子どもを連れて、家族で夜 22 時以降まで外出をすることが、週に 1 回以上ある



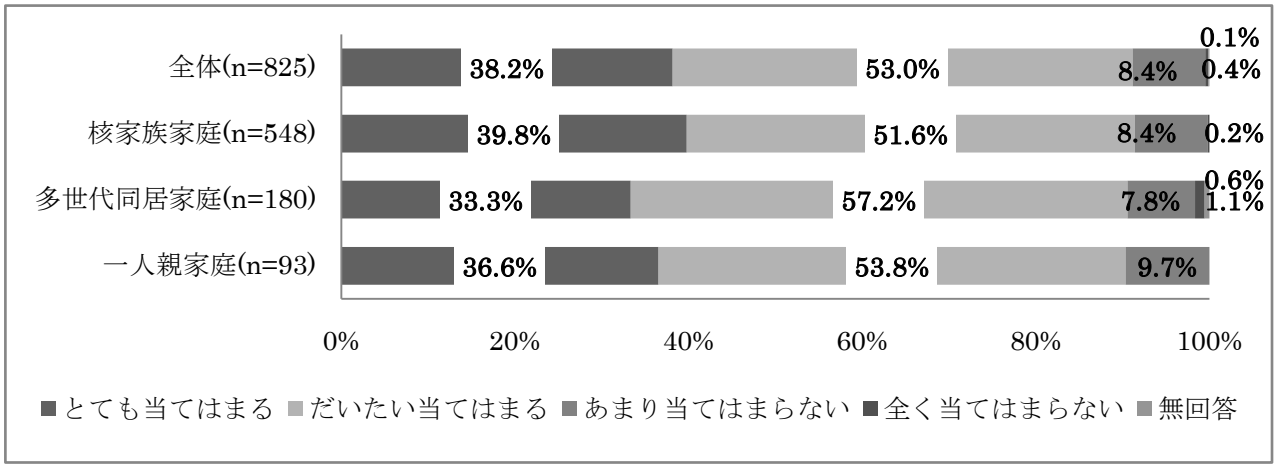
【全体集計】

「全く当てはまらない」と回答した家庭が７８．５％あり、「あまり当てはまらない」と合わせると９７．７％が、夜遅く子どもを連れた外出はないと回答している。ただ、２．０％ではあるが、週に１回以上子どもを連れた２２時以降の外出がある（「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」）と回答している。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭で「だいたい当てはまる」と回答した割合が４．３％あり、他の家族形態と比べ２．１～２．８ポイント高い。

問9　　休日などに家族で遊んだり、出かけたりすることがある



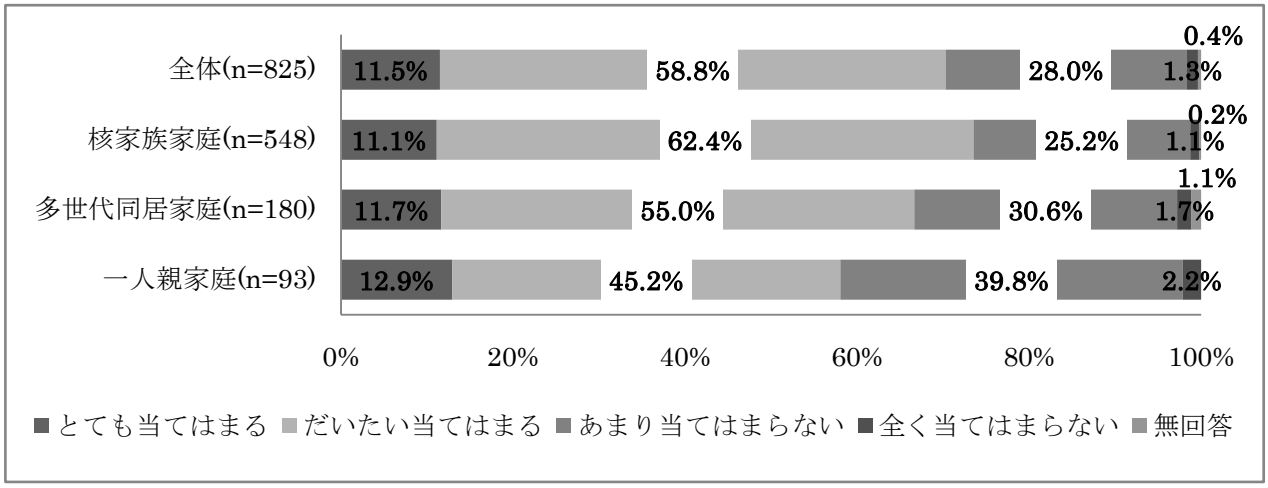
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて９１．２％で、ほとんどの家庭で休日などは家族で過ごす機会をもっている。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した家庭は合わせて８．８％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、核家族家庭の「とても当てはまる」回答割合が３９．８％で、他の家族形態と比べ３．２～６．５ポイント高い。

問10　　子どもは、自分の道具や服など、自分で片付けている



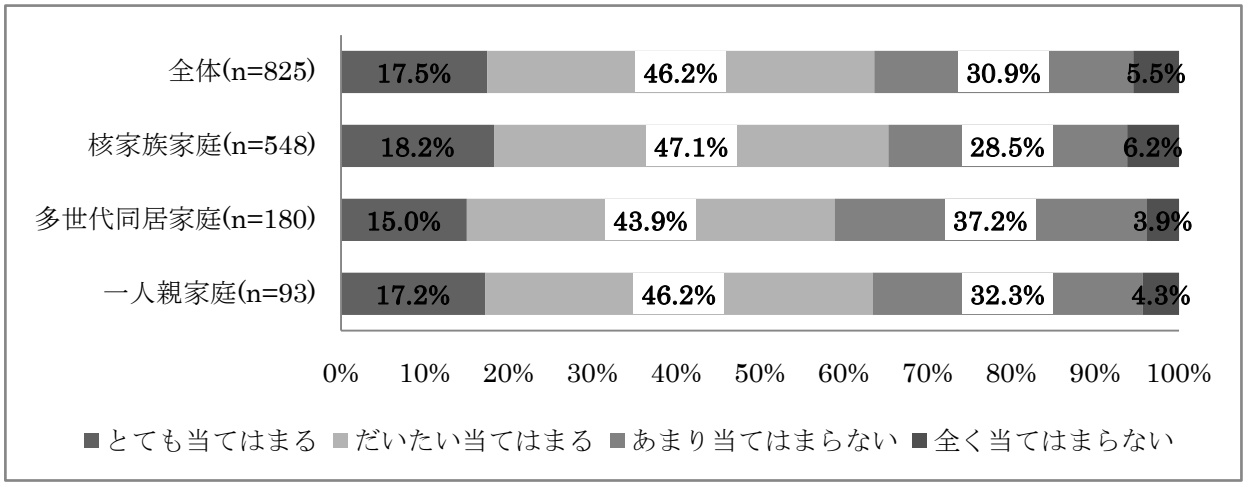
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて７０．３％で、７割の家庭で子どもは自分で片付けができると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した家庭は合わせて２９．３％あった。

【家族形態別集計】

核家族家庭が他の家族形態と比べ、子どもは自分で片付けができていると回答した割合が６．８～１５．４ポイント高い。

問11　　平日に、子どもがテレビを見る時間やゲームをする時間などは親子で話し合って決めている



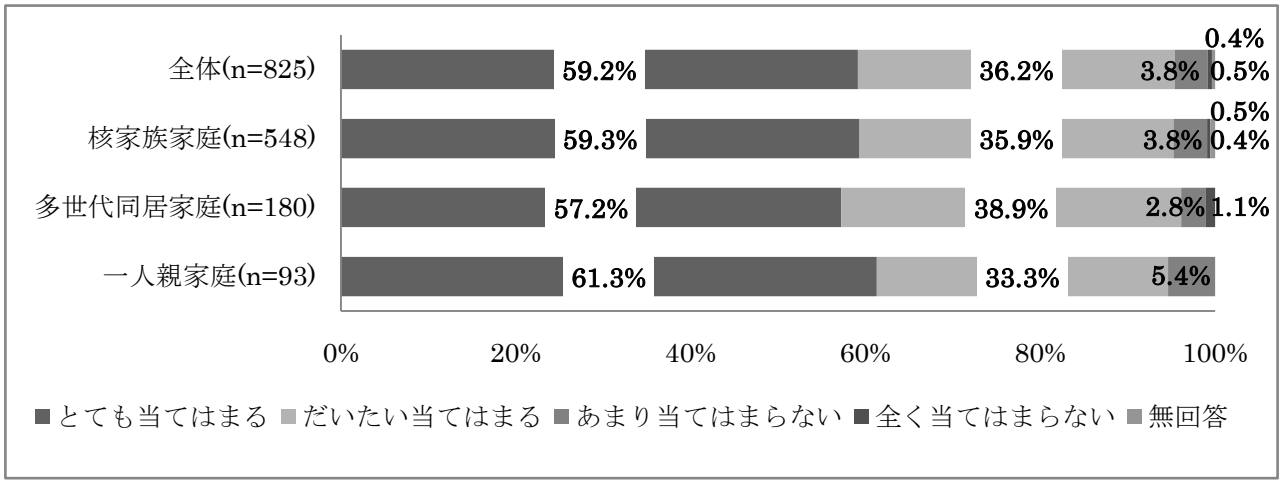
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて６３．７％で、約６割の家庭でテレビやゲームのルールを決めていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した家庭は合わせて３６．４％あった。

【家族形態別集計】

多世代同居家庭が他の家族形態と比べ、ルールを決めている回答割合が４．５～６．４ポイント低い。

問12　　子どもには、宿題や家庭学習をするように声をかけている



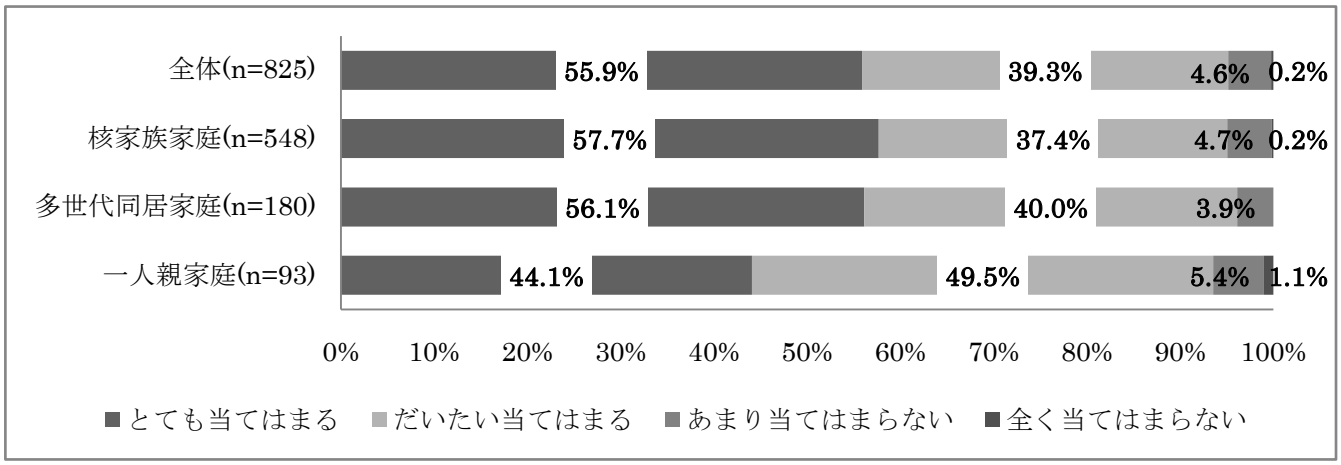
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて９５．４％で、ほとんどの家庭で子どもへ宿題や家庭学習への声かけをしていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて４．３％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられない。

問13　　子どもの宿題の答え合わせをしたり、本読みにつきあったりする



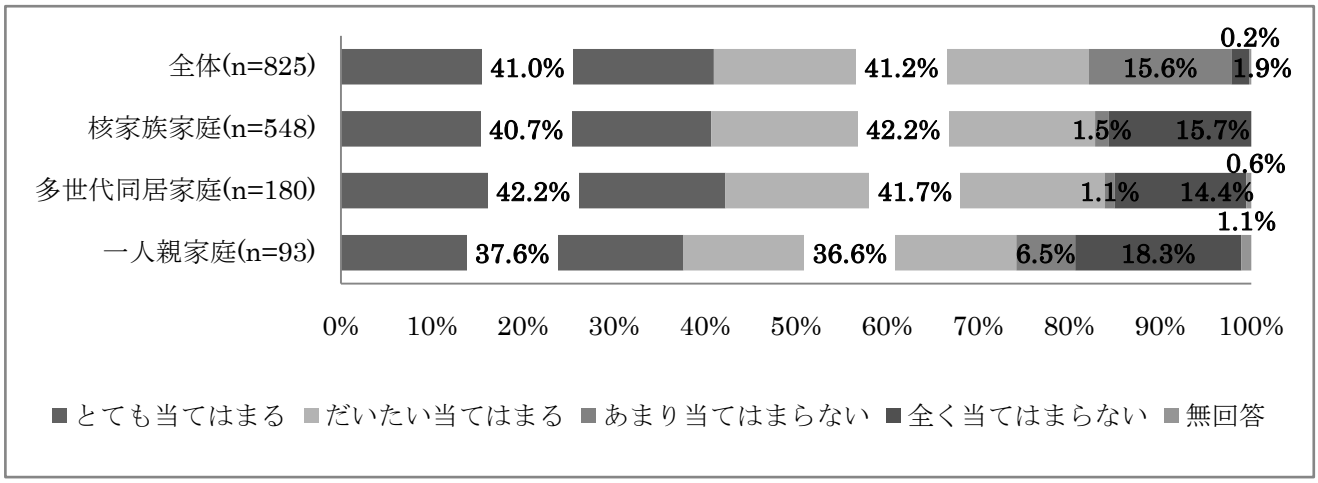
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて９５．２％で、ほとんどの家庭で子どもの宿題や家庭学習につきそっていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて４．８％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭の「とても当てはまる」回答割合が４４．１％で、他の家族形態と比べ１２．０～１３．６ポイント低い。

問14　　子どもの翌日の時間割や持っていく物については、親などが毎日、確認するようにしている



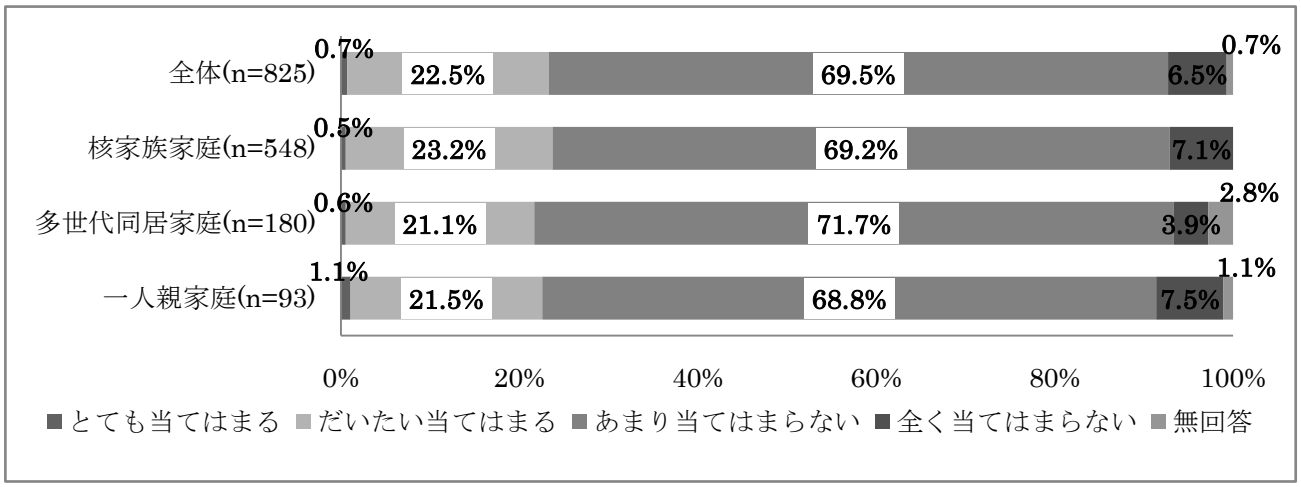
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて８２．２％で、約８割の家庭で時間割の確認や忘れものがないか確認している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて１７．５％あった。

【家族形態別集計】

一人親家庭が他の家族形態と比べ、時間割の確認や忘れもの確認をしている回答割合が８．７～９．７ポイント低い。

問15　　子どもが「欲しい」というものは、できるだけ買ってあげている



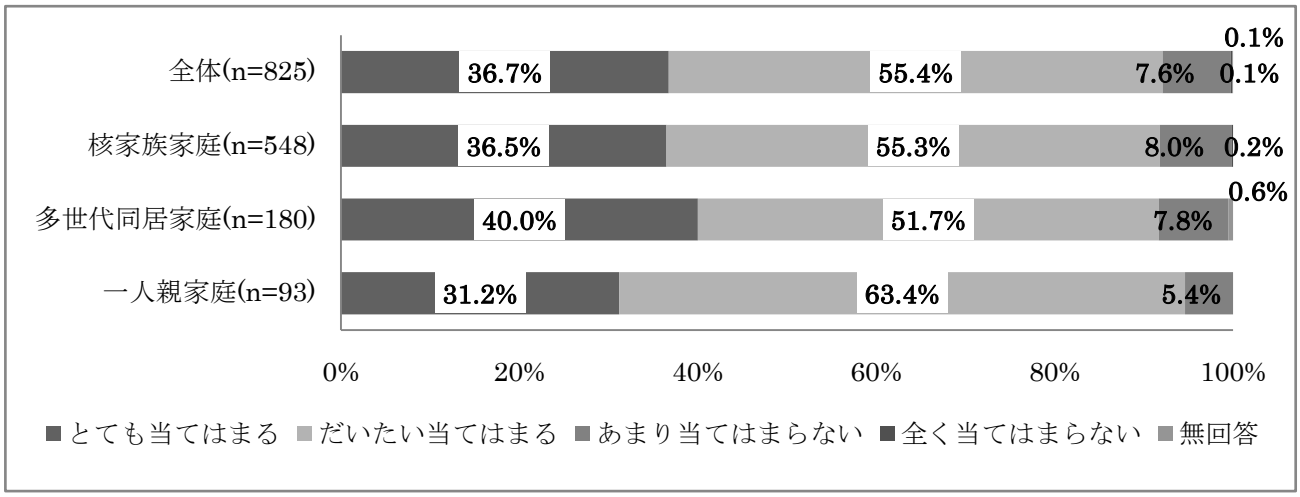
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて２３．２％で、子どもの欲しいものをできるだけ買ってあげていると回答した家庭は約２割。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した家庭が７６．０％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられない。

問16　　毎日、子どもの学校での出来事について話を聞いている



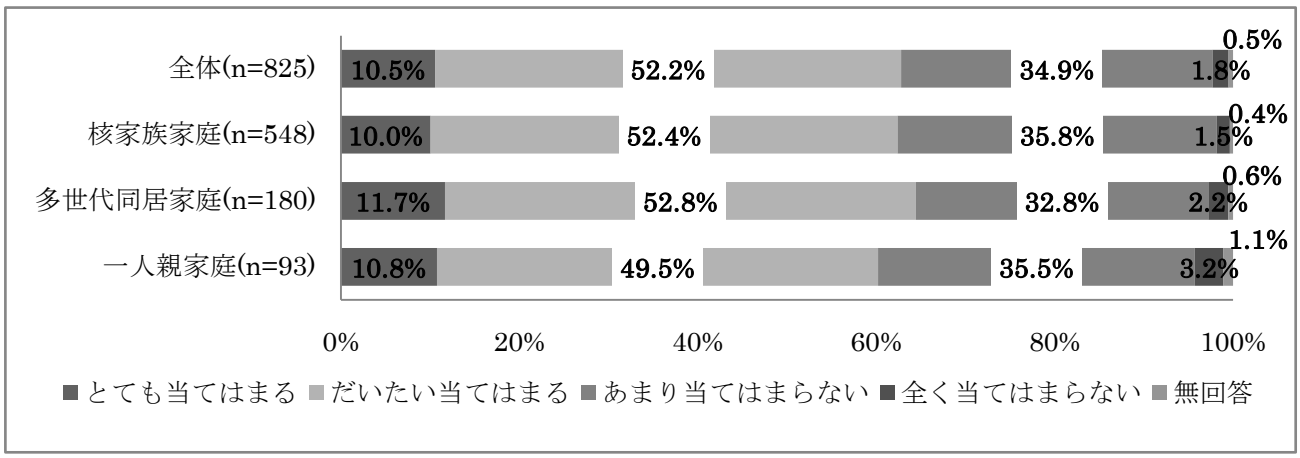
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて９２．１％で、ほとんどの家庭で子どもに学校での出来事について話を聞いていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて７．７％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭の「とても当てはまる」回答割合が３１．２％で、他の家族形態と比べ５．３～８．８ポイント低い。

問17　　社会の出来事などについて、子どもに話をしている



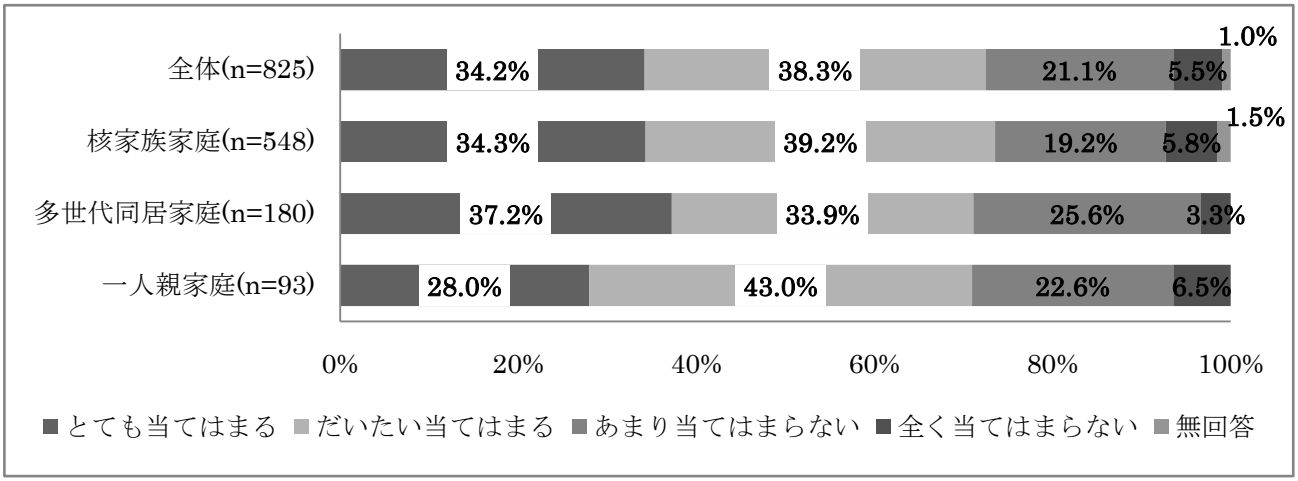
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて６２．７％で、子どもに社会の出来事などについて話をしている家庭は約６割にとどまっている。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」と合わせると３６．７％で、４割近い家庭で子どもに社会の出来事などの話をしてあげることができていない。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、多世代同居家庭が他の家族形態と比べ、子どもに社会の出来事などについて話をしている回答割合が２．１～４．２ポイント高い。

問18　　子どもが学校や放課後に一緒に遊ぶ友人について、5人以上名前を挙げることができる



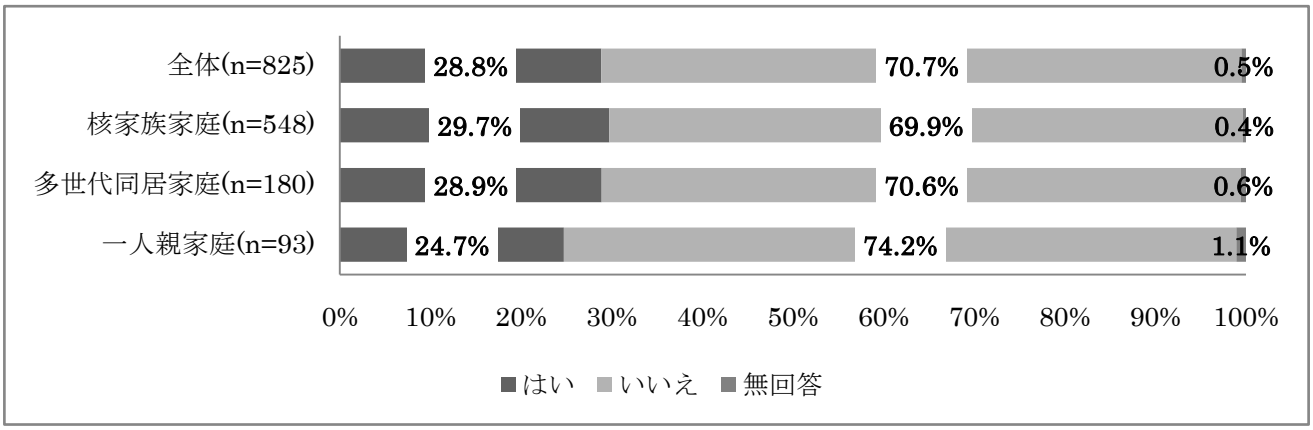
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて７２．５％で、約７割の家庭で子どもの友人を５人以上は知っていると回答している。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて２６．６％あった。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭の「とても当てはまる」回答割合が２８．０％で、他の家族形態と比べ６．３～９．２ポイント低い。

問19　　現在、子どもを学習塾（通信教育を含む）に通わせている



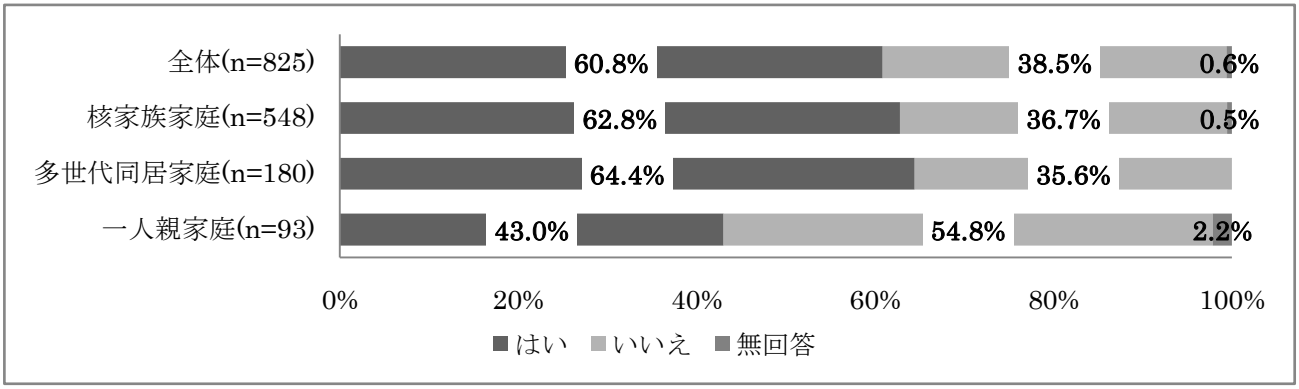
【全体集計】

約３割（２８．８％）の家庭で子どもを学習塾（通信教育含む）に通わせている。

【家族形態別集計】

核家族家庭が子どもを学習塾（通信教育含む）に通わせている回答割合が２９．７％と最も高い。

問20　　現在、子どもを習い事やスポーツクラブに通わせている

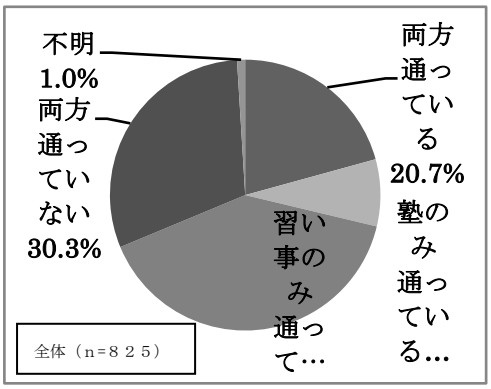


【全体集計】

約６割（６０．８％）の家庭で子どもを習い事やスポーツクラブへ通わせている。

【家族形態別集計】

多世代同居家庭が子どもを習い事やスポーツクラブへ通わせている回答割合が６４．４％と最も高く、一人親家庭では４３．０％で、他の家族形態と比べ１９．８～２１．４ポイント低い。



※参考

問１９、問２０の全体クロス集計

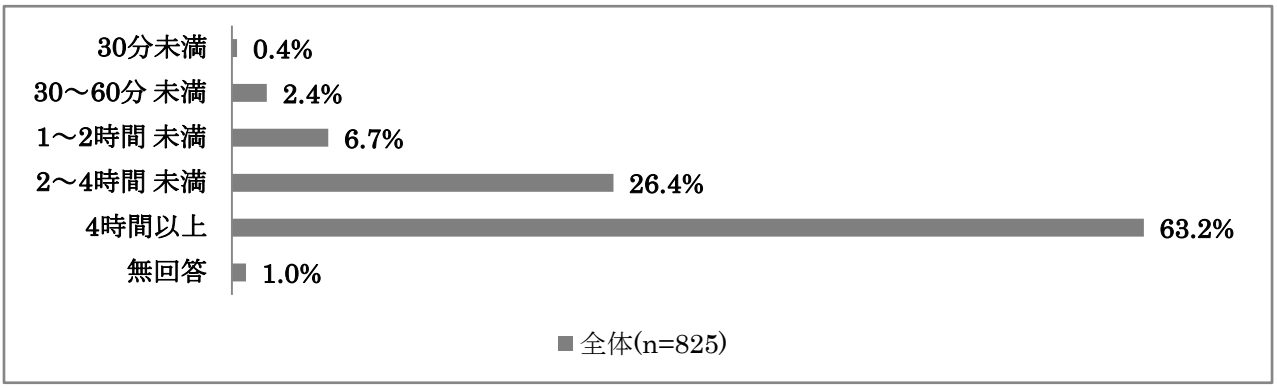
・「習い事」のみに通わせている家庭の割合が４０．０％と最も高い。

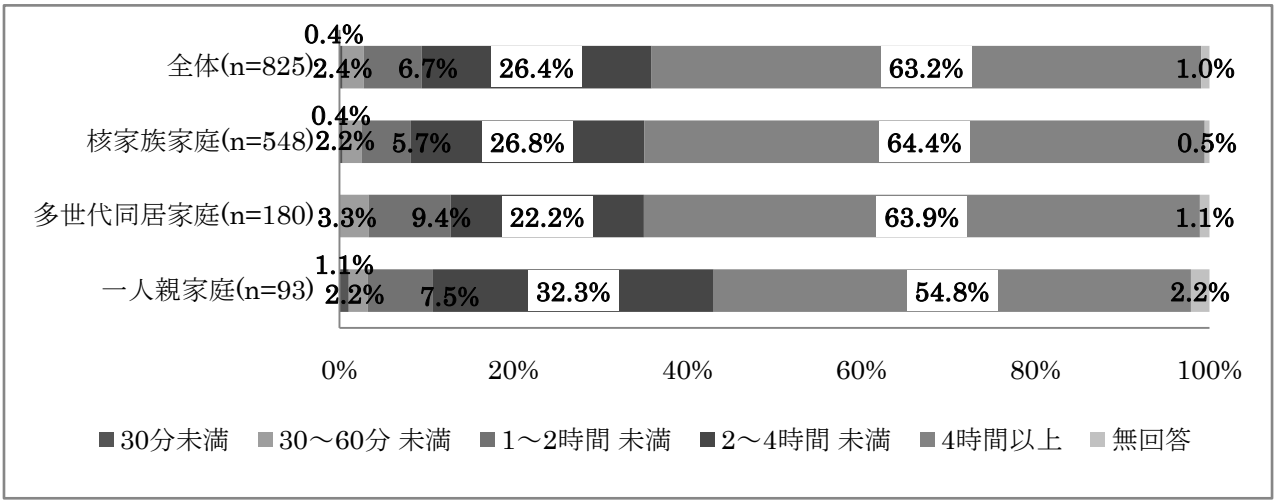
・どちらにも通わせていない家庭は３０．３％。

・「学習塾」「習い事」両方に通わせている家庭は２０．７％。

・「学習塾」よりも「習い事」へ通わせている家庭が多い。

＝　　**問21　　あなたが、平日（一日）に子どもと一緒に過ごす時間は、どの位ありますか**





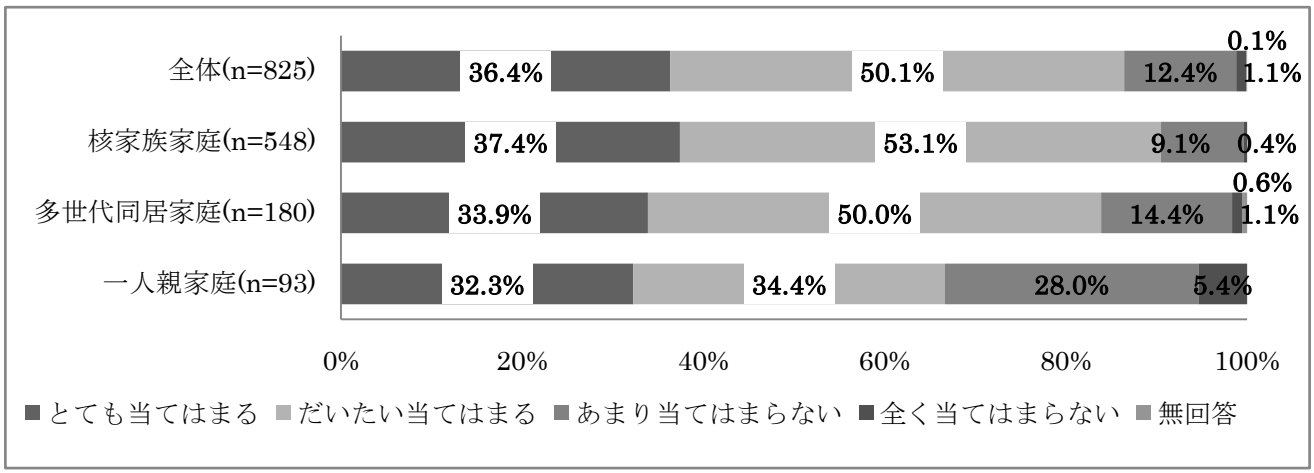
【全体集計】

平日に４時間以上は子どもと過ごす時間があると回答した家庭は６３．２％。「２時間以上４時間未満」と回答した家庭と合わせると８９．６％で、約９割の家庭で２時間以上は子どもと過ごす時間があると回答している。ただ、２．８％ではあるがと子どもと過ごす時間が１時間未満と短い家庭があった。

【家族形態別集計】

核家族家庭、多世代同居家庭ともに、約６割の家庭で４時間以上は子どもと過ごす時間があると回答している。一方、一人親家庭については４時間以上の回答割合が５４．８％でやや低いものの、２時間以上の回答割合でみると８７．１％あり、他の家族形態と比べても子どもと過ごす時間に大きな差はみられない。

問22　　市町報や回覧板、新聞における地域情報などは、目を通している



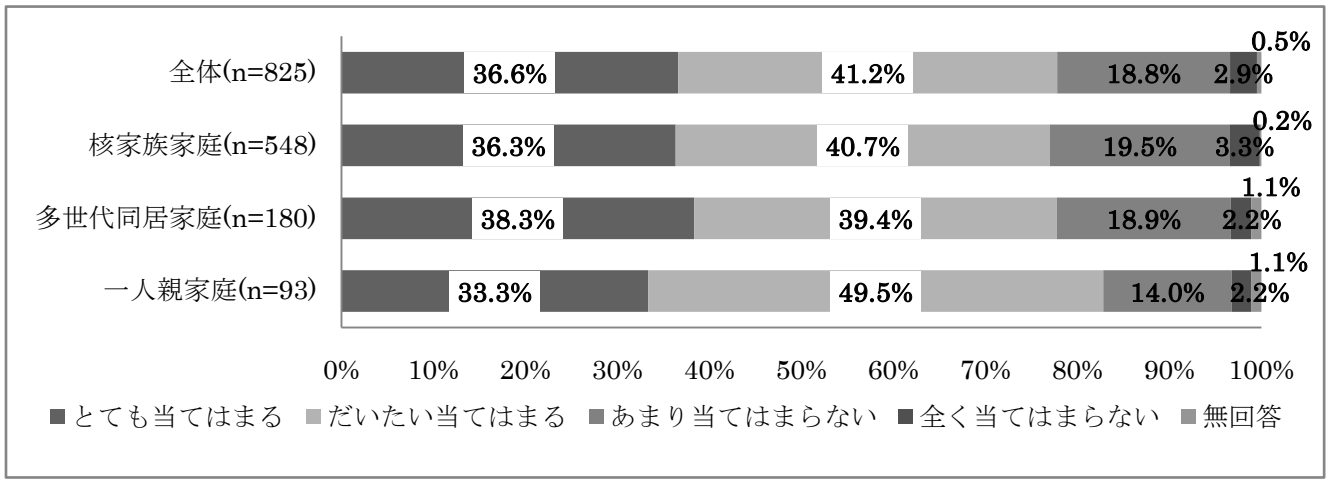
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて８６．５％で、８割以上の家庭で市町報や回覧板、新聞の地域情報に目を通している。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」は合わせて１３．５％。

【家族形態別集計】

一人親家庭が他の家族形態と比べ、地域情報に目を通している回答割合が１７．２～２３．８ポイントも低い。

問23　　子育てに関する地域(家族や友人以外)からの支援は、必要である



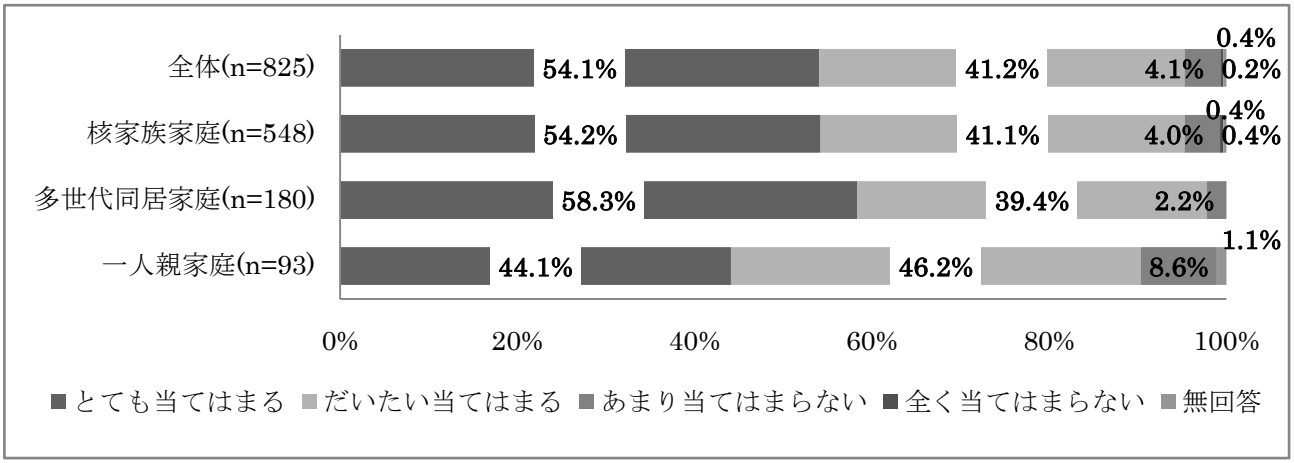
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて７７．８％で、８割近い家庭が地域からの支援は必要と回答している。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」は合わせて２１．７％で、約２割の家庭が地域からの支援の必要は無いと回答している。

【家族形態別集計】

家族形態別で回答に大きな差はみられないが、一人親家庭が子育てに関する地域からの支援は必要とする回答割合が８２．８％で、他の家族形態と比べ５．１～５．８ポイント高い。

問24　　子どもの学校の友人の保護者と会った際は、あいさつや会話をかわしている



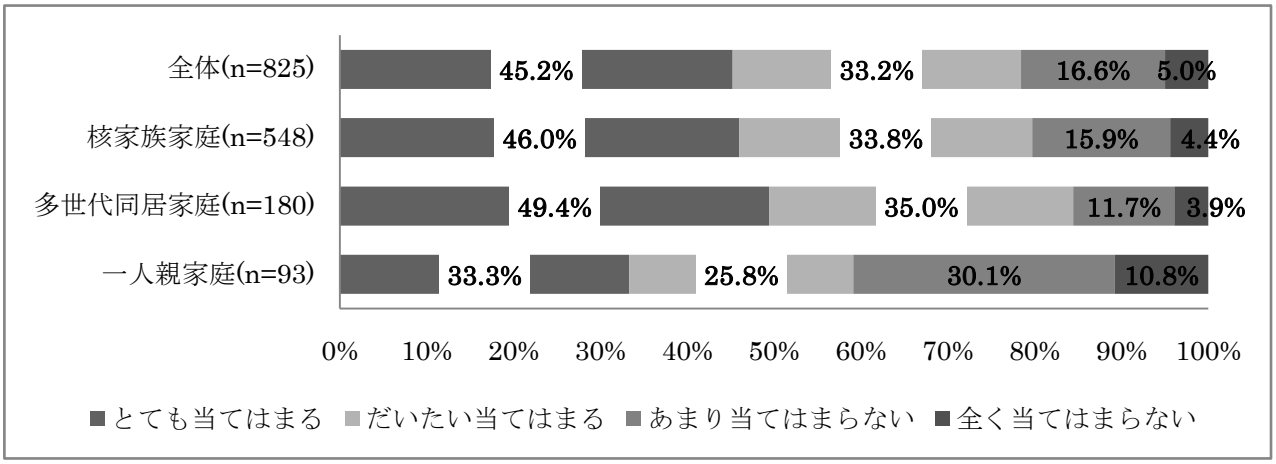
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と合わせて９５．３％で、ほとんどの保護者間であいさつや会話をかわしている。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」は合わせて４．３％。

【家族形態別集計】

核家族家庭、多世代同居家庭の保護者が、あいさつや会話を交わしている回答割合が高い。

問25　　同じ学校に通う子どもの保護者の中に、気兼ねなく、子育てや学校生活について相談できる人がいる



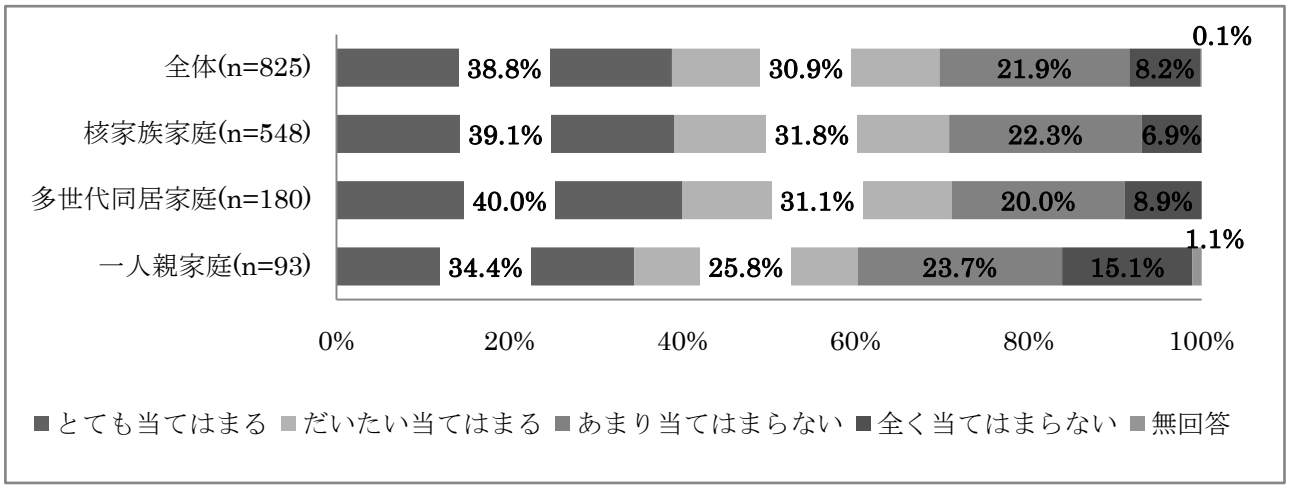
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と合わせると７８．４％で、８割に近い保護者が子どもの通う学校の保護者の中に相談できる人がいると回答している。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」合わせて２１．６％の保護者が、保護者同士で相談できる人がいないと回答している。

【家族形態別集計】

一人親家庭の保護者が、保護者同士で相談できる人がいる回答割合５９．１％で、他の家族形態の保護者と比べて２０．７～２５．３ポイントも低い。

問26　　小学校入学以後も、幼稚園・保育所やｻﾛﾝ・ｻｰｸﾙで出会った友人と今も連絡・交流を続けている



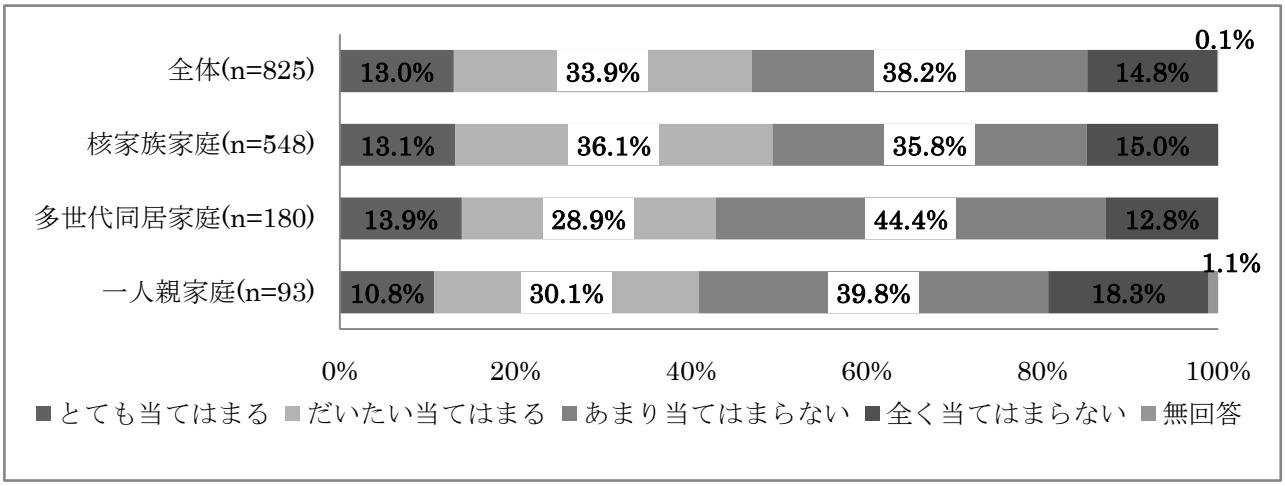
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と合わせると６９．７％で、約７割の保護者が小学校入学以後も子どもの就学前に出会った友人との連絡、交流を続けている。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」と合わせると３０．１％で、約３割の保護者は小学校入学以後の交流はないと回答している。

【家族形態別集計】

核家族家庭と多世代同居家庭では回答に大きな差はみられないが、一人親家庭が他の家族形態の保護者と比べ、子どもの就学前に出会った友人との連絡、交流を続けている回答割合が１０ポイントほど低い。

問27　　子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある



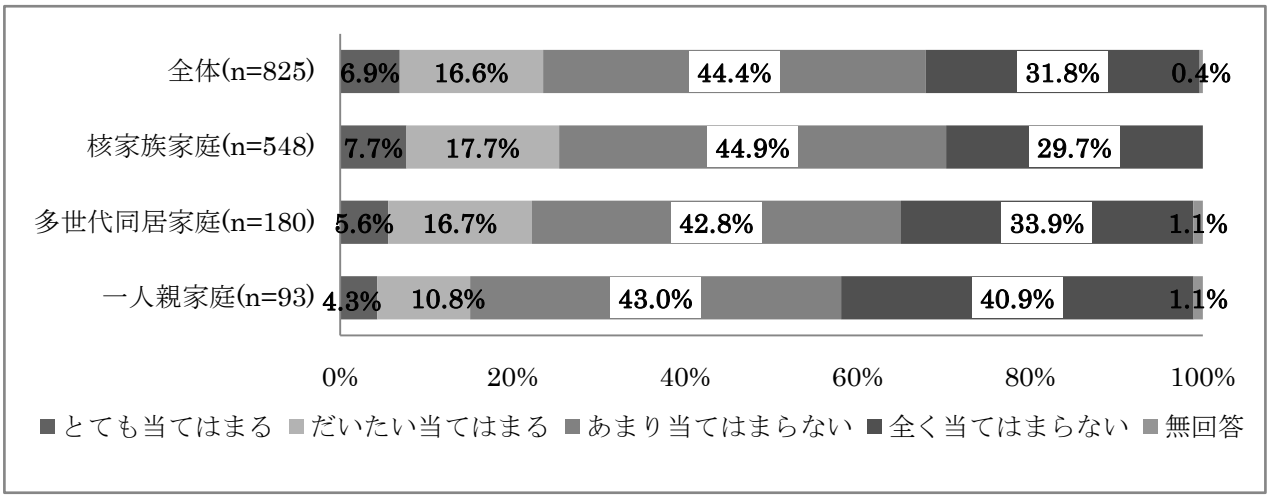
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて４６．９％で、子どもの預かり、子育ての相談に乗ることがあると回答した家庭は半数以下にとどまっている。「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」が合わせて５３．０％と上回っている。

【家族形態別集計】

全ての家族形態で子どもの預かり、子育て相談に乗ることがある回答割合は５０％を下回っている。

問28　　自らの子育ての経験を活かした活動（子育てサークル、ボランティアなど）を将来してみたいまたは現在、行っている



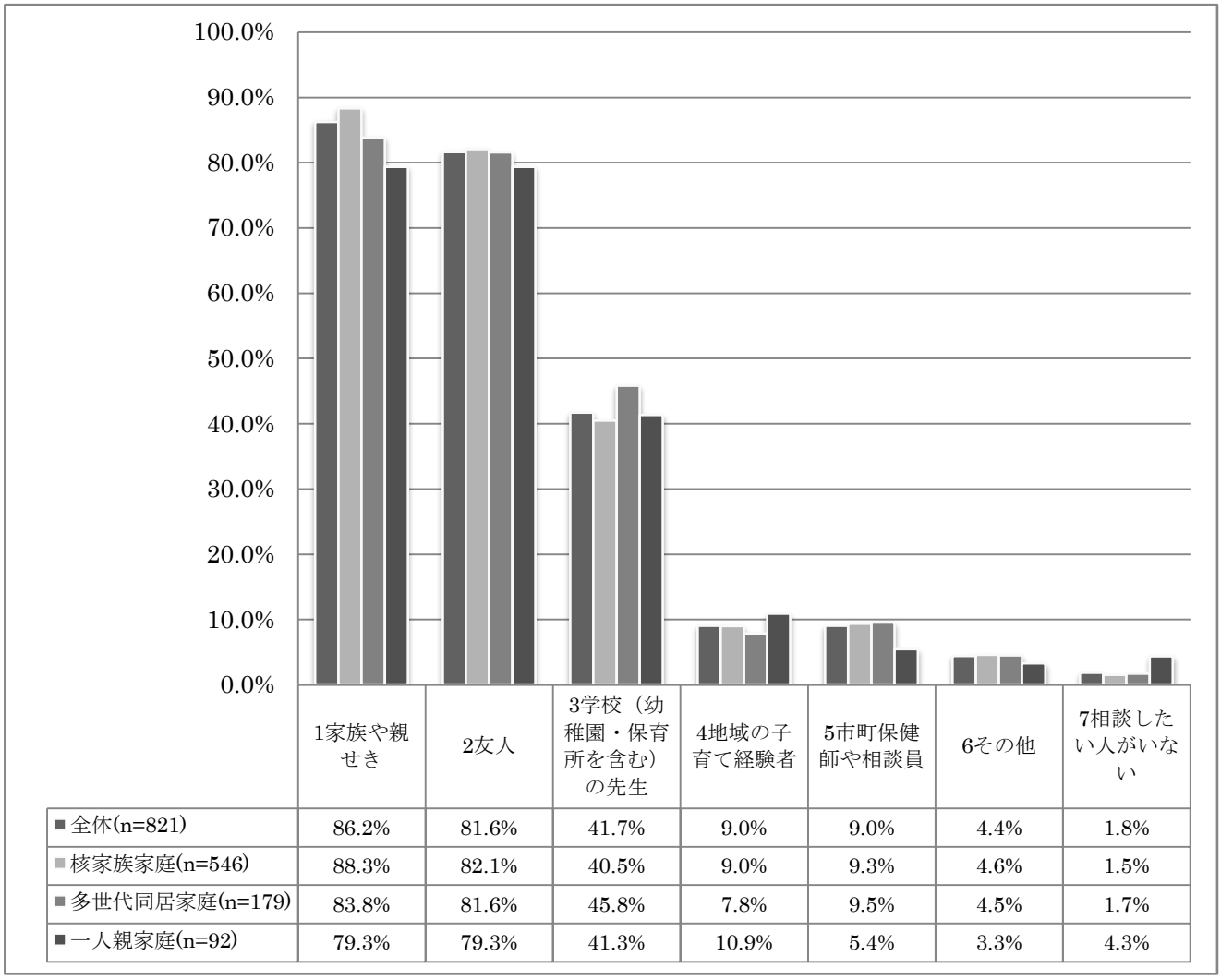
【全体集計】

「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」合わせて２３．５％。「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」と合わせると７６．２％で、子育て経験を活かした活動をしてみたい、行っていると回答した保護者は約２割。

【家族形態別集計】

核家族家庭の保護者が活動をしてみたい、行っていると回答した割合が２５．４％で、他の家族形態と比べ７．２～１０．３ポイント高い。

問29　　子育てについての悩みを誰に相談しましたか。また、相談しますか ＜複数回答＞



	1家族や親せき	2友人	3学校（幼稚園・保育所を含む）の先生	4地域の子育て経験者	5市町保健師や相談員	6その他	7相談したい人がいない
全体(n=821)	86.2%	81.6%	41.7%	9.0%	9.0%	4.4%	1.8%
核家族家庭(n=546)	88.3%	82.1%	40.5%	9.0%	9.3%	4.6%	1.5%
多世代同居家庭(n=179)	83.8%	81.6%	45.8%	7.8%	9.5%	4.5%	1.7%
一人親家庭(n=92)	79.3%	79.3%	41.3%	10.9%	5.4%	3.3%	4.3%

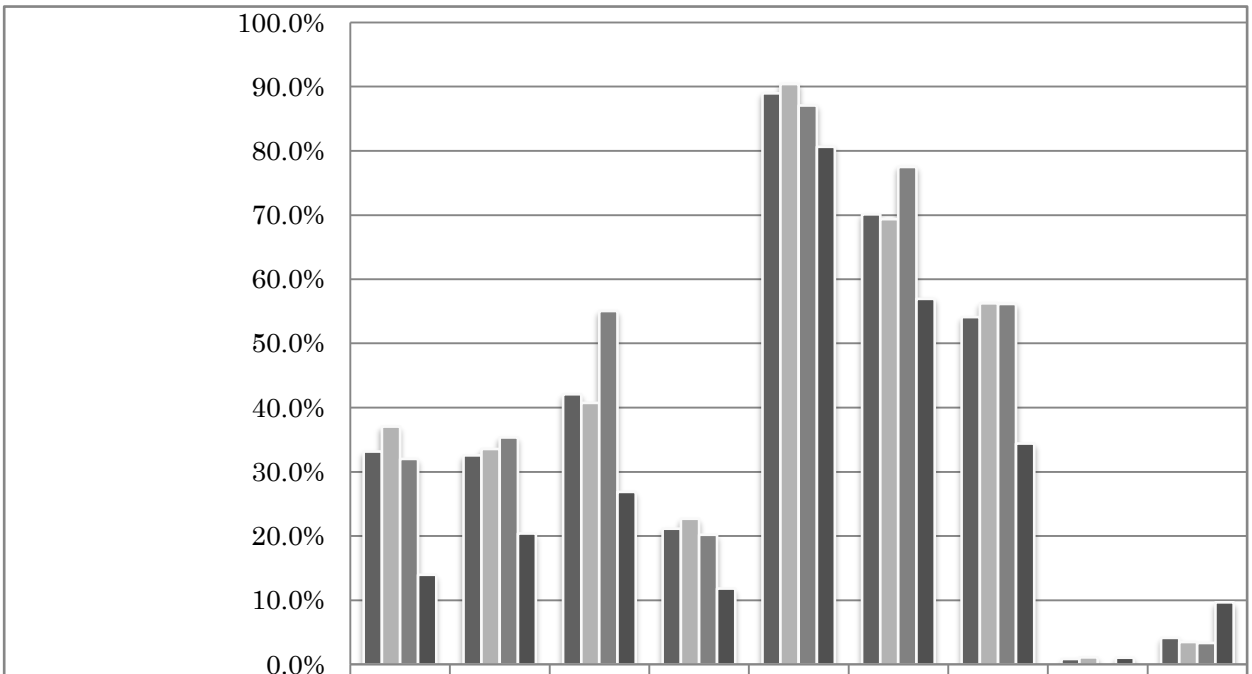
【全体集計】

子育てについての悩みの相談相手は「１．家族や親せき」が８６．２％と最も多く、次いで「２．友人」が８１．６％となっている。一方で、「４．地域の子育て経験者」「５．市町保健師や相談員」は、いずれも９．０％と低い。また、保護者の１．８％が「７．相談したい人がいない」と悩みを相談できる人がいないと回答している。

【家族形態別集計】

いずれの家庭においても、「１．家族や親せき」「２．友人」が相談相手とする回答割合が高い。また、一人親家庭の「７．相談したい人がいない」回答割合が４．３％で、他の家族形態と比べ２．６～２．８ポイント高い。

問30　　子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などに参加したことがありますか ＜複数回答＞



	1子育てサロンやサークル	2親子参加の体験イベント	3ＰＴＡ等の集まり	4子育てや家庭教育に関する講演会	5学校（幼稚園、保育所含む）の行事	6地域行事での祭りや文化祭など	7地域行事での清掃活動や話し合いなど	8その他	9参加したことはない
■全体(n=817)	33.2%	32.6%	42.1%	21.2%	89.0%	70.1%	54.1%	0.9%	4.2%
■核家族家庭(n=542)	37.1%	33.6%	40.8%	22.7%	90.4%	69.4%	56.3%	1.1%	3.5%
■多世代同居家庭(n=178)	32.0%	35.4%	55.1%	20.2%	87.1%	77.5%	56.2%	0.0%	3.4%
■一人親家庭(n=93)	14.0%	20.4%	26.9%	11.8%	80.6%	57.0%	34.4%	1.1%	9.7%

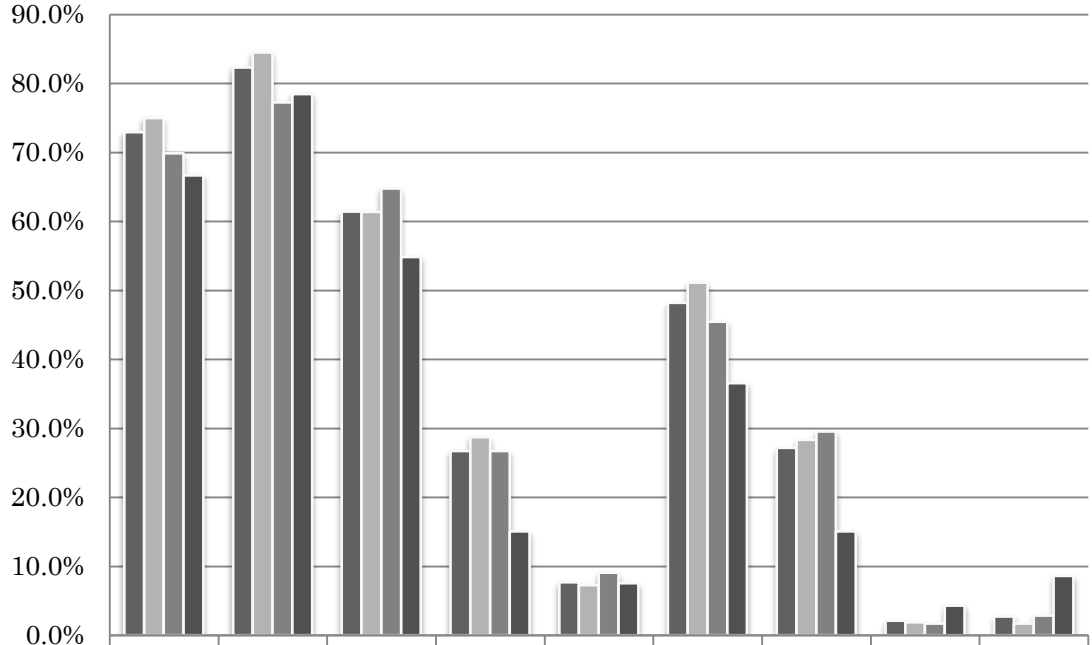
【全体集計】

子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などへの参加は「５．学校（就学前の幼稚園、保育園を含む）の行事」への参加が８９．０％と最も多い。次いで「６．地域行事での祭りや文化祭」が７０．１％、「７．地域行事での清掃活動や話し合い」が５４．１％となっている。「４．子育てや家庭教育に関する講演会」への参加は２１．２％で最も少なく、保護者の４．２％が「９．参加したことはない」と回答している。

【家族形態別集計】

いずれの家庭においても「５．学校（就学前の幼稚園、保育園を含む）の行事」参加の回答割合が高い。核家族家庭で「１．子育てサロンやサークル」参加の回答割合が高く、多世代同居家庭では「３．ＰＴＡ等の集まり」「６．地域行事での祭りや文化祭」への参加割合が高い。一人親家庭は他の家族形態と比べ参加の回答割合が低く、「９．参加したことはない」が９．７％で６ポイントほど高くなっている。

問31　　子育てや育児、家庭教育に関する知識や情報は、どこから得ていますか ＜複数回答＞



	1家族や親せき	2友人	3学校・幼稚園・保育所・児童クラブなどの先生	4地域の人（子育てサロンやサークル、近所の人）	5市町の相談機関（電話相談、児童館、母子保健センターなど）	6メディア（ﾃﾚﾋﾞ、ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ、携帯ｻｲﾄなど）	7子育てに関する本	8その他	9特にない
■全体(n=809)	72.9%	82.3%	61.4%	26.7%	7.7%	48.2%	27.2%	2.1%	2.7%
■核家族家庭(n=536)	75.0%	84.5%	61.4%	28.7%	7.3%	51.1%	28.4%	1.9%	1.7%
■多世代同居家庭(n=176)	69.9%	77.3%	64.8%	26.7%	9.1%	45.5%	29.5%	1.7%	2.8%
■一人親家庭(n=93)	66.7%	78.5%	54.8%	15.1%	7.5%	36.6%	15.1%	4.3%	8.6%

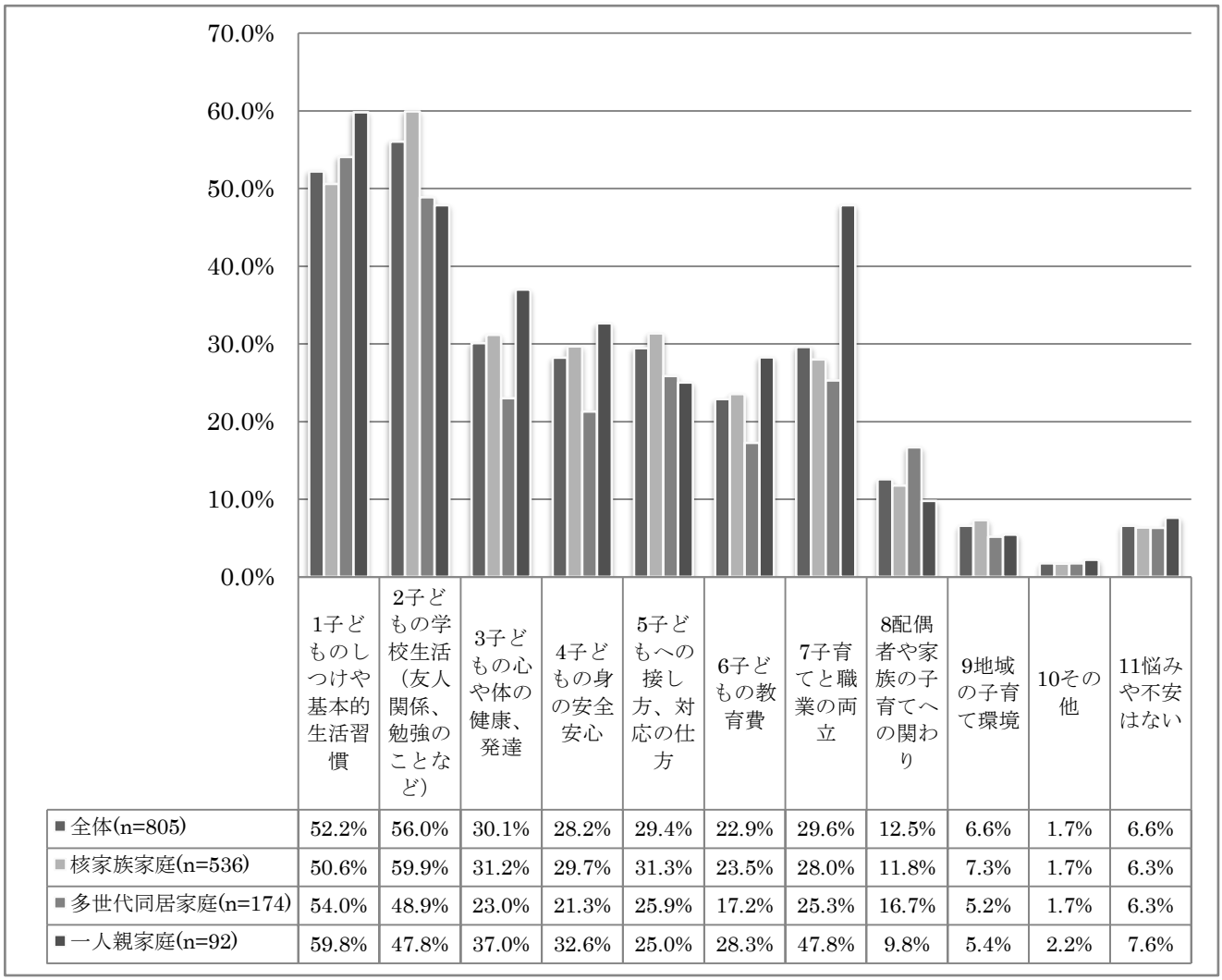
【全体集計】

子育てや育児、家庭教育に関する知識や情報は「２．友人」から得ている保護者が８２．３％と最も多い。次いで、「１．家族や親せき」７２．９％、「３．学校、幼稚園・保育所、児童クラブなどの先生」が６１．４％の回答となっている。「６．メディア（テレビ、インターネット、携帯サイトなど）」も４８．２％の回答があった。一方、「４．地域の人（子育てサロンやサークル、近所の人）」は２６．７％にとどまっており、「５．市町の相談機関（電話相談、児童館、母子保健センターなど）」については７．７％と少ない。また、保護者の２．７％が「９．特にない」、どこからも知識や情報を得ていないと回答している。

【家族形態別集計】

いずれの家庭においても「１．家族や親せき」「２．友人」「３．学校、幼稚園・保育所、児童クラブなどの先生」から知識や情報を得ていると回答した割合が高い。核家族家庭、多世代同居家庭においては、「６．メディア」「７．子育てに関する本」からも３０～５０％近い回答があった。一方、一人親家庭では「９．特にない」への回答が８．６％あり、他の家族形態と比べ５．８～６．９ポイント高い。

問32　　現在、子育てで感じる悩みや不安はありますか ＜複数回答＞



	1子どものしつけや基本的生活習慣	2子どもの学校生活（友人関係、勉強のことなど）	3子どもの心や体の健康、発達	4子どもの身の安全安心	5子どもへの接し方、対応の仕方	6子どもの教育費	7子育てと職業の両立	8配偶者や家族の子育てへの関わり	9地域の子育て環境	10その他	11悩みや不安はない
■全体(n=805)	52.2%	56.0%	30.1%	28.2%	29.4%	22.9%	29.6%	12.5%	6.6%	1.7%	6.6%
■核家族家庭(n=536)	50.6%	59.9%	31.2%	29.7%	31.3%	23.5%	28.0%	11.8%	7.3%	1.7%	6.3%
■多世代同居家庭(n=174)	54.0%	48.9%	23.0%	21.3%	25.9%	17.2%	25.3%	16.7%	5.2%	1.7%	6.3%
■一人親家庭(n=92)	59.8%	47.8%	37.0%	32.6%	25.0%	28.3%	47.8%	9.8%	5.4%	2.2%	7.6%

【全体集計】

子育てで感じる悩みや不安は、「２．子どもの学校生活（友人関係、勉強のことなど)」が５６．０％と最も多く、次いで「１．子どものしつけや基本的生活習慣」が５２．２％となっている。また、約３割の家庭で「３．子どもの健康、発達」「４．子どもの身の安全」「５．子どもへの接し方、対応の仕方」「７．子育てと職業の両立」が子育てで感じる悩みや不安の項目としてあがっている。一方、６．６％が「１１．悩みや不安はない」と回答している。

【家族形態別集計】

核家族家庭では「２．子どもの学校生活」「５．子どもへの接し方、対応の仕方」が他の家族形態と比べ回答割合が高く、多世代同居家庭では「８．配偶者や家族の子育てへの関わり」への回答割合が他と比べ高い。一人親家庭では「７．子育てと職業の両立」への悩みや不安が他と比べ１９．８～２２．５ポイントも高く、「１．子どものしつけや基本的生活習慣」「３．子どもの健康、発達」「４．子どもの身の安全」「６．子どもの教育費」など、複数の項目で他の家族形態よりも子育てで感じる悩みや不安が高い回答割合を示している。

問33　　育児や子育て、家庭教育等について、日頃、感じていることなどについて（自由記述）

※Ⅶ資料編に保護者から寄せられた声（231 件）を掲載。（73～85 ページをご覧ください）

４　調査結果の考察

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
生涯学習基礎データ調査事業　ワーキンググループ長
永田　誠（西九州大学短期大学部幼児保育学科准教授）

１．保護者アンケートの目的と分析の視点

（１）研究の課題と背景

日本において少子化社会への移行が明らかになったのは、1989 年の「1.57 ショック」であったが、問題の重要性がようやく認識されたのは、1994 年の「今後の子育て支援施策の基本方向について」からである。しかし、保育政策に偏重した政策展開は、合計特殊出生率の低下に歯止めがかからないという状況を生み、1999 年「少子化対策推進基本計画」、2003 年には「次世代育成支援対策推進法」が制定された。2004 年には、具体的な施策メニューを提示する「少子化社会対策大綱」が策定され、「超少子化社会」における「子ども・子育て応援プラン」がスタートした。

そして、2006 年に改正された教育基本法は、その第 10 条で「家庭教育」を新設、「父母その他の保護者は、この教育について第一義的責任を有するものであって生活のために必要な習慣を身につけるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」と謳い、国は「地域における家庭教育支援基盤整備形成事業」をスタートさせるなど、家庭教育支援を重視する方向を提示した。市町村においても小学校単位で「家庭教育支援チーム」を開設するなど、従来子育て支援事業で展開されてきた施策を社会教育の枠組みで再編する動きが見られている。

このような政策的変遷の中で、乳幼児を対象とする「子育て支援」と従来からの保護者（親）を対象とする「家庭教育」とをどのように結合させ、問題解決に有効な政策の枠組みをつくり出すかが、教育政策の新たな課題として登場してきた。すなわち、乳幼児期は厚生労働省系統の「子育て支援」、学童期以降は文部科学省系統の「家庭教育支援」という 2 本立ての政策を、地域の子育て家庭（保護者）への支援としてどのように一体化していくのかという課題である。

実際に、佐賀県内の市町を対象とした調査においても、全市町で家庭教育支援や子育て支援事業は実施されているものの、事業内容は一律ではなく、市町間で事業の取り組みに差が見られることが明らかとなっている。取り組みの差が生まれる要因としては、①市町規模や財政状況で、事業実施に自治体間での格差が生まれている、②縦割り行政による支援の総量の把握が十分でない、③自治体間・行政間の事業をつなぐコーディネート的な役割、機能が不足、の３点が指摘されている[1]。

こうしためまぐるしい政策転換の中で、総量として子育てに関する学習機会や支援が増加したことは間違いないだろう。しかし、家庭教育（支援）及び子育て支援の供給元が分散され、それによって学習機会や支援の内容、受け手となる対象等に重複や偏り、そして、本当に必要な家庭や保護者に行き届いていない、もしくは本当に必要な支援となりえていない状況が、今、全国的な状況として生まれてきているのではないだろうか。加えて、現代社会の様々な変動の中でますます厳しくなる「家族問題」「子ども問題」の多様な現実は、もはや家庭教育の領域だけでなく、福祉・保健等の領域を含めた複合的な実践が不可欠となっている。すなわち、家庭における子育て・親育ちの多様な現状と課題を明らかにし、その多様性に即したきめ細やかな支援プログラムの開発と展開が求められているのである。

[1] 佐賀県立生涯学習センター(アバンセ)「平成 22 年度生涯学習基礎データ調査事業」報告書『家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究～行政編～』平成 23 年 3 月

（２）調査研究の視点と概要

以上のような問題関心のもと、佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）における平成 22 年度からの生涯学習基礎データ調査委員会では、2 ヶ年にわたり「家庭教育支援」をテーマに調査研究に取り組んできた。初年度は、佐賀県内の行政における家庭教育支援事業の実施状況について把握した。最終年となる本年度は、①佐賀県内の小学校 1 年生をもつ保護者に対する質問紙調査と、②家庭教育・子育て支援者に対するヒアリング調査の 2 つの調査に着手した。本稿においては、保護者に対する調査結果について考察を行っていきたい。

今回の保護者調査においては、佐賀県内の 10 小学校（各教育事務所管内より 2 校ずつ選定）の小学校 1 年生の保護者を対象として調査を実施した。本調査では、保護者が日常の生活場面で、子どもや家庭を取り巻く地域社会とどのような関わりを有しているのかを把握し、今後の佐賀県における家庭教育支援・子育て支援の在り方を探るための基礎的データを得ることを目的として実施した。

調査項目としては、以下の通りである。

- ＦＳ（回答者の続柄、回答者の年齢、世帯の家族構成、子どもの人数）　問 1～3
- 子どもの日常生活状況と保護者の関わり　　問 4～21
- 保護者の日常生活状況と社会（学校・地域社会）との関わり　　問 22～32
- 自由記述（育児や子育て、家庭教育等について）　　問 33

今回の分析においては、委員会ならびにワーキンググループでの議論をもとに、①地域（学校）別集計、②家族形態別集計、③子育ち得点別集計、の 3 つの軸により分析を行った。

① 地域（学校）集計：調査対象として選定した 10 小学校（学校名は匿名とする）ごとに調査結果を比較する。これにより、本調査結果の全体的な傾向を把握するとともに、学校及び地域的特色を踏まえた要因について考察する。

② 家族形態別集計：問 3 をもとに算出した「核家族」「多世代」「ひとり親」の 3 家族形態から調査結果を比較することにより、家族形態という家庭の外形的要因の及ぼす保護者の子どもや学校・地域社会との関わりについて検討する。

③ 子育ち得点別集計：問 4 から問 18 までの子どもの日常生活に関する設問を、「とても当てはまる」＝4 点、「だいたい当てはまる」＝3 点、「あまり当てはまらない」＝2 点、「全く当てはまらない」＝1 点（問 8、問 15 については、「とても当てはまる」＝1 点、「だいたい当てはまる」＝2 点、「あまり当てはまらない」＝3 点、「全く当てはまらない」＝4 点の逆転項目とする。）と点数化し、それらの合計得点を算出した[2]。その合計得点から点数の高かった上位 25%を「高得点群」、下位 25%を「低得点群」として扱った。これにより、一般的に「望ましいであろう」とされる子どもの日常生活の状態にある家庭と、そうではない家庭における保護者の生活状況や子どもとの関わり、学校や地域社会における接点形成の状況について把握することを試みた。

なお、分析軸の①②の個々の調査結果については、別途まとめられているため、詳細については、そちらをご参照いただきたい。ここでは、①②における調査結果について総括的に言及するとともに、③における調査結果を考察したい。（①②の詳細な結果については、本報告書内を参照のこと。）

[2] なお、分析の関係から、対象となる設問において 1 問でも無回答であった回答者については、母数に含めないものとして扱った。

２．調査結果の考察

（１）地域（学校）別・家族形態別の結果が示すもの

今回の調査結果において確認できたことの１点目は、地域と家族形態の関係についてである。

現在、個人情報保護等の観点から、各種調査において家族形態や家庭の生活状況について把握することが難しくなっているが、今回の調査においては、あえてその点について、調査結果から得られた複数のデータを組み合わせることで明らかにしようと試みたことは、大きな成果の一つであったと言えよう。家庭の状況を把握することなしに、家庭教育支援・子育て支援を語ることは、ややもするならば机上の空論に陥ることが危惧されるからである。そうした点に鑑みるならば、今回の取り組みは、かなり正確な数値まで近付くことができたのではないだろうか。

具体的には、今回の集計の概要について述べると、県内５地域の中で、核家族の割合が高かったのは佐城地区（78.3%）と三神地区（73.4%）であった。一方で、多世代家庭が多かったのは、杵西地区（33.3%）と藤津地区（31.3%）であった。ひとり親家庭については、いずれの地域においても、10%前後存在しており、その生活スタイル等は異なれども、佐賀県内のどの地域にも一定数存在しており、学校教育において、もはや無視できない状況にあることが確認できた。

これを学校別に見ると、Ａ小学校では核家族（81.6%）とひとり親（15.5%）が高く、多世代はわずか 1.9%しか存在していない。一方で、Ｆ小学校、Ｈ小学校、Ｊ小学校では核家族の割合が 24%～42%と低く、多世代の割合が 44%～57%と高い地域であることが確認できた。また、ひとり親家庭の割合が多かったのは、Ｈ小学校（18.2%）、次いでＡ小学校（15.5%）であった。

したがって、県内における地域（学校）と家族形態の関係については、核家族化が県内全域において確実に進行している一方で、都市部（大規模校）と周辺部（小規模校）において、子どもが生活する家庭の状況は大きく異なっていることも確認された[3]。

2 点目の特徴としては、地域や家族形態の多様化と教育における経済的格差や教育に対する意識の差異についてである。

子ども（小学校１年生）を学習塾（通信教育を含む）に通わせている割合（問 19）は、地域別に見ると、最も高かった杵西地区（35.3%）と最も低かった東松地区（21.5%）と 10 ポイント以上の開きが見られた。これを学校別に見ると、Ｃ小学校（34.3%）、Ｅ小学校（31.8%）、Ｆ小学校（39.7%）、Ｉ小学校（35.4%）の４校において、塾に通っている割合が 30%を超えるという結果が示された。その一方で、Ｈ小学校（9.1%）、Ｊ小学校（19.1%）の 2 校では、通塾率は 20%未満であり、地理的条件や地域性が子どもの塾通いに関連していることが推察される。

これを家族形態別に見ると、ひとり親家庭における塾に通う割合（24.7%）、習い事等に通う割合（43.0%）のいずれにおいても、他の家族形態より、それぞれ-5 ポイント、-20 ポイントとなっており、ひとり親家庭における経済的状況の厳しさが、子どもの塾・習い事に通う割合となって反映していることが看取できた。（問 19、問 20）

[3] 平成 17 年の国勢調査では、佐賀県における核家族世帯の割合は全体の 55.2%である。今回の調査においては、小学校１年生の保護者を対象としていることから、単独世帯（22.8%）は調査対象外であることに鑑みると、県内において子どものいる家庭において確実に核家族化が進行しつつあることが確認できよう。（佐賀県庁ホームページを参照）

また、塾・習い事のそれぞれの設問を重ね合わせたのが、下記の表である。これを見ると、塾と習い事の「両方に通っている」子どもの割合は、ひとり親家庭では 12.9%であるのに対して、「どちらとも習っていない」ひとり親家庭の子どもは 41.9%に上っており、どちらとも他の家族形態と比較して約 10 ポイントの差異が生まれている。つまり、地域における差異ならびに家族形態における経済的格差の課題がより顕著に示されていることが見て取れた。

塾・習い事に通っている（複合）

	両方習っている	塾のみ	習い事のみ	どちらとも習っていない	無回答
全体(n=825)	20.7%	8.0%	40.0%	30.3%	1.0%
核家族家庭(n=548)	22.3%	7.3%	40.5%	29.2%	0.7%
多世代同居家庭(n=180)	20.6%	8.3%	43.3%	27.2%	0.6%
一人親家庭(n=93)	12.9%	11.8%	30.1%	41.9%	3.2%
佐城地区(n=230)	21.7%	6.5%	41.3%	29.6%	0.9%
三神地区(n=192)	22.9%	6.8%	38.0%	31.3%	1.0%
杵西地区(n=156)	23.1%	11.5%	37.2%	26.9%	1.3%
東松地区(n=135)	13.3%	8.1%	41.5%	35.6%	1.5%
藤津地区(n=112)	20.5%	8.0%	42.9%	28.6%	0.0%
Ａ校	22.3%	6.8%	34.0%	35.0%	1.9%
Ｂ校	21.3%	6.3%	47.2%	25.2%	0.0%
Ｃ校	25.0%	9.3%	33.3%	32.4%	0.0%
Ｄ校	20.2%	3.6%	44.0%	29.8%	2.4%
Ｅ校	20.5%	10.2%	37.5%	30.7%	1.1%
Ｆ校	26.5%	13.2%	36.8%	22.1%	1.5%
Ｇ校	15.7%	9.8%	42.2%	31.4%	1.0%
Ｈ校	6.1%	3.0%	39.4%	48.5%	3.0%
Ｉ校	26.2%	9.2%	38.5%	26.2%	0.0%
Ｊ校	12.8%	6.4%	48.9%	31.9%	0.0%

最後の 3 点目として特徴的な点は、親同士や地域における子育てに関する人的関係の開きについてである。

具体的には、「同じ学校に通う子どもの保護者の中に、気兼ねなく、子育てや学校生活について相談できる人がいる」（問 25）では、ひとり親家庭においては、「あまり当てはまらない」（30.1%）と「全く当てはまらない」（10.8%）と回答した保護者の割合は、合わせて 40.9%にのぼり、他の家族形態と比較しても、突出していることが見て取れる。同様に、「小学校入学以後も、幼稚園・保育所やサロン・サークルで出会った友人と今も連絡・交流を続けている」（問 26）という設問でも、「あまり当てはまらない」（23.7%）と「全く当てはまらない」（15.1%）と回答した保護者の割合は、合わせて 38.8%となっており、ひとり親家庭において、生活時間や経済状況などの物理的な要因が、子育ての孤立化をより一層進行させていることが明らかとなった。

また、「子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などに参加したことがありますか」（問 30）においても、他の家族形態と比較して、すべての参加率が約 10～30 ポイントも開いていることなどからも明らかなように、小学校における子育ての孤立化の背景として、小学校入学までの社会参加の経験の差異があるものと見られる。加えて、「子育てにおける悩みや不安」（問 32）において、「子育てと職業の両立」の割合

が、ひとり親家庭では 47.8%もの保護者が回答しており、こうした社会参加を阻害する要因として、各種調査等でも指摘されているとおり、ひとり親家庭の経済的状況の厳しさや就労環境の悪化が、佐賀県においても大きく横たわっている。

この結果は、2 点目の教育における経済的格差の問題とも無関係ではなく、こうした教育における格差に対して、家庭（家族）という個人に責任を押し付けるのではなく、教育の機会均等を担保する方策として、今後、どのように長期的視野で継続的に支援していくかが問われていよう。

（２）子どもの育ちと保護者の関わり

前述のような調査結果を受け、家庭の外形的変容にとどまらず、子どもの育ちと家庭との関わりをより精緻に考察することを試みた。具体的には、問 4 から問 18 までの子どもの日常生活に関する設問を点数化し、それらの合計得点から点数の高かった上位 25%を「高得点群」、下位 25%を「低得点群」に分け、一般的に「望ましいであろう」とされる子どもの日常生活の状態にある家庭と、そうではない家庭における保護者の生活状況や子どもとの関わり、学校や地域社会における接点形成の状況について検証した。なお、便宜上、本分析を「子育ち得点別集計」と名付けるものとする[4]。

「子育ち得点別集計」における高得点群と低得点群の分布を比較すると、地域別には、高得点群では東松地区が 18.0%と低く、低得点群では佐城地区が 29.0%と高くなっている。これを学校別に見ると、学校内において低得点群の占める割合が高かったのは、Ａ小学校（33.0%）とＨ小学校（32.3%）であった。一方で、高得点群が占める割合が高かったのは、Ｅ小学校（29.4%）であった。また、家族形態別では、ひとり親家庭において高得点群の割合が 13.8%と、他の家族形態よりも約 10 ポイント低いという結果となった。つまり、ひとり親家庭における厳しい経済・生活状況が、子どもの生活にも厳しさとなって影響を及ぼしているのではないかということが推察できる。言い換えるならば、現代社会における子育ての状況や家庭の状況として、子どもや子育てへの関心と家庭の経済状況や家族形態とが何かしらの関連しており、特に厳しい子育て状況にある家庭においては、子どもへ関心・手間をかけたくても、現実的にはかけることが難しい層が一定層存在していることが見て取れる。

地域 と子育ち得点(4cat) のクロス表

			point(4cat)				合計
			低得点群	45 - 47	48 - 50	高得点群	
地域	佐城地区	度数	64	56	51	50	221
	(n=221)	地域 の %	29.0%	25.3%	23.1%	22.6%	100.0%
	三神地区	度数	46	56	42	41	185
	(n=185)	地域 の %	24.9%	30.3%	22.7%	22.2%	100.0%
	杵西地区	度数	35	34	44	38	151
	(n=151)	地域 の %	23.2%	22.5%	29.1%	25.2%	100.0%
	東松地区	度数	34	37	34	23	128
	(n=128)	地域 の %	26.6%	28.9%	26.6%	18.0%	100.0%
	藤津地区	度数	26	27	29	25	107
	(n=107)	地域 の %	24.3%	25.2%	27.1%	23.4%	100.0%
合計		度数	205	210	200	177	792
		地域 の %	25.9%	26.5%	25.3%	22.3%	100.0%

[4] この分析結果については、紙幅等の関係から調査報告書に掲載されていないため、考察において取り上げた特徴的な結果のみを抜粋して本文中に挿入する。

学校 と子育ち得点(4cat) のクロス表

			point(4cat)				合計
			低得点群	45 - 47	48 - 50	高得点群	
学校	Ａ小学校	度数	33	24	20	23	100
	(n=100)	学校 の %	33.0%	24.0%	20.0%	23.0%	100.0%
	Ｂ小学校	度数	31	32	31	27	121
	(n=121)	学校 の %	25.6%	26.4%	25.6%	22.3%	100.0%
	Ｃ小学校	度数	27	30	27	20	104
	(n=104)	学校 の %	26.0%	28.8%	26.0%	19.2%	100.0%
	Ｄ小学校	度数	19	26	15	21	81
	(n=81)	学校 の %	23.5%	32.1%	18.5%	25.9%	100.0%
	Ｅ小学校	度数	19	18	23	25	85
	(n=85)	学校 の %	22.4%	21.2%	27.1%	29.4%	100.0%
	Ｆ小学校	度数	16	16	21	13	66
	(n=66)	学校 の %	24.2%	24.2%	31.8%	19.7%	100.0%
	Ｇ小学校	度数	24	28	28	17	97
	(n=97)	学校 の %	24.7%	28.9%	28.9%	17.5%	100.0%
	Ｈ小学校	度数	10	9	6	6	31
	(n=31)	学校 の %	32.3%	29.0%	19.4%	19.4%	100.0%
	Ｉ小学校	度数	17	13	20	14	64
	(n=64)	学校 の %	26.6%	20.3%	31.3%	21.9%	100.0%
	Ｊ小学校	度数	9	14	9	11	43
	(n=43)	学校 の %	20.9%	32.6%	20.9%	25.6%	100.0%
合計(n=792)		度数	205	210	200	177	792
		学校 の %	25.9%	26.5%	25.3%	22.3%	100.0%

家族形態 と子育ち得点(4cat) のクロス表

			point(4cat)				合計
			低得点群	45 - 47	48 - 50	高得点群	
家族形態	核家族	度数	139	136	136	121	532
	(n=532)	家族形態の%	26.1%	25.6%	25.6%	22.7%	100.0%
	多世代	度数	42	43	40	44	169
	(n=169)	家族形態 の %	24.9%	25.4%	23.7%	26.0%	100.0%
	ひとり親家庭	度数	24	30	21	12	87
	(n=87)	家族形態 の %	27.6%	34.5%	24.1%	13.8%	100.0%
	その他(n=4)	度数	0	1	3	0	4
		家族形態 の %	0.0%	25.0%	75.0%	0.0%	100.0%
合計(n=792)		度数	205	210	200	177	792
		家族形態 の %	25.9%	26.5%	25.3%	22.3%	100.0%

これらを踏まえ、「子育ち得点別集計」の結果の特徴として、以下の 3 点が明らかとなった。

まず、1 点目は、塾・習い事といった教育に関わる費用と子育てとの関わりについてである。この結果を見ると、低得点群では「通っていない」割合が 35.3%と 10 ポイント近く高得点群を上回るのに対して、高得点群は「両方」に通わせている割合が 26.4%と低得点群を約 8 ポイント上回っているという結果となった。

この結果を一見するならば、「望ましい生活状況の子どもの家庭は、塾と習い事の両方に通わせている」という結論になるわけであるが、果たしてそうであろうか。ここで重要なことは、塾と習い事の両方に小学校 1 年生の子どもを通わせることができる家庭は、どのような家庭であるかという点を踏まえなければならないだろう。

2（1）で指摘したとおり、子どもの塾・習い事に通う割合として、他の家族形態と比較してひとり親家庭における割合が突出して低くなっていたことを踏まえるならば、ここには、家庭の経済的状況や就労環境の厳しさが背景にあるだろう。つまり、経済的に比較的余裕のある家庭においては、子どものしつけや塾・習い事に通わせることが可能である一方、厳しい状況に置かれている家庭においては、塾や習い事へ通わせるということが難しい、もしくは子どものしつけや基本的生活習慣の定着といった家庭での教育に対して、保護者自身が関わりたくとも関われないという状況が存在していると見ることができる。こうした家庭でのしつけや塾・習い事といった子どもの育ち自体に、保護者として関わりたくとも関われない、もしくはそのための時間や経済的な余裕をもつことが難しい家庭に対して、家庭教育支援・子育て支援は何ができるのか、そして、そもそもそうした家庭を対象とした家庭教育支援・子育て支援となっているかという検証が必要となってくる。言い換えるならば、本当に支援を必要とする家庭に、課題が解決されるであろう有効な助言・支援となりうる家庭教育支援・子育て支援の在り方について、我々関係者は再度、問うべき時期に来ているのである。

子育ち得点(4cat) と 塾・習い事 のクロス表

			塾＋習い事				合計
			両方	塾のみ	習い事のみ	通っていない	
Point (4cat)	低得点群 (n=204)	度数	29	21	82	72	204
		point(4cat) の %	14.2%	10.3%	40.2%	35.3%	100.0%
	高得点群 (n=174)	度数	46	12	70	46	174
		point(4cat) の %	26.4%	6.9%	40.2%	26.4%	100.0%
全体(n=784)		度数	163	62	322	237	784
		point(4cat) の %	20.8%	7.9%	41.1%	30.2%	100.0%

次に 2 点目は、保護者同士の人間関係についてである。具体的には、「保護者に相談できる人がいる」、「入学以後もサークル仲間と交流を続けている」、「子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある」の 3 つの設問において特徴的な結果が見られた。

「保護者に相談できる人がいる」では、「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答した割合は、高得点群では 92.1%（64.4%、27.7%）であるのに対して、低得点群では 65.8%（31.2%、34.6%）にとどまり、26 ポイントもの差が見られた。また、「入学以後もサークル仲間と交流を続けている」でも、「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答した割合は、高得点群では 86.9%（59.1%、27.8%）であるのに対して、低得点群では 57.1%（21.0%、36.1%）となり、約 30 ポイントの差となっている。最後に、「子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある」でも、「とても当てはまる」「だいたい当てはまる」と回答した割合は、高得点群では 64.2%（22.2%、42.0%）であるのに対して、低得点群では 35.1%（6.3%、28.8%）とな

り、こちらも約 30 ポイントの差が見られた。

これら 3 つの設問を見る限り、望ましい生活状況の子どもの保護者は、地域において子育ての相談をすることができたり、互いに子どもを預かり合えるような人間関係を有していることが分かる。また、その関係も小学校内の保護者同士だけでなく、幼稚園・保育所や育児サークル等で出会った保護者など、関係性も多様であることが確認できた。一方で、低得点群の保護者においては、学校内や就学前の人間関係において、相談する相手がいない、もしくは親密な相手がいない保護者の割合が、全体の約 3～4 割存在しているのである。

この結果は、①地域において子育ての孤立を深める子育て家庭が、県内に一定数存在していること、②望ましい生活状況にある子どもの保護者は、地域や学校における子育てに関する人間関係が豊かな傾向にあること、の 2 点が導き出せよう。前項の２（１）においても指摘したが、豊かな子育てについては、ともに親として育ち合うようなピア（peer；仲間・同僚・同等の地位の人）な関係や、気軽に相談することができる人間関係を有していることが重要である。したがって、家庭教育支援・子育て支援の方策の一つの視点として、専門家が、単発的に、相談に訪れた保護者に対して、子育てに関する情報提供や支援を提供するといった既存の形態ではなく、親同士が子育てに関する相談を日常的に継続できるような関係づくりや、そのための親の主体性を担保した集団づくりを支援するコーディネート機能、そしてアウトリーチを前提とした訪問相談などを地域において積極的に展開していくなど、時代や地域特性に合わせた新たな支援方策と柔軟な実施体制が重要となってくるのではないだろうか。

子育ち得点(4cat) と 同じ学校に通う子どもの保護者の中に、
気兼ねなく、子育てや学校生活について相談できる人がいる のクロス表

			保護者に相談できる人がいる				合計
			とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
Point (4cat)	低得点群 (n=205)	度数	64	71	57	13	205
		point(4cat) の %	31.2%	34.6%	27.8%	6.3%	100.0%
	高得点群 (n=177)	度数	114	49	8	6	177
		point(4cat) の %	64.4%	27.7%	4.5%	3.4%	100.0%
全体(n=792)		度数	361	263	133	35	792
		point(4cat) の %	45.6%	33.2%	16.8%	4.4%	100.0%

子育ち得点(4cat) と 小学校入学以後も、
幼稚園・保育所やサロン・サークル仲間で出会った友人とも今も連絡・交流を続けている のクロス表

			入学以後もサークル仲間と交流を続けている				合計
			とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
Point (4cat)	低得点群 (n=205)	度数	43	74	61	27	205
		point(4cat) の %	21.0%	36.1%	29.8%	13.2%	100.0%
	高得点群 (n=176)	度数	104	49	19	4	176
		point(4cat) の %	59.1%	27.8%	10.8%	2.3%	100.0%
全体(n=791)		度数	309	244	176	62	791
		point(4cat) の %	39.1%	30.8%	22.3%	7.8%	100.0%

子育ち得点(4cat) と 子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある のクロス表

			預かったり、相談に乗る				合計
			とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
Point (4cat)	低得点群 (n=205)	度数	13	59	92	41	205
		point(4cat) の %	6.3%	28.8%	44.9%	20.0%	100.0%
	高得点群 (n=176)	度数	39	74	46	17	176
		point(4cat) の %	22.2%	42.0%	26.1%	9.7%	100.0%
全体(n=791)		度数	103	273	303	112	791
		point(4cat) の %	13.0%	34.5%	38.3%	14.2%	100.0%

最後の 3 点目に、地域社会との接点形成や子育てに関する学習機会と子育ての悩み・不安についてである。

子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などへの参加状況を見ると、「その他」「参加したことはない」を除く計 7 項目すべてにおいて、低得点群の割合よりも、高得点群の割合が上回るという結果が示された。特に、学校や幼稚園・保育所等での行事を除く、地域行事や保護者の自主性により参加できる集まりやイベント等への参加については、約 10～20 ポイントもの差異が生まれている。

また、現在、子育てで感じる悩みや不安について尋ねたところ、高得点群は「子どもの安全・安心」（低得点群：20.8%、高得点群：30.8%）が低得点群と比較して 10 ポイント以上上回っている一方で、低得点群が、高得点群よりも 10 ポイント以上上回っている項目としては、「子どものしつけや基本的生活習慣」（低得点群：58.4%、高得点群：43.2%）「子どもの学校生活」（低得点群：57.4%、高得点群：46.7%）となった。つまり、子どもが望ましい生活状況にある家庭の保護者は、子育てに関する不安や悩みが少なく、また関心事項も地域社会へと視点が向く傾向にある。一方で、そうした生活状況にない家庭の保護者においては、自身の子育てに自信がなく、子どもの学校生活の様子について不安が高いという傾向にあるという結果が示された。

これらの結果については、特に不安や悩みについては、心理的な状況等も関わる事項であるため一概に結論付けることは難しく、今後、より精緻な分析が求められる余地は多く残されているものの、子どもの生活状況と保護者自身の子育てに関する不安や悩み、そして、その悩みや不安を軽減し、自身の子育てをよりよいものへと改善していくための学習機会と地域参加の 3 者は、一定の相関関係にあると見ることができよう。言い換えるならば、少子化やライフスタイルの変化等の影響から、出産以前に子どもや子育てと関わる経験を持ちにくくなった現代社会において、保護者が子育てを行い、親や家庭の教育的役割を果たす上で、出産以後、親が「親として成長する」ことや親としてのアイデンティティを形成していく過程が求められ、そのための学習や社会参加が不可欠であることが示されている。

子育ち得点(4cat) と 子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などに参加したことがある のクロス表　＜複数回答＞

			子育てサロンやサークル	親子参加のイベント	ＰＴＡ等の集まり	子育てや家庭教育に関する講演会	学校（幼稚園、保育所含む）の行事	地域行事での祭りや文化祭など
Point (4cat)	低得点群 (n=204)	度数	55	61	81	32	180	138
		point(4cat) の %	27.0%	29.9%	39.7%	15.7%	88.2%	67.6%
	高得点群 (n=174)	度数	73	83	86	51	157	134
		point(4cat) の %	42.0%	47.7%	49.4%	29.3%	90.2%	77.0%
全体(n=784)		度数	264	255	330	163	697	548
		point(4cat) の %	33.7%	32.5%	42.1%	20.8%	88.9%	69.9%

			地域行事での清掃や話し合いなど	その他	参加したことはない
Point (4cat)	低得点群 (n=204)	度数	92	2	8
		point(4cat) の %	45.1%	1.0%	3.9%
	高得点群 (n=174)	度数	111	0	3
		point(4cat) の %	63.8%	0.0%	1.7%
全体(n=784)		度数	420	7	31
		point(4cat) の %	53.6%	0.9%	4.0%

子育ち得点(4cat) と 現在、子育てで感じる悩みや不安 のクロス表　＜複数回答＞

			子どものしつけや基本的生活習慣	子どもの学校生活	子どもの心や体の健康、発達	子どもの安全・安心	子どもへの接し方、対応の仕方	子どもの教育費
Point (4cat)	低得点群 (n=202)	度数	118	116	57	42	67	42
		point(4cat) の %	58.4%	57.4%	28.2%	20.8%	33.2%	20.8%
	高得点群 (n=169)	度数	73	79	46	52	43	32
		point(4cat) の %	43.2%	46.7%	27.2%	30.8%	25.4%	18.9%
合計(n=774)		度数	402	438	237	218	227	171
		point(4cat) の %	51.9%	56.6%	30.6%	28.2%	29.3%	22.1%

			子育てと職業の両立	配偶者や家族の子育てへの関わり	地域の子育て環境	その他	悩みや不安はない
Point (4cat)	低得点群 (n=202)	度数	66	33	6	5	10
		point(4cat) の %	32.7%	16.3%	3.0%	2.5%	5.0%
	高得点群 (n=169)	度数	44	16	12	5	12
		point(4cat) の %	26.0%	9.5%	7.1%	3.0%	7.1%
合計(n=774)		度数	223	97	52	14	52
		point(4cat) の %	28.8%	12.5%	6.7%	1.8%	6.7%

Ⅳ　支援者ヒアリング調査の結果

１　調査の名称

家庭教育支援者へのヒアリング調査

２　調査の概要

（１）調査の目的

県内で家庭教育支援、子育て支援の活動を実施している実践者を対象に、実践者自身が支援活動をはじめたきっかけや活動経過を聞き取り、支援者としての資質、能力、視点を捉え、今後の本県における家庭教育支援、子育て支援事業の在り方を探るための基礎データとする。

（２）調査の対象

※県家庭教育相談員人材バンク登録者名簿（県教育委員会）より、以下の抽出条件を満たした対象者より活動地域、活動内容など偏りがないよう１０名程度に絞りこみ、その中から了解を得られた６名を抽出した。

※佐賀県が開催している「家庭教育相談員研修講座」修了者が登録する人材バンク。
「家庭教育相談員研修講座」は公民館や幼稚園・保育園など、保護者にとって身近な地域で、子育てに関する相談等ができる人材の育成を図るため、平成１４年度から開催されている。
平成１４年度から佐賀県教育委員会（現社会教育・文化財課）で開催され、平成１９年度からは知事部局こども未来課で開催している。

＜抽出条件＞

①　現在、家庭教育支援者として活動している人
②　個人でも家庭教育支援団体に何らかの接点を有している人
③　活動歴が５年以上の人
④　営利を主目的にしていない団体で活動している人

＜ヒアリング調査に協力いただいた６名＞

氏名	年代	居住地	現在の所属
Ｈさん	４０代後半	Ａ町	子どもの居場所づくりコーディネーター
Ｔさん	３０代後半	Ｂ町	保育園保育士
Ｙさん	５０代前半	Ｃ市	市 子育て支援事業コーディネーター（嘱託）
Ｍさん	５０代前半	Ｄ市	認定こども園子育て支援スタッフ 子育て学習グループ代表
Ｎさん	４０代後半	Ｅ市	短期大学（非常勤講師） 赤ちゃんサークル・子育てサークル・多胎児サークル代表
Ｏさん	６０代前半	Ｆ町	子育て広場スタッフ

（３）調査の方法

個別面接法

面接時間：1 時間程度　会話は許可を得てＩＣレコーダーで録音

面接場所：相手指定先もしくは佐賀県立生涯学習センターにて実施

ヒアリング調査担当：佐賀県立生涯学習センター企画員

（４）調査期間

平成２３年１２月１３日（火）～１２月２４日（土）

３　ヒアリングのまとめ

協力いただいた６名の家庭教育支援者のヒアリング内容を、４０～５１ページに記載する。

ヒアリング調査では、以下の６つの質問項目に沿って話を伺った。

①　今日に至る経緯

②　活動をはじめたきっかけについて

③　活動の変遷について

④　家庭教育支援者としての転換点について

⑤　目指しているビジョンについて

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化について

A町在住のHさん（40 代後半）
現在の仕事（所属）　子どもの居場所づくりコーディネーター

①　今日に至る経緯

昭和 38 年、佐賀県のA町に生まれ、両親、妹（７歳下）、祖母（４歳の時他界）の家庭で育ちました。両親が共働きのため、生まれてすぐ祖母に育てられました。妹が生まれてからは母親が仕事を辞め家に居るようになりました。高校卒業後は県内の短期大学保育科へ進学し、その後、A町の幼稚園に４年間勤務しました。昭和 62 年に結婚し、結婚後も地元のA町（実家）で暮らしています。子どもは男の子が４人います。子育ては、私も夫も両親共働きで、さみしい思いをした記憶から、自分達の子どもには同じ思いをさせたくないと考え、私が仕事を辞め子育てに専念しました。夫も子育てには協力的で、夫婦で地域の子どもクラブの役員や学校のクラス役員なども経験しました。

②　活動をはじめたきっかけ

私の長男には学習障害があり、小学 3 年生頃からクラスでいじめにあうようになりました。その件で、私も学校との折合いが上手くいかず悩んでいた頃、「県民だより」に掲載されていた「子育て支援リーダー養成講座」を知り受講しました。私自身の悩み解決へのヒントがあればという思いと、自分自身を振り返りたいという気持ちがあり参加しました。また、私が困った分、他の人への支援があればいいなという思いや、長男にとっても充実した支援があれば周りから理解を得られるのではないかという思いもあったからです。講座の中に、学習障害への対応についても話がありました。手探り状態での対応が続いていたなかで、「お母さんが頑張れば改善できる」という話でした。それで、自分が頑張ればと思ったのですが、家の中や学校の中での環境を整え、周りの理解を得なければならないことも感じました。講座でたまたま知り合った方のご主人がスクールカウンセラーの方だったのですが、今後、学習障害の子どもは増えていくということで、これから支援の必要性がでてくると言われ、支援活動への思いがさらに強くなりました。振り返ると、この講座への受講が活動を始めるきっかけになったと思います。また、支援者として活動する前に、ある支援団体の催しに参加したことがあります。そこでは、自分の困った事を話すことはできても、他の親同志の交流もなく、他の人の話も聞けない内容でした。一緒に参加した子ども達も誰とも交流することができず、そこに自分の居場所をみつけることができなかった経験もあります。

③　活動の変遷

活動のきっかけとなった「子育て支援リーダー養成講座」受講後、社会福祉協議会（以下社協と記載）でボランティア登録をしました。誰かに自分の話を聞いてもらいたいという思いや、自分にできることはないだろうかという思いを持っていたからです。それで、ボランティア登録の時、私のこれまでの経験談や経歴を話していたこともあり、その後、社協より町の子育て支援センター立上げのボランティアとして、声をかけてもらいました。私の友人、知人にも声をかけ 6 名の仲間と立上げ準備に関わりました。この頃、何か勉強をしなければならないと思い、県の「家庭教育相談員研修」にも参加しました。子育て支援センターの立上準備の後は、社協の子育て交流広場の活動に 4 年間参加しましたが、夫が病気になり生活のため幼稚園での居残り保育の仕事に就きました。平成 18 年に夫が亡くなり、私も体調を崩し 1 年半で仕事を辞め、活動を再開したのは平成 20 年からです。今も続けている、「子どもの居場所づくり」でのコーディネーターの活動です。この活動は、最初、子育て交流サロンで活動する友人に声がかかった話でしたが、私にまわってきてうけたものです。最初は活動の計画だけに携わればいいとい

うことで、少し気軽にやってみようと考えていましたが、役場の担当の方から「今の子どもは話を聞かない子も多く、困った子も多いので、実際の活動にも携わってもらえませんか」と頼まれました。そこから子ども達の活動にも立ち会いながら、コーディネーターとしての活動を始めることになりました。どちらかといえば、場に上手く入っていけない子どもや、他の子にちょっかいをだす子どもに関わっています。活動は小学生を対象とした子どもの居場所作りのコーディネーターですが、最近は保護者の方にも参加してもらえる企画にも取組み、民生児童委員の方など、周りの地域の人達の協力も得られるようになってきました。

④　家庭教育支援者としての転換点

長男が通った県外の高校の先生から聞いた言葉が、今も心に残っています。「周りの理解を求めるには、まず相手のことをほめることです。否定ばかり言ってはいけません。お互いとげを持つととげしか返ってきませんよ…。」今まで、長男の事を理解してほしくて、わかってもらいたいという一心で、学校の先生達ともぶつかりあっていた私が、この言葉で変わることができました。ですから、活動で子ども達には、「久しぶり！何してた？」などと声をかけたり、活動に上手く入れない子どもには、そばに寄って一緒に活動しています。あと気になっていることが、今のお母さん達を遠目でみていると、自分のことだけに気をとられ、我が子に目がいっていないように感じる時があります。支援の手がひろがり充実してくると、預けられた子どもの思いまで気が回っていないのではないかと心配です。自分は自分という感じで、自分しかみつめていないように感じることがあります。もちろん、私自身も子どもに障害があり、周りから理解されない環境にいて、幾度となく「この子がいなければ私はもっと自由にできたはず、こんな思いをしなくてよかったのに」と思ってしまった経験があるので、わからなくも無いのですが…。でも、私は、いろいろな人と関わりがあったことが、私達親子にとってよかったという経験があるので、活動に参加してくれる保護者の方には声をかけて、話しかけるよう心がけています。

⑤　目指しているビジョン

親支援、子ども支援、難しいなとつくづく感じています。今は共働き家庭が多く、一人親家庭も多くなっています。親子で語り合ったり、ふれあったりする時間が少なくなっていると思います。だから、短い時間かもしれませんが、親も子も一緒に楽しくふれあい、親同志もつながりができる活動ができたらいいなと思っています。そして、地域とのつながりがもてるようになれば、地域の方々も巻き込んでいろいろなことができると思っています。これからは私が携わる活動の中にも、元気な高齢者にもっと出てきて欲しいと思っています。地域の親と子をみんなで見守ってあげたいし、周りから「子どもさんは元気ね～」という一声があると、保護者の方も嬉しくなりますよね。こういう視点、地域での親子支援を今後の活動にいれていきたいです。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

私の子ども達には一人ひとりに話をするよう心がけています。特に一番下の息子は小さい時、働きにでていてかまってあげられない時期がありました。父親も亡くしていたので学校の先生も心配してくれていました。中学生になってからは私が家に居るようにして、家に誰か居るという安心感を与えたことが、今になって考えるとよかったと思います。私が支援者としての経験がなければ、息子の変化にも気づけなかったし、視点が全く違っていたかもしれません。気づいたら私の周りにはたくさんの人がいてくれてお世話になっています。こういう事も活動をしていなければ気づく事ができなかったことだと思います。

Ｂ町在住のＴさん（30 代後半）
現在の仕事（所属）　保育園保育士

①　今日に至る経緯

昭和 50 年、佐賀県のＧ町に生まれ、両親、兄、妹、祖母、叔母（父の妹、視覚障害）の家庭で育ちました。両親は共働きで忙しく、そのため、同居していた祖母と叔母が兄妹の面倒をみてくれました。子どもの頃の私は、家庭の中で親や周りの大人の人間関係に気を使うような子どもだった記憶があります。そのため、普通であれば親に甘えられるところに距離感を感じていました。高校卒業後は県内の短期大学保育科へ進学し、その後、県外の大学へ 3 年生から編入しました。大学では文学部哲学科教育学を専攻し、卒業後は老人ホームへの就職を考えていましたが、地元の保育園に就職しました。

②　活動をはじめたきっかけ

活動をはじめるきっかけとなったのは、保育士をしていた平成 14 年に県主催の家庭教育相談員研修を受けたことです。その時、私は 20 代で受講者の中では若い方でしたが、他の受講者や講師陣から、ものすごいパワーと刺激を受けたことで「自分も何かしなければ」という思いが強くなりました。今でも、相談員研修で出会った講師の方と年賀状の交換をしています。個人的なつながりはありませんが、年賀状をもらった時は、何かつながっているという感覚を感じて、いつもハッとしてしまいます。その瞬間があるから、保育の現場や家庭教育支援の活動に戻ってこられるのかもしれません。学びの場で出会った人との出会いや交流は私にとっての財産です。

③　活動の変遷

平成 11 年に保育士として就職しましたが､保育士をしている時も何か活動をしたいという思いがあり、学習の機会があれば参加するようにしていました。保育士になって 1 年位で、保育園や託児所を独立してできるチャイルドマインダーの資格を取得しました。最終的には自分で独立して仕事をしたいと思っていたので、勉強のためいろいろな保育園を回って 7 年間ほど保育士の仕事をしました。平成 14 年に家庭教育相談員研修を受講後、CSO の助成金を受け 1 年間程、同級生 3～4 人で育児サークル活動を地元と当時暮らしていた町で行いました。当時行政では対応できていなかった、土、日開催のサークルを行い、平日仕事で参加できない親子にも参加してもらえるよう企画しました。でも、保育園での仕事やサークル活動のどちらでも、人間関係の難しさや価値観の違いという問題に直面しました。保育の現場では職場での人間関係が上手くいなかいと、園に通う子どもまで嫌になる時があり、保育そのものに影響することを感じました。また、仲間同士の価値観の違いが、サークルを運営していく上で支障をきたすということも経験しました。そのため、しばらく保育の現場から離れた時期がありました。平成 18 年頃、一般企業で採用されている障害者の、生活態度や仕事の技術をサポートする障害者自立支援の仕事に就きました。そこでの仕事にはやりがいを感じていました。ですが、ここでも企業側の障害者雇用に対する姿勢の矛盾に悩み、3 年ほど働いて退職しました。そして、平成 21 年に再び保育士として仕事を始めました。一度離れた保育の仕事だったので抵抗はありましたが、生活のため、そして、職場が認可外の保育園であったことが仕事を始めた大きな理由です。認可外の保育園ということで、時代の流れに沿った保育のいろいろな可能性と期待を感じ、「命」をテーマとしているところに興味を持ちました。私は学生時代に社会教育の勉強をしていて、その分野はためになるし面白いと思っています。育児サークルを立ち上げた時のように、活動を企画することは好きで、保育士の仕事そのものよりも違う部分をみている視点の方が大きいのかもしれません。また、これまで保育の仕事にかかわってきていますが、私には子

どもがいないので、入りきれない領域を感じるんです。そこが一番ハードルが高いところですね。保育士の立場で保護者の方に話しをしていても、子育てをしていないから本当のところはわからないよね、と思われているんじゃないか…とか、いろいろ考えてしまって。ある程度まで保育はできるけど、支援という所では子育ての経験がないからいえないとか。だから、支援者を支援したい部分が強いのかもしれません。

④　家庭教育支援者としての転換点

平成 23 年 12 月の異動で保育園を離れ別の部署で仕事をすることになりました。保育士としての復帰はしばらくありません。保育士とは離れた仕事に進みますが、人を育てる仕事や活動はやりたいとずっと思っているので、家庭教育支援のアンテナは持ち続けていたいです。最近、家庭教育支援の講座で出会った受講者の方から声をかけてもらいました。今、暮らしているＢ町の方で、一度、その活動を見学してみたいと思っています。そして、何か一緒にできればいいなという思いを持ちました。いろいろな講座を受ける度にいつも目から鱗状態ですが、自分がアンテナを出し続けていくことが大切だと考えています。そうすることで人との出会いがあり、いろいろな話を聞く機会ができます。そういうことが私自身に変化をもたらしてくれていると感じています。

⑤　目指しているビジョン

日本人は忙しいと言われていますが、私も仕事とプライベートのバランスを取り間違い体調を崩した経験があります。だから、仕事をしていても子育てに余裕をもってできる社会、人としての余裕やゆとりを保障する環境が大事だと考えています。保育士の免許はもっていても保育園で働かない、すぐやめてしまう保育士が多いという話をよく聞きます。私もいろいろな保育園で仕事をした経験があるので、その理由に思いあたるところはありますが、やはり保育士が働く環境そのものが整わないと、結局、子育てや子どもの保育とか支援しようにもできないのではないかと思っています。本当に女性が働きやすい環境とはどんなものなのか、ということを考え続けています。その悩みは今も現在進行形です。これからは、支援者も支援していくサポート体制を考えていかなければならないのではないでしょうか。そして、そういった部分で手伝えることがあればと考えています。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

平成 13 年に母が亡くなり実家とは少し疎遠気味になりましたが、これまでの経験や活動を通し、今まで気づかなかった事も見えるようになってきたところがあります。特に、現在勤めている保育園を運営する企業には「感謝を人に伝えなさい」というモットーがあり、家族などにハガキを出す取組みをしています。私も実家の父や祖母に宛て、ハガキを何度か出しました。そういうこともきっかけとなり、子どもの時に距離感を覚えていた父との親子関係が少しずつ変わってきました。また、白寿を迎えた祖母の存在も、私に命のリレーをしていく大切さを教えてくれています。今では父や祖母は私にとってかけがえのない存在になっています。また、私自身、保育の仕事で出会う先生や親子に支えられた経験をしました。それまでの私は、支援者としてまわりの親子を「支えていくんだ」「育てていくんだ」という意識しか持っていなかったように思います。ですが、本当はその逆で、自分が支えられている方が強いんだと感じました。これまでの活動を通して、「社会のために私は何ができるのか」「何のために生まれ何のために生きるのか」ということをよく考えるようになりました。そして、「人はお互い様なところがある」ということを考え始めています。

Ｃ市のＹさん（50 代前半）
現在の仕事（所属）　市子育て支援事業コーディネーター（嘱託）

①　今日に至る経緯

昭和 35 年佐賀県のＣ市に生まれ、両親と妹 1 人の家庭で育ちました。市内を 3 回転居しましたし、両親が共働きのため、家族は地域になじんでいる方ではなかったと思います。私は 0 歳から保育園に預けられました。保育園へのお迎えの後も母の仕事場に戻り、仕事が終わるまでそこで過ごしていました。小学生の時から「カギっ子」でした。ですが、それがさみしいと感じることはありませんでした。むしろ、親が家に居て子どもの帰りを迎えてくれる、普通の家庭のイメージがわからなかったです。高校卒業後は県外の短期大学の保育科に進学しました。卒業後、そのまま県外の私立保育園に就職しました。

②　活動をはじめたきっかけ

家庭教育支援者として考え始めたのは、平成 15 年から始めた子育て支援事業のコーディネーターの仕事に就いてからだと思います。その仕事に就いたきっかけは、以前、臨時の仕事でお世話になった公立保育園の園長先生から声をかけてもらったことです。その頃、勤めていた託児所での働きに限界を感じていたタイミングでの誘いだったので、仕事を変わることができたと思っています。託児所に勤めて 1 年目位での話ならば、転職することはなかったと思います。託児所では受け持つ子どもの人数も少数で、自分で思うような保育ができるのではと思っていました。ですが、お母さんたちの望む保育は、我が子がケガなく 1 日過ごせればいいというものでした。変な話、何もしなくて 1 日終われればいいという毎日を過ごしていました。楽だけど、「私でなくてもいい」という仕事にジレンマを感じていたんです。だから、園長先生から「あなたに」と声をかけてもらえたことが何よりも嬉しかったことを覚えています。

③　活動の変遷

短大卒業後に就職した保育園がモンテッソーリ教育を取入れることになり、通信教育でモンテッソーリの教師資格を取得しました。保育園には 200 人近い園児がいて、仕事としては厳しい環境でした。その保育園には 12 年間勤務し、退職後 1 年の間に海外へのホームステイなども経験し、少しゆっくりした時間を過ごしました。その間、市報に載っていた「ボランティア養成講座」にも参加しました。再就職には保育士の仕事へのこだわりはなかったのですが、再び公立の臨時保育士として約 7 年間勤務することになりました。その後、病院内事業所の託児所に正規職員として勤めました。託児所に勤めていた平成 14 年に、県の家庭教育相談員研修を受講しました。たまたま勤め先の病院に案内がきていたので教えてもらいました。その時は、保育士としてのスキルアップという意味合いが強く、支援者として受講した意識はありませんでした。支援者としてのアンテナが立っていなかったんだと思います。託児所に勤めて 2 年半経った頃、今、勤めている子育て支援総合コーディネーターの仕事の話があり、平成 15 年 10 月に転職しました。仕事を初めて 1、2 年位はわからないことが多かったですね。保育園や託児所で働いた経験はあっても地域とのかかわりもなかったので、町名から覚えなければならない状況でした。また、支援センターが何をするところなのか、という基本的なところからの勉強が必要でした。その 1、2 年が市や市の子育て支援を知る時期であり、初めてお母さんになる人や転勤してきた人など、わからない人達の気持ちをわかることができた大切な時間だったと思います。

④　家庭教育支援者としての転換点

今の仕事を始めて、同僚からある 1 冊の本を紹介されました。その本との出会いで私の視点が変わりました。保育士でいる時は家庭教育、子育て支援という意識は無くて、目の前に子どもがいる、子どもがいるから周りに親がいるという認識しかありませんでした。子どものためにいい親であって欲しいと、今までは子どもを通して親を見ていました。でも、親には親の都合があり、社会のいろいろな背景があって今に至っている。親が知らずにやっているのであれば、教える場や気づかせる場が必要なんだと、親の側に立つような考え方、見方になってきました。そして、コーディネート事業の立上げから 8 年間共に過ごしている、同僚の存在も私に影響を与えてくれています。性格的にも人見知りの私とは正反対で社交的で勉強熱心な同僚です。自然と外交担当、事務担当と役割分担ができています。また、平成 17 年に受講した県のリーダー養成講座では、県内のいろいろな地区のキーマンとなる人達との出会いがありました。交流の中でいろいろな人の考え方やその地区の話も聞くことができ、人とのつながりで視点がひろがりました。その時作った家庭教育相談員ネットワークがありますが、今でも必要な時に情報交換できる、ゆるいつながりが続いています。つながりはあるので、何かある時はすぐ連絡がとれます。カッコよく言えば「絆」がリーダー養成講座のおかげでできました。

⑤　目指しているビジョン

以前と比べて支援の数はとても多くなっていますが、今からは中身や質の問題になってくると思っています。以前は、知ってもらうために楽しいことをやって客寄せをしていたところがありますが、これからは中身のあることをして、地域に返すことをやっていかなければならないと思います。なんでも「してあげます」的なところがあるので、“支援”という言葉が悪いのではと思ったりすることもあります。お母さん達自身を活かし、支援が必要な人がそこに行けばホッとして力が湧いてくる、そして、自分の力で旅立っていけるような支援のあり方になってくればいいのですが。そのためには、それぞれの専門機関が役割を果たすことが大切だと思っています。情報発信なども、子どもがいないから関係ないとか、情報そのものが届いていない家庭はまだ多くあります。まんべんなく行き届く情報の届け方が課題ですね。私自身はコーディネーターとして、地域のお母さん達や関連機関から、困った時はあそこに聞けばいいよね、使わないかもしれないけどこれがあるから安心だよね、といわれる保険のような存在でありたいと思っています。支援がいらない世の中や地域になることが究極の理想です。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

仕事上、子どもに関することをより多く見聞きしているので、同居している妹の子どもの育ちに対しては男親がいない分、代弁者として妹や甥っ子達に助言できているところがあると思っています。私には子どもがいないので、子育ての体験がありません。ですが、甥っ子達の面倒をみたりして、子育ての疑似体験ができたことは、今の仕事をする上でよかったと思っています。これから先のことについては、別の道に進んだ方がいいのかなという思いもずっと持ち続けています。子どものいない人に何がわかるの、という風に思われているのではないかと考える事があるからです。でも、今の仕事を選んだ時に自分はやりがいのある道を選んだので、私からこの道をとると何が残るのかという思いもあります。もし、別の仕事をすることになってもこれまでの活動に長年携わってきたので、支援者としての視点はこれから先も変わらないと思っています。

Ｄ市のＭさん（50 代前半）

現在の仕事（所属）　認定こども園子育て支援スタッフ、子育て学習グループ代表

①　今日に至る経緯

昭和 34 年、佐賀県のＤ市に生まれ、祖母、両親、姉、弟の 6 人の家庭で育ちました。両親共働きで、祖母が私達姉弟の世話をしてくれていました。仕事上、父が家に居る機会が母よりも多く、今振り返ると私の成長の上で、父の存在はとても大きかったです。高校卒業後は県内の短期大学保育科へ進学し、卒業後は県外の保育園に 4 年半勤務しました。保育園に勤務していた 23 歳の時に結婚しました。夫が自営だったため、退職後は夫の補助と三人の子どもの子育てをしました。2 番目の子どもが 1 歳になる時、夫の両親と同居を始めました。同居後は家族全員で子育てにかかわってもらいました。まわりからの子育てのサポートはあった方だと思います。育てる環境で孤立したことはありません。夫婦で地区の子どもクラブの副会長をした経験があります。また、婦人会の支部長の経験もあります。

②　活動をはじめたきっかけ

保育士として勤めた地域は仕事を持つお母さん達が多く、園には未満児がとても多かったです。正直、親と離れて生活する乳幼児をみて衝撃を受けました。短大で学んだことと違う現実に、これでいいのか、子どもがかわいそうという思いを持ちました。また、その頃、手話サークルの活動もしていたので、地域活動に熱心な先輩から「あなたは地域活動に熱心だし、自分の住む地域で活動をした方がいいわよ」と言われたこともありました。その後、保育園を退職し、2 番目の子どもが生まれた昭和 62 年に親子で参加できる場所を探していた時、市主催の乳幼児教室の情報を友人から教えてもらいました。2 人の子どもと参加し、翌年の講座終了後は参加メンバーでサークルを作りました。親子や友達とたっぷり遊ぶことができました。また、これがきっかけで、子育てで何が大切かなど考えたりすることも多かったです。この教室に参加していなければ、別の道に進んでいたかもしれません。市からもいろいろな支援を受け、会場となった施設やサークルが子育てを楽しみたいと思う場所、社会とのつながりの場所となりました。近所にも友達が多く楽しかったのですが、転勤族が多かったので、サークル活動で同じ目的をもつ仲間とのつながりが、深く、強くなっていきました。

③　活動の変遷

昭和 63 年、乳幼児教室で作ったサークル仲間で、平成 3 年に絵本の読み聞かせのサークルとしてスタートしました。平成 7 年には月 1 回のサークル会報の発行を始めました。その頃から自主的に他との活動とつながり、人とつながり視野を広めるため、行政改革懇談会の委員になったり、女性の集いなどにも参加するようになりました。市政モニターや母子保健推進員などは個人でしていましたが、個人の意見は社会に届きにくいことに気づいたので、会の意見を発信するため、委員などを引き受けるようにもなりました。平成 11 年からは子どもセンターの、学校週 5 日制に対応する情報紙発行にもかかわりました。仲間のつながりができていたことで地域を知っていた分、楽しく活動できました。私の子どもも小学生になっていたので、乳幼児から学童期の大切さへと視点が移っていった時期でもありました。また、子どもの成長に伴い、福祉と教育の行政施策の壁は不要という点や、地域の人の活動の拠点である公民館の重要性についても分かった時期でした。平成 12 年に市立図書館ができ、読み聞かせのグループでネットワークを作りました。このネットワークは子育て支援の土台として重要なものになりました。平成 13 年、市の子育てサポーターとして委嘱を受け活動しました。誰もが集える居場所「フリースペース」

づくりや、子ども、大人、支援される人、支援する人のイベント「子育て支援フェスタ」を開催しました。平成 14 年にブックスタートが始まり、実行委員として子育て応援マップや絵本リストの作成にも携わりました。平成 15 年にはリーダーの悩みを話し合ったり、情報交換を行う「子育てサークルの会」をつくりました。翌年には嘱託として社会教育指導員になりました。これまで子育てしてきたこと、サークル活動してきたことが生かせると、とてもうれしかったです。乳幼児と学童期の境目をつながねばと、不安もあったけどわくわくしました。実際、子育て支援が広がってくる時期でもあったので、子育てサポーター達と一緒に活動でき、橋渡し役として広げていくことができました。また、この頃サークルの会では助成事業で「子どもの居場所に関するアンケート調査」に取組みました。平成 20 年には家庭教育支援チームの一員として、翌年に、子育ての喜びをわかちあえる地域づくりをめざし「子育て学習グループ」を始め、今も続けています。このグループでは、県との共催事業や委託事業で家庭教育の講座を企画し実施しました。平成 21 年から週 2 日、認定こども園で子育て支援の仕事を始めました。

④　家庭教育支援者としての転換点

女性の集いが進められるようになった平成 7 年頃、保育士になって感じた「保育園に預けられる子どもがかわいそう」という感覚が、女性の社会進出という時代の変化の上では大切なことだと大逆転しました。つまり、園を親に代わるものに整えないといけない。働きながら子育てをする人のために、子どもの環境、子育ての環境を整えてあげればいい。保育園は子どもが過ごす場として質を高めればよい。社会から女の人が求められているとか、働く楽しさを女の人だって持っていいという、男女共同参画の視点での見方が変わりました。そして「子育てしつつ働く母親を守らないと子どもの幸せもない」と思うようになりました。家庭教育支援には、福祉、教育という行政の壁をはずすことが大切で、支援者として視野を広く持つことがとても大事だということにも気づきました。

⑤　目指しているビジョン

子育てしやすい環境が一番だと思います。子育てをしている人の環境が良くなることと、その人を地域の人が理解することが、地域の温かさにつながります。その橋渡し役である支援者のスキルアップが何より大切だと思うので、支援者は常に学び続けなければならないと思っています。学びの場作りや、その学びの場が受け皿となってさらに支援をつなげていくこと。そして、このような活動、経験がさらに雇用につながっていくことができればと願っています。ボランティアではどうしても不安定です。子育ての経験を生かし、支援される人から支援する人へ、より当事者に近い人の存在や支援の質を高めていく環境が必要だと思っています。また、行政の人事異動等により取組みが振り出しに戻ることも多々ありますが、市民の力を生かせばその点はクリアできると思います。そして、支援者同士も、教える人、教えられる人に分かれるのではなく、お互いに支え、支えられる関係性のなかで、いろいろなグループとつながることが大切だと思っています。今、地域で女性部の代表をしていますが、転勤族が多くお互いを知らない地域なので、地域の関係性を次の世代につなぐための取組みが必要だと考えています。代表の仕事についても、楽しくてためになる、大切な取組みだと思ってもらえて、誰でも引き受けてくれるような仕組み作りが課題です。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

家族の支えがあって活動ができていることに感謝しています。また、当事者から支援者へ子育てをしながら活動ができたことは幸せだったと思います。知り合いが増え、情報交換もできました。子ども達が、まずまず順調に育ってくれたことは本当に感謝すべきことです。

Ｅ市のＮさん（40 代後半）

現在の仕事（所属）短期大学非常勤講師、赤ちゃんサークル、子育てサークル、多胎児サークル代表

①　今日に至る経緯

昭和 40 年、福岡県のＨ市に生まれ、小学 5 年生までは曽祖母、祖父母、両親、叔父、叔母、妹、弟の 4 世代 10 人の大家族で育ちました。私は 3 人妹弟の長女です。両親は自営業で忙しく、妹達の面倒は私がみていました。大正生まれの祖父母は昔ながらのしつけや教育で厳しかったです。大家族の中で苦労する母の姿を見て育ちました。高校卒業後、佐賀県のＥ市にある短期大学で児童教育学科初等教育を専攻しました。卒業と同時に小学校教諭、幼稚園教諭の 2 種免許が取得できましたが、先生方から保育士の資格があれば幅が広がるとの薦めで、保育士の資格も自分で取得しました。卒業と同時にＥ市の幼稚園に 3 年間勤務し、その後、実家に戻り子どもの頃からの夢だった小学校の先生を目指しましたが、退職から約 1 年後の平成 2 年、結婚のため再びＥ市で暮らすことになりました。結婚当初から姑と同居しています。子どもは 3 人います。結婚後は専業主婦をしていました。

②　活動をはじめたきっかけ

私は幼稚園教諭だったので、理想の母親像や子育て像がありました。しかし、実際の子育てはというと…。初めての子どもが双子でした。子育ては想像以上に大変で、子どもを愛おしいと思う余裕すらありませんでした。授乳や夜泣きで毎晩 1 時間寝られればいいという日が続いていました。そんなある日、双子の体調が悪く、一人が泣き出すともう一人まで泣き出してしまいました。その瞬間、「もうお願いだから泣かないで」って、双子の鼻と口を押さえそうになったんです。母親、人間としての自分がガラガラと音を立てて崩れ、自信喪失、自己嫌悪に陥りました。子育てには夫や姑の協力、そして実家からの助けもありました。しかし、その頃の私は自分の子どもも育てられず、迷惑ばかりかけているようで自分を責めていました。そんな日が続いた時に、ふと目の前にいる双子の笑顔に気づきました。そしたら涙が止まりませんでした。自信の無いボロボロの私を丸ごと受け止めてくれる子どもたち。その時に、子どもたちが私を親にしてくれる。少しずつ母親になっていこうと思えたんです。その後、子育ては大変ではあっても、周りの助けに素直に感謝できる自分になれたことで、子育てへの気持ちが前向きになっていきました。双子が幼稚園に通い始めた平成 9 年に、地域で開催されていた子育てサークルのチラシを目にして、一番下の娘を連れて参加しました。自分のために友達を作りたい、そして何より子どものためになるだろうと思ったからです。このサークルに参加したことが、今も続けている私の子育てサークル活動の基礎となりました。

③　活動の変遷

参加した当初は、友達のいない孤独感も感じていましたが、サークルの班長さんがみんなの輪の中に私をいれてくれたんです。そして、いろんな人との会話の中から「みんな悩みはあるんだ」「私だけじゃない」という安心感を得ることができました。サークルで初めての当番の時に絵本の読み聞かせを担当することになり、自分のできることで役に立つことができる喜びを感じ、サークルへの意識が変わっていきました。子どもを連れて、一参加者として通った子育てサークルでしたが、私も班長になって、初めて参加するお母さん達の友達になってあげたいと思いました。しかし、翌年、スタッフのなり手がないということでサークルの運営にスタッフとして参画することになりました。そこで、子どもを連れてのサークル運営の大変さを実感しました。子どもを泣かせながらのサークル活動に自問自答する時もありました。この経験から、子どもが幼稚園に通うようになりフリーの立場になってもサークル活動に参画して、お母さん達が安心して子どもと一緒にサークルに参加できる体制作りに取組みました。私の中に理想の子育てサークルができてきたのがこの時期です。初めてサークルに参加して 3 年が経過していま

した。「ごめんね」「ありがとう」「おかげさま」という気持ちと言葉、行動が結びつくと気持ちがつながりますよね。助け合い、喜びあえる活動をしていくと悩みを言える仲間になれるんです。いきなり、他人に悩みなんて言えませんよ。サークルは上下関係ではなく、みんなで手をつなぐことが大切だと気づきました。平成 12 年にサークルを立ち上げました。その後、フリーになったお母さん達にどんどん声をかけ仲間を増やし、赤ちゃんサークルの運営も始めました。赤ちゃんサークルから子育てサークルに流れ、子育てサークルでフリーになったお母さんが今度は赤ちゃんサークルを運営する循環型の運営を行いました。振り返ると、深く考えて始めたわけではなく自然の成り行きで広がっていきました。サークルを立ち上げた翌年の平成 13 年に、多胎児のお母さん達を対象とした広場事業が行政で始めることになり、ボランティアとして声がかかりました。自分達でやるから学びがあるという、これまでのサークル活動の経験から、お母さん達をお客さん扱いするのではなく、広場で仲間を作ってもらい、お母さん達の声を拾いながら一緒に広場を作り上げていく運営を選択しました。結果、3 年間の広場事業の後、広場に参加したお母さんの仲間達と自主サークルに移行してスタートすることにつながりました。現在は県内の短期大学で非常勤講師として働きながら、仕事とサークル活動を両立させています。

④　家庭教育支援者としての転換点

サークルを立ち上げ代表としての活動を始めてみると、公民館や地域などに目を向けないと活動していけないことに気づきました。この頃、市内の各公民館に子育てサークルを作る流れもあり、行政の動きも感じながら中身のあるものを行政と一緒に作っていくことを、子育てサークル連絡会の運営を通して経験しました。また、ある大学の先生と出会い、私自身の子育ての経験を活字で残すようアドバイスを受けました。その先生との再会と経験談をまとめた冊子が縁で、平成 15 年に県主催の家庭教育相談員の研修講座でシンポジストとして登壇しました。その後、少しずつシンポジストや講師として人前で話す依頼が来るようになりました。平成 20 年には短期大学でコーディネーターとして子育て支援者を支援する活動へと進み、平成 22 年から短期大学の非常勤講師として学生に教える立場になりました。

⑤　目指しているビジョン

私は子育てを大切にする社会になって欲しいと思っています。だから、子育てをしたいお母さんが専業主婦になる道もあって当然だと思うんです。今は、子育てを真ん中に置かず、自己実現ばかりにターゲットを置いて仕事をする女性に焦点があてられている点が不安です。母子分離託児についても、自分達の楽しみのために子どもを預けて、その後、いつもの生活に戻るのを嫌がるというケースは失敗だと思います。何のために親子が離れる時間をもつのかがわからなければ、親は育たないと思います。あと、サークルの後継者育成も課題の一つです。仕事をしなければならない母親達が増えてきていて、サークルを経験しても続けていけない状況が多々あります。私も幼稚園の預かり保育のパートの仕事をして収入を得ながら、サークル活動を続けた経験があります。今も非常勤講師をしながらサークル活動をしている状況です。サークルが有償でやれるといいのにと感じています。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

周りの人に助けてもらい、人に感謝できる自分に気づくことができ、子どもに対する器も大きくなったと思います。色々な経験があることが子どもの気持ちに寄り添う事につながり、子育てにはとてもいい影響があったと思います。何よりもサークルに出会わせてくれた子どもに感謝の気持ちでいっぱいです。その感謝を子どもに伝えたくて、子どもが小さい頃「ありがとう」の気持ちで抱きしめてあげるようにしました。すると、子どもの心や行動にも安定した様子がみられました。サークル活動の良さはそういう気づきがあることだと思っています。また、サークル活動に黙って理解を示してくれた夫や姑にも感謝しています。そのような気持ちで、家族とのコミュニケーションがとれるようになりました。自分が変われば子どもや周りの人が変わるといいますが、本当にそうだと思っています。

Ｆ町のＯさん（60 代後半）
現在の仕事（所属）子育て広場スタッフ

①　今日に至る経緯

昭和 24 年、大分県Ｉ市に生まれ、両親に兄 2 人、姉、妹の 5 人兄姉妹の家庭で育ちました。父が自宅で自営業をしていました。住んでいた地域は山奥にあり農家や商売を営む家しかなく、子どもの頃は年の違いなど関係なく近所の子ども全員で集まって遊んでいました。私が高校 2 年の時に父が亡くなり、高校卒業後は父の友人のお寺が経営する保育園に就職しました。仕事は昭和 47 年に結婚するまで約 5 年間続けました。結婚後は福岡県で暮らしました。子どもは 2 人です。夫は一人っ子で、両親共働きで子どもの頃さみしい思いをしたので、私には家庭に居て子育てをして欲しいと希望していました。私自身も子どもは自分の手で育てたいと思っていたので家庭で子育てに専念しました。今住んでいる町には、長男がぜんそくに罹ったため環境面を考えて、長男の小学校入学前に転居してきました。転居後、3 歳になる次男を保育園に預けることになりましたが、そのためには私が仕事をしていることが条件だったので、臨時で保育士の仕事を再開しました。仕事は次男が卒園するまで続けました。

②　活動をはじめたきっかけ

長男が結婚し 9 年前に初孫が誕生しました。私は自分の孫の面倒をみたいという動機で、今の新しい保育のやり方を勉強しておこうと思いました。昔のやり方と今のやり方とでは全く違うので、孫育てのために勉強が必要だと思ったんです。私が子どもの頃、祖父母は既に他界していましたので、祖父母に接した経験がなく、孫との関わり方もわからないところがあったので勉強したいと思っていました。その頃、たまたま目にした社協だよりで県の育児サポーター養成講座の事を知り、飛びつくように受講しました。平成 15 年、自分の孫を預かるために受講したこの講座がきっかけで、一緒に参加していた社協の職員の方と、せっかくだから何か活動を始めようという話になりました。そして、以前講座を受講した方達や婦人会などの団体にも声をかけて、「子育て広場」を始めることになりました。名前のない「子育て広場」で、月に 1 回、社協の一室を借りてスタートしました。この活動は今も継続中です。

③　活動の変遷

平成 15 年に受講した育児サポーター養成講座で、知らないことを沢山学べる楽しさを実感しました。子育て広場に参加しながら、県の家庭教育相談員研修、家庭教育リーダー等養成講座をそれぞれ平成 16 年と 18 年に受講しました。今も他県の活動の視察などにも出向き情報を収集しています。新しい情報の収集と勉強は続けていかなくてはいけないと思っています。また、平成 16 年には民生委員の活動も引き受けて始めました。民生委員になり、毎朝通学道路に立って子ども達を見送っていると、以前までは小学生は小学生の塊、中学生は中学生の塊としか見えていなかったものが、子ども一人ひとりの成長、育ちを続けて見ることができるようになりました。中には「子育て広場」から見てきた子どももいて、「あのおばちゃん」とわかってくれています。昔は地域のみんなが顔見知りでしたが、今はどこの誰かもわかりませんよね。地域のつながり、赤ちゃんからお年寄りまで、顔を見ればわかるよう、つながることができるようになればいいなと思います。「子育て広場」がスタートして 2、3 年経過した頃、コーディネーター役の社協の職員の方が退職されることになりました。それまでは社協に全てを頼っていましたが、そこから少しずつ自分達で動くようになってきました。平成 20 年、社協に新しい局長が就任され、活動への助成金を取ってもらえることになりました。その時、サークルの規約や代表を決め、そこで初

めてサークル名をつけました。時間の経過とともに、組織が大きくなると運営上の悩みもでてきます。それぞれの価値観や思いの違いもあるので、これからはもっと人間関係、コミュニケーションを大切にしていきたいと思っています。そういった点をもう一度勉強して、スタッフとの話し合いや活動を進めていく時に、素直に自分の思いや意見を伝え、いい方向にもっていけるようにしていきたいと考えています。活動をする上で、支援者は 1 人でも多く増やしていくことが大切だと思っています。これまでは支援者を募る時、子どもを育てていたら誰でもできると思っていましたが、そういうことは言えないと気づきました。実際、支援に入ってくれる人の中には子育てを経験していない人もいます。だから、「子どもが好きな人は誰でも来て！」と呼びかけるようにしています。いろんな人が、子どもが小さい時からかかわってくれる方が、子どもの育ちや人格形成上いいと思うからです。今は、放課後子ども教室でも、毎月第 1、3 土曜日にボランティア活動をしています。ここでも、「子育て広場」に来ていた子ども達に会うことができるので楽しいです。

④　家庭教育支援者としての転換点

名前のない「子育て広場」がスタートした頃は、軽い気持ちで参加していました。まだ自分の用事が最優先で、「私でなくても誰かがするからいいや」という気持ちが強くて、広場には行ったり行かなかったりしていました。その当時は、お世話をしてくれるコーディネーター役の社協の職員 1 人と、保育士経験者や看護師、婦人会の方などスタッフ 6～7 人で活動をしていました。ある時、スタッフがコーディネーターとスタッフの 2 人だけの時があり、後から「あの時はどうしていいかわからなかった」「本当に困った」という話を聞いたんです。その時、「自分の役割は期待されていたんだ」ということに気づいて、自分の役割とスタッフの責任というものを自覚しました。それから、まわりのスタッフにも声をかけ、活動に使命感をもって取組み始めました。

⑤　目指しているビジョン

私達の子育て時代の頃から核家族が増えてきたように思います。子育てで悩んで苦しんで助けがほしくても、周りに言えずに苦労してきた経験があるので、今のお母さん達を助ける活動ができればいいなという思いがあります。活動をする上で行政との関わり、力を借りる部分は大きいです。サークル活動も社協のおかげで続けられています。でも、これからのサークル活動は、自分達でやっていける力をつけていく必要があると思います。できないことはお願いしますが、自分達でできることはやる、というスタンスでいきたいです。1 人が担う部分が大きすぎる時は、いろんな人に活動に入ってもらうと肩の荷が分けられます。それぞれの人ができることをやり、いろんなところとつながり、みんなができることを一緒にやる。地域の子どものために、地域のみんなでの取組みを形にしていければと願っています。

⑥　活動をはじめてからの私生活の変化

私は好奇心旺盛な性格で、何でもやれば楽しいからはまってしまいます。好きな事なら趣味と同じようにできます。だから、今もいろいろな活動で忙しい毎日を過ごしているのですが、夫の協力がなければできません。何も言わずにずっと支えてくれているので感謝しています。活動については 70 歳になれば辞めようと考えています。人間は年をとると体力的にも落ちてきますが、考え方や頭も固くなってきて、周りに迷惑をかけてしまうかもしれないと思うからです。だから、それまでもう少し頑張って、その後は忙しすぎて後回しになっていた自分の趣味に取組んでいきたいと思っています。

４　調査結果の考察

生涯学習基礎データ調査事業　ワーキンググループ委員
相戸晴子（佐賀女子短期大学大学連携ＧＰコーディネーター）

本節では、支援者ヒアリング調査の結果をもとに、家庭教育支援や子育て支援の活動に取り組んでいる実践者を、支援者＝学習主体と位置付け、その形成過程の考察を行う。そこには、現在、支援活動を行っている人々が「支援者」という資格や専門職等の社会的規定がなされていないにも関わらず、それぞれが学習や活動を通して、支援者としての資質や能力の獲得を行い、地域における家庭教育支援や子育て支援活動を担っている現状に着目したからである。６人の実践者の語りから、①支援者に至ったプロセス、②支援者の語りにみる到達点と課題をとらえていきたい。

（１）支援者に至ったプロセス

○子育て当事者の悩みから始まった学びと支援（Ｈさん）

Ｈさんは、学習障害のある長男のことで「いじめ」や「学校との折り合いも上手くいかず」悩んでいた時期に、県の広報誌に出ていた子育て支援リーダー養成講座を知り受講していた。また、以前参加した支援団体の催しについての感想を「自分の困った事を話すことはできても、他の親同士の交流もなく、他の人の話も聞けない内容だった。一緒に参加した子ども達も誰とも交流することができず、そこに自分の居場所をみつけることができなかった。」と述べ、支援活動での実感も受講動機につながっていたとみることができる。

受講前は、「自身への悩み解決へのヒントがあれば」や「自分自身を振り返りたい」など、子育て中の親としての立場や、「他の人への支援があればいい」「長男にとっても充実した支援があれば」という支援を求める立場＝子育て当事者個人としての悩みを解決するために学びをスタートさせていたが、受講後は、「自分にできることはないだろうか」と社会福祉協議会にボランティア登録を行い、「町の子育て支援センター立ち上げのボランティア」としての活動に関わっていくなど、私的な問題解決に向けた学びから公的な子育てや子どもの活動に展開していっている。平成 20 年からは、「子どもの居場所づくり」コーディネーターとして再び、子どもや子育てを支援する活動を再開していった。そこでも、「どちらかといえば、場に上手く入っていけない子どもに関わっている。」と語り、学習障害の子どもや子育てを支援したいというＨさんの原点が大切にされていた。

○保育士の職務としての支援から支え合いの支援へ（Ｔさん）

Ｔさんは、保育士をしていた平成 14 年に県家庭教育相談員研修を受講し、他の受講者や講師陣から、パワーと刺激を受けたことで「自分も何かしなければ」という思いが強くなったという。その語りには、家庭教育支援や子育て支援の課題と必要性を認識した実感がこめられていた。そして、すぐに行動を起

こし、保育園や育児サークル活動の支援、障害者自立支援などに取り組んでいくが、「人間関係の難しさや価値観の違い」に直面し職や活動を離れていく時期があった。平成21年より、認可外保育園で再び保育士として働き始める。平成23年からは、異動で保育園を離れたため、保育士としての復帰はしばらくないが、「人を育てる仕事や活動はやりたい。（略）アンテナを持ち続けていたい。」と平成23年度の県家庭教育支援リーダー養成講座も受講するなど講座の受講などを続けている。そこには、講座で出会ったＴさんの暮らす町の実践者から活動の声掛けをしてもらったことも後押しになっている。「今、暮らしている町では活動をしたことはないが、一度、その活動を見学してみたいと思っている。そして、何か一緒にできればいいなという思いを持っている。いろいろな講座を受ける（略）ことで人との出会いやいろいろな話を聞く機会ができる。そういうことが（Ｔさん）自身に変化をもたらしてくれると感じている。」ここには、子どもの専門家から親子を支える支援者、そして地域を構成する一人であることを意識してきた経緯を見ることができた。

さらに、Ｔさんは、「これまでの経験や活動を通して、今まで気づかなかった事も見えるようになってきた」と語る。中でも、「（人に感謝を伝える大切さを学んだことから、）小さい時に距離感を覚えていた父との親子関係が少しずつ変わってきた。」ことや、自分が支援者として親子を支えている、育てていると思っていたが、「（自身の）母親を亡くし落ち込んだ時、保育の仕事で出会う先生達や親子に助けられた経験をした。」といい、支援活動を通して、人は「（支援しているつもりが）自分が支えられていた」「お互い様なところがある」と考えるようになったという。Ｔさんにととって、支援活動における「支援する⟷支援される」という関係性は、「職務として支援する」関係から「人として支え合う」関係性になりつつある。

○親へのまなざしの変容と自立支援に向けた関わり（Ｙさん）

「家庭教育支援者として考え始めたのは、平成15年から始めた子育て支援総合コーディネーターの仕事に就いてから」とあるように、Ｙさんは職務として、支援活動に携わるようになった。託児所の仕事では、「『私でなくてもいい』とジレンマを感じていた。」が、この仕事を元臨時で働いていた公立保育園の園長先生に、「『あなたに（この仕事をやって欲しい）』と言ってもらったことが何よりも嬉しかった。」とあるように、声を掛けてもらったことと仕事のタイミングがあったことから、この仕事に就くことになった。

Ｙさんが最初に受講した平成14年の県家庭教育相談員研修は、当時病院内の託児所に勤めていた時期であり、「保育士のスキルアップという意味合いが強く、支援者として受講した意識はなかった。」とあるように、子どもの専門家として勉強したいという理由に留まっていた。しかし、平成15年から現在の支援の仕事に就き、行政の子育て支援や親子の気持ちを考えていくようになった。そして、日々の実践や同僚の存在、また同僚からの紹介された本を通して、「今までは子どもを通して親をみていた。でも、親には親の都合がある。そうなりたくてなったわけではない。社会のいろいろな背景があって今に至っ

ている。親が知らずにやっているのであれば、教える場や気づかせる場が必要なのだと、親の側に立つような考え方、見方になってきた。」と親へのまなざしが変容していった。さらに、平成 17 年の県家庭教育支援のリーダー養成講座では、受講生とつながり、ネットワークを図っていくことによって、「人とのつながりで視点がひろがった。」ことを実感していた。

子どもの専門家であったＹさんは、現場の実践や人との出会い、そして研修機会などを通して、支援の視点や仲間との関係を広げ、「お母さんたち自身を活かし、支援が必要な人がそこに行けばホッとして力が湧いてくる。そして、自分の力で旅立っていけるような支援」という自立支援を大切にした親子支援の役割りを担っている。

○社会とつながるための場づくりと市政への参加（Ｍさん）

Ｍさんは、家族の支援やまわりからのサポートもあり、「育てる環境で孤立したことはない」と自分の子育て状況について語っている。しかし、地域活動に熱心な先輩から、「地域活動に熱心だし、自分の住む地域で活動をした方がいい」との助言を受け、第 2 子の誕生後に親子で参加できる市主催の乳幼児教室に通い始めた。翌年教室終了後は、受講生でサークルを作り、Ｍさんにとって「子育てを楽しみたいと思う場所、社会とのつながりの場所」となった。乳幼児教室との出会いについて、「子育てで何が大切かなどを考えたりすることも多かった。この教室に参加していなければ、別の道に進んでいたかもしれない。」との語りもあり、Ｍさんの子育てや生き方の分岐点になっていたことがわかる。

サークル立ち上げ後、Ｍさんは、読み聞かせ活動、サークル会報発行、子どもセンターでの情報誌発行、ネットワークづくり、子育てサポーター、ブックスタート実行委員、サークルリーダーの会、アンケート調査事業、家庭教育支援チーム、子育て学習グループの活動に関わったり、新たに会を発足していった。そこには、わが子の成長が中心に据えられ、「乳幼児から学童期の大切さへと視点が移っていった」ことにより、活動対象の年齢や内容が展開されていった経緯があった。

また、Ｍさんは、「自主的に他の活動とつながるため、行政改革懇談会や女性の集いにも参加した。」と、活動を充実させていくために市政に積極的に参加していった。そこでは、活動を通して行政や施策が活動に影響を与えることを認識していたにも関わらず、「個人の意見は社会に届きにくいことに気づき、会の意見を発信するために委員などを引き受けるようになった。」ことを痛感していたからであろう。

これまで従事した仕事についても、活動の延長上に置かれ、活動の中でみえてきた福祉と教育の行政施策の連携や公民館の重要性から、社会教育指導員（嘱託）を引き受けたり、認定子ども園で子育て支援の仕事に携わっている。今でも、家庭教育支援や子育て支援の講座を受講したり主催したりしているのは、活動も仕事も「子育てしやすい環境」を目指しており、「支援者のスキルアップが何より大切だと思うので、支援者は常に学び続けなければならないと思っている。」Ｍさんの学びに対する考え方であり、生き方にもつながっている。

○親子の育ちを支える子育てサークル活動（Ｎさん）

Ｎさんは、「幼稚園教諭だったので、理想の母親像や子育て像があった。」が、初めての子育てが双子だったこともあり、想像以上の子育てに子どもを愛おしいと思う余裕さえなかったという。また当時の大変な子育て状況について、「授乳や夜泣きで毎晩１時間寝られればいいという日が続いていました。(略)一人が泣き出すともう一人まで泣き出してしまいました。その瞬間、『もうお願いだから泣かないで』って、双子の鼻と口を押さえそうになったんです。母親、人間としての自分がガラガラと音を立てて崩れ、自信喪失、自己嫌悪に陥りました。」と語られ、睡眠不足や疲労、一人で子育てを抱える精神的なストレスから、極限状態に至っていたことがわかる。家族等の協力もあったが、最もその時の自分を支えてくれたのは、「目の前にいる双子の笑顔」だったという。Ｎさんは、その時の心境を「子どもたちが私を親にしてくれる。少しずつ母親になっていこうと思えた。」と述べている。その後は、「子育てへの気持ちが前向き」になり、双子が幼稚園に通いだしたころから、「自分のために友達を作りたい。そして何より子どものためになるだろうと思い」地域で開催されていた子育てサークルの活動に下の娘と参加し始めた。子育てサークルを続けていく中で、少しずつ役割を担っていき「自分のできることをやることで役に立つことができる喜びを感じ、サークルへの意識が変わっていきました。子どもを連れて、一参加者として通った子育てサークルでしたが、私も班長になって、初めて参加するお母さん達の友達になってあげたいと思いました。」ここが、Ｎさんがサークルの一参加者から担い手に移行したプロセスであり、現在も活動主体であり続けながら、支援者的な役割を担うスタンスが生まれている。

その後は、サークルのスタッフ、サークル立ち上げメンバーとして運営に関わっていき、同時に子どもを連れてのサークル活動の大変さを痛感していくことにもなった。その経験からＮさんは、「(子どもが幼稚園や小学校に上がった）フリーになったお母さんが今度は赤ちゃんサークルを運営する、循環型の運営」を作っていった。もちろん、してあげる支援ではなく、「自分達でやるから学びがあるという、これまでのサークル活動の経験から、お母さん達をお客様扱いするのではなく、広場で仲間を作ってもらい、お母さんたちの声を拾いながら一緒に広場を作り上げていく運営を選択」している。

活動を通して、行政や地域を意識し始め、一緒につくっていく経験もした。平成 15 年の県家庭教育相談員の研修講座を皮切りに研修会で登壇したり、受講していく機会も増えた。短大で子育て支援や講義を担当する仕事についた現在も、継続者不足のサークル活動を何とか支援したいと考え、子どもが大学生や高校生になった現在も関わりを続けている。

○孫育てから学びとつながりを再構築（Ｏさん）

Ｏさんは、９年前に初孫が誕生し、「今の新しい保育のやり方を勉強しておかなければ、昔のやり方とは違うので孫育てのために勉強が必要だと思った。」「(Ｏさんが子どもの頃、）祖父母は既に他界していて祖父母に接した経験がなく、孫との関わりがわからない　ところがあった」と考え、自分の孫を預かるためという動機から学びをスタートさせていた。平成 15 年の県育児サポーター講座の受講後、一緒に

参加した社会福祉協議会の職員と「せっかくだから何か活動を始めよう」という話になり、「以前講座を受講した人や婦人会などの団体にも声をかけて、月１回『子育て広場』を立ち上げ」現在も活動を続けている。孫育て当事者になり学びをスタートさせたことによって、地域ぐるみの子育ての必要性を実感したＯさんが、地域の団体や個人とのつながりを再構築しながら、子育て支援の活動を立ち上げていった様子を伺うことができた。その後、家庭教育支援や子育て支援の講座を受講しながら、平成 16 年からは民生委員の活動、そして現在では、月２回の放課後子ども教室推進事業のボランティア活動も行っている。

以上、６人の支援者を学習主体という視点から、支援者に至ったプロセスを概観してきた結果、共通項として以下３つをあげることができる。

①支援者は学習と実践の両輪をもっていたこと

学びから実践を始めた人、実践しながら学び続ける人、実践を振り返ること＝学ぶことによってさらにいい活動やいい支援につながっていった人、そして自身の生き方にいい影響をもたらしていた人など、学習と実践を織り込んでいくことが、支援者になるプロセスに共通していた。

②支援活動や地域参加を後押しする人の存在があったこと

支援者としての始めの一歩を踏み出す際には、職員、先輩、仲間、同僚、そして家族や子どもなど、人からの声掛けやアドバイス、サポートや笑顔など、何らかの人の存在がみられていた。そこには、「人の役に立つ喜び」や「あなたに」と求められることも、人との関係の中でしか実感することができないことであり、支援者としての活動するうえで大きな後押しとなっていた。

③支援者に至るプロセスには３つの特徴がみられていたこと

６人のプロセスを通して、大別して３つの特徴にわけることを試みてみた。ここでは、支援者に至るプロセスは、多様であることを肯定しつつ、特徴的なプロセスをとらえていきたかったからである。３つの特徴は、

a. 子育て当事者から支援者へ

b. 子どもの専門家から親子を支える支援者へ

c. 子育て活動主体であり続ける支援者

である。a は、学習障害の子育て当事者であるＨさん、孫育て当事者となったＯさんが支援者に移行していくプロセス、b は、保育士から人を育てる仕事や活動に移行してきたＴさんや親側に立って親の育ち支援に取り組み始めたＹさんのプロセス、c は、活動の主体者であり続けることが親子の子育て環境をつくる担い手＝支援者になっているＭさんやＮさんのプロセスであり、いずれも現在の支援者の特徴的なプロセスとみることができよう。

（２）支援者の語りにみる到達点と課題

○支援者の語りにみる到達点

６人の支援者たちは、当事者目線に立って、当事者を支える支援職として、活動主体であり続けることの支援によって、現在も多くの親子の家庭教育支援や子育て支援を担っていた。始めの一歩は人の後押しがあったものの、支援者の意欲と行動で学習と実践は主体的に取り組まれていた。支援活動が支援者としての資質や能力をとらえることは、「資質」「能力」の評価軸に議論が必要なため、本調査では到達できなかったため研究課題として残しておくが、６人の支援者が、社会にとって、地域にとって、親子にとって大きな役割を果たしていることは、支援者に至るプロセスにおいて周知の通りである。親子の姿（支援された）や、支援者自身の豊かさ（家族との関係者、わが子の成長）の語りからも活動の成果を伺うことができる。

６人の支援者のほとんどが、この支援活動の延長線上で仕事をしている人、もしくは仕事から支援活動につながっていたことも到達点の特徴としてあげておきたい。学習との両輪による支援活動を行っている６人は、それぞれの機関や部署で重要な役割を担っており、子育て支援施策の必要性とともに、公的な仕事として支援活動が位置づいてきているあらわれともとれる。

○支援者の語りにみる課題

しかし、支援活動の仕事については、表裏一体で課題が多くみられる。支援者たちも「正規職員ではなく嘱託としての採用ではあったが、(略) 考えたとき、今のコーディネートの仕事をやりたいと思った。（Ｙさん)」や「このような活動、経験が雇用につながっていくことができればと願っている。ボランティアはどうしても不安定。(略) 支援される人から支援する人へ、より当事者に近い人の存在や支援の質を高めていく環境が必要だと思う。(Ｍさん)」「仕事をしなければならない母親達が増えてきていて、サークルを経験しても続けていけない状況が多い。(略) サークルが職業としては成り立たないところに問題も感じている。（Ｎさん)」と語り、位置付けや仕事として成り立たないことに課題を感じている胸の内も明かしていた。

６人の雇用形態においても、ほとんどが嘱託や臨時職員にとどまり、期間や給与、できる仕事に制限が設けられていた。仕事に対する思いとやる気はあっても、期限や制限があり支援活動を長く継続することが難しい状況なのである。そこでは、支援者＝就労者としての課題だけではなく、支援活動機関における支援者の資質や能力をどう維持、向上させていくかという課題も残る。もちろん、ボランティアや相互扶助によって関わる家庭教育支援や子育て支援活動が、現在の日本を支える支援活動実践の多くを占めている状況であることから、仕事=雇用と支援活動を安直に結び付ける議論は、丁寧に行っていく必要がある。

Ⅴ　調査のまとめ

生涯学習基礎データ調査事業　ワーキンググループ委員
相戸晴子（佐賀女子短期大学大学連携ＧＰコーディネーター）

アバンセ生涯学習基礎データ調査事業では、平成22～23年度の２ヶ年に渡り、「家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究」に取り組み、3 つの調査を実施してきた。本調査研究の大きな問いであった「届けたい家庭に支援が届いているのだろうか。」「かゆいところに手が届く支援になっているだろうか。」という視点から、本章では3つの調査のまとめを試みる。

１．行政調査からみえてきたもの

（１）行政調査にみる佐賀県市町の支援施策の状況

１ヶ年目は、佐賀県全市町の家庭教育支援・子育て支援の施策を実施している行政関係各課を対象に、「家庭教育支援および子育て支援に係る取り組み事業アンケート調査（以下、行政調査）」を実施し、佐賀県内の全20市町で取り組まれている家庭教育支援や子育て支援に関する事業における①総量、②事業内容と実施主体、③自治体間で事業内容と総量に格差が生じている現状把握をすることができた。（詳細は、佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）「家庭の教育力向上にむけた支援の方策に関する調査研究－行政編－」平成23年3月発行の報告書を参照。）

とりわけ3点目の自治体格差については、これまでの研究において数値化されにくい部分をとらえることに試み、事業実施という一側面とはいえ、家庭教育支援や子育て支援施策の自治体状況の一端をあきらかにすることができた。

（２）追加調査の結果＜その１＞－自治体格差をもたらしている支援施策の背景－

これらの行政調査の結果を受け、自治体格差をもたらしている支援施策の背景について検証を行った。

自治体の事業実施が「子ども人口の多い少ない」や「自治体の財政状況」によって格差を生じているのではないかとの仮説のもと、自治体の18歳未満人口[1]と財政力指数[2]と事業実施合計数[3]の比較調査とその考察結果を記す。（※以下の内容は、日本生活体験学習学会誌『生活体験学習研究12号』に掲載された相戸晴子「家庭教育支援・子育て支援施策の一考察－佐賀県Ｆ市事例を中心に－」から一部抜粋して掲載する。）

表1　佐賀県市町における18歳未満人口に対する事業実施指数と財政力指数

no.	市町村名	事業の合計	18歳未満人口（平成22年7月1日現在）	財政力指数
1	A市	(3) 1602	(1) 42139	(4) 0.67
2	B市	(2) 1983	(2) 23012	0.45
3	C市	(1) 4030	(3) 13671	(2) 0.99
4	D市	(5) 502	(4) 10382	0.64
5	E市	(4) 659	(5) 9227	0.50
6	F市	353	8,844	0.48
7	G市	102	5,771	0.47
8	H市	77	5,694	0.44
9	I市	320	4,972	(-5) 0.42
10	J町	(-3) 27	4,397	(-2) 0.34
11	K市	69	3,941	0.53
12	L町	39	3,722	(-4) 0.41
13	M町	266	3,543	(-3) 0.39
14	N町	(-5) 37	3,167	0.61
15	O町	362	2,993	(3) 0.73
16	P町	50	(-5) 1898	(5) 0.65
17	Q町	(-1) 10	(-4) 1712	(-1) 0.24
18	R町	45	(-3) 1626	0.47
19	S町	(-3) 27	(-2) 1156	(1) 1.49
20	T町	(-2) 15	(-1) 1100	(-5) 0.42

※カッコの数字は、正数が上位の順番、負数が下位の順番。

○市町の子ども人口と事業の実施状況について

市町の子ども人口と事業の実施状況では、子ども人口の多い上位5つの市町A、B、C、D、E市は、事業実施回数においては3位、2位、1位、5位、4位となっていた。一方、子ども人口の少ない市町下位5つのT、S、R、Q、P町では、T町が下位から2位、S町が下位から3位、Q町が下位から1位に留まり、R町、P町は子ども人口は少ない割には、事業に取り組んでいることがわかった。これらの結果から、子ども人口と事業実施回数は、必ずしも比例していないことがわかった。

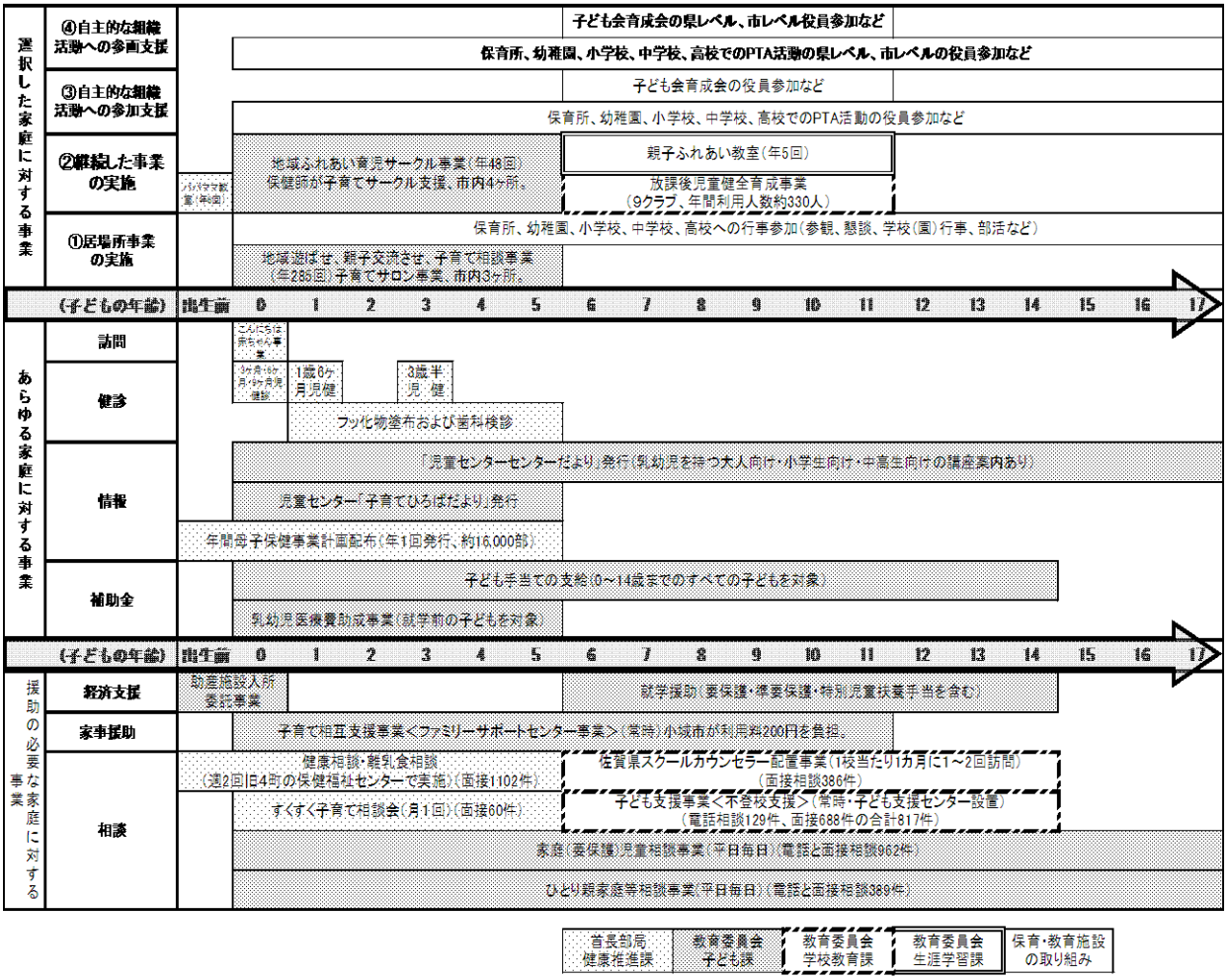
○市町の財政力指数と事業の実施状況について

続いて、市町毎の財政力指数と事業の実施状況については、財政力指数上位５つの市町は、Ｓ町、Ｃ市、Ｏ町、Ａ市、Ｐ町であり、５市町中３つを「町」が占めていた。その市町５つの事業の実施状況は、Ｓ町が下位から３位、Ｃ市は上位から１位、Ａ市は上位から３位であった。一方、財政力指数の下位５つのＱ町、Ｊ町、Ｍ町、Ｌ町、Ｉ市、Ｔ町（Ｉ町とＴ町は下位から同率５位）においては、事業実施数の順位がＱ町は下位から１位、Ｊ町は下位から３位、Ｔ町は下位から２位になり、５市町中３町だけが下位に留まっていた。

これら二つの結果からみる子ども人口、財政力指数に関するが事業実施状況については、上位群と下位群に事業実施状況の概ね多い少ないという結果をもたらしているものの、一つ一つをとらえていくと、子ども人口や財政力指数に必ずしも比例していないことがわかった。そこから推測すると、市町毎が抱く子育て支援や家庭教育支援の問題意識や意欲ー例えば首長の意識やマニフェストなどーや担当課の職員の問題意識や意欲により、施策実施の格差が生じている可能性もあり、今後さらなる検証を進めていく必要がある。

Ｆ市事例にみる施策の実施状況

表2　子どもの年齢にみるF市の家庭教育支援・子育て支援事業の内容



Ｆ市は、県内20市町のうち、子ども人口６番目、財政力指数10番目であり、佐賀県の平均的な市町といえる。行政調査で集約した事業に加えて、誕生前（妊娠期）から18歳未満（児童福祉法の子ども）に至るすべての事業や行政サービスの聞き取り調査[4]を行い、事業の年齢対象という横軸と、対象とする家庭の３領域ーあらゆる家庭に対する事業、援助を求める家庭に対する事業、また選択した家庭に対する事業ーという縦軸をもとに、表２のマトリックスを作成した。

１）子どもの年齢毎にみる事業の実施状況（横軸）

○妊娠期から 18 歳未満まであらゆる年齢で何らかの事業が行なわれている

妊娠期に母子手帳を配布した時を境に、子育て家庭は行政サービスの対象に位置づけられる。そして、選択する家庭には、「パパママ教室」など保健部局が行なう学習会へ参加することができる。また、出産間もない時期は、新生児の家を訪問する「こんにちは赤ちゃん」事業、その後、3 歳半までに 5～6 回に及ぶ健診が実施されるなど、幼児期までに母子保健の分野の事業が相次いで行なわれる。

その後は、教育委員会の福祉や教育の分野での事業が行なわれ、中でも情報提供や相談事業があらゆる年齢対象に、途切れなく実施されていることがわかった。

○事業量では乳幼児の事業が多く小・中・卒生と年齢とともに減少する傾向

次に、事業実施を量でとらえてみた。そこでは、就学前の乳幼児を対象にした事業へ偏りが顕著にみられ、小・中・卒業生と年齢があがるたびに、事業が減少している傾向があった。小学生までは、体験学習や放課後児童健全育成事業などへ子育て家庭が事業に参加するしくみが残っている。しかし、中学以上の子どもやその家庭が参加できる事業は、ほとんど実施されていないという実態がみられた。もちろん、卒業した子どもの多くの生活を占める塾や部活という実態、もしくは社会人になると、事業のニーズがない、参加者が集まらないという現実に即した結果であるとの予想はつくが、学校（塾や部活を含む）や職場という狭い空間で子どもや子育て家庭が過ごしており、地域や多様な世代との接点への空間には居場所がないという側面とも受け取れる。

２）対象とする家庭の３領域にみる事業の実施状況（縦軸）

対象とする家庭の 3 領域を、マトリックスでは、「あらゆる家庭に対する事業」を真ん中にして、「選択した家庭に対する事業」を上位に、「援助の必要な家庭に対する事業」を下位に位置した。それは、上下ではなく、筆者の施策の方向性が子育て家庭が地域や社会に接点をもつことであることから、子育て家庭自らが事業を選択し、関係性を豊かにしたり学び合いをしていくことを支援していく事業が、より地域や社会に参加、参画する道筋が広がっていくという概念で上位に位置づけた。また、「援助の必要な家庭に対する事業」は、特定の家庭への援助とはいえ、行政の支援事業抜きでは子育てしていくことが困難な家庭への支援であり、現代社会における生活権保障という側面から、行政支援事業の根底に据えた。

○援助を必要とする家庭への事業の多様なメニューと多額の事業予算

経済面、生活面に大きな課題を抱え出産を迎える家庭に対する「助産施設入所委託事業」は、母子を入居させ、まず命と健康、そして、その後の自立支援を行なっていく。また、小学校に入ると家庭の経済状況に応じて就学援助金が支給され、義務教育期間の子どもの教育保障を経済支援で行なっている。また、相談窓口の内容は多岐に渡っており、健康、栄養、あらゆる子育て相談から、虐待等に関する家庭児童相談、ひとり親家庭に関する相談、そして学校生活におけるいじめ等の悩み相談や不登校に関する相談窓口に相談員やカウンセラーが配置され、電話や面接という手法できめ細やかな対応をとっていることがわかった。そこには、多様なメニューとともに、援助金や人件費など多額の事業予算が計上されていることもみえてきた。

○対象とする家庭への支援領域を超えてつなげる難しさ

あらゆる親に対する事業の多くが、母子保健に関する事業という児童福祉法に規程された事業であることから、出生届を出した子どもを継続して観察していく事業が行なわれている。また、子育て支援がマニ

フェストに掲げられている近年では子ども手当てなど政府の方針で決まった補助金支給等もある。これらの施策は、家庭に着実に届ける事業となっているが、独立した事業形態のため、地域や社会への接点につながる事業にはなりえていない。

また、援助を必要とする家庭に対する事業では、経済支援、家事援助、相談対応など子育て家庭の問題一つ一つに対応するしくみであるものの、行政の各担当窓口で個人情報に基づく個別の手続きが行なわれているため、一つの家庭の全体をとらえて支援していくということはできていない。

それらの現状から考えると、対象とする子育て家庭の各領域内での事業利用に留まり、例えば、援助が必要な家庭が、選択して事業に参加・参画していくことが困難な状況にある。

○事業への参加から参画に至る道のりの遠さ

子育て家庭が選択して参加する事業、Ｆ市では例えば、乳幼児を持つ子育て家庭を対象とした子育てサロン事業「地域遊ばせ、親子交流させ、子育て相談事業」が市内３ヵ所で年間 285 回行なわれている。また、保健師さんが主催する「地域ふれあい育児サークル事業」が、市内４ヵ所で年 48 回開催されており、選択した子育て家庭の親子が地域の事業に参加する機会を創りだしている。しかし、いずれも行政主催事業に親子が参加するという段階に留まり、そこから自主的なサークル活動や子どもや子育ての活動につながっている様子は見当たらない。そこには、予算化された事業の場合はよくても、そうできなくなったときにどう持続可能な育ち合いのしくみを用意していくかという課題が残る。

しかし、現実には、参加から参画への道のりを考える以前に、不参加から参加への道のり、すなわち家から一歩を踏み出すことができない家庭をまず支援していく必要に迫られている。また、参加しても、場合によっては子育て主体をお客様にとどめ、自ら活動していく主体としての形成を阻んでしまっている可能性がある。育児サークル事業は、行政主催の公転する事業から始めても、回数を重ねていく中で、最終的に子育て主体が自転して取り組む事業に移行していく自立支援の方向性が必要となろう。

以上、Ｆ市事例で支援施策の全体像をとらえた結果、子どもの年齢に合わせた事業とのつながり＜横軸＞と、対象とするあらゆる家庭への支援とともに地域に参加・参画する階段づくり＜縦軸＞が重要であるということがわかった。自治体では、実施事業の総量の格差是正をすすめるとともに、支援事業の縦軸横軸を総合的にとらえ、つないでいくというコーディネートに課題が残されているのである。

２．保護者調査からみえてきたもの

保護者調査においては、本報告書の永田報告「Ⅲ　保護者アンケート調査の結果」で述べられたように①家庭の経済状況や家族形態にみられる教育費の格差、②親の子育て意識や行動を左右する保護者同士の人間関係のゆたかさ、③子どもの生活状況を支える３者関係－子育ての悩みや不安・学習機会・地域参加－をとらえることができ、行政調査で把握した支援事業と保護者のマッチングがいかに、子どもの生活状況をつくっていくうえで重要であるかが確認できた。また、支援事業と保護者を結びつけるアプローチを考えるならば、子どもを媒介にした事業や行事に高い参加率がみられていたことから、学校教育や地域行事を切り口にしながら、子どもとともに学校や地域行事への参加→関係者相互による信頼関係の構築→多様な学習機会や地域（行事）への参加・参画への道筋につなげていくコーディネートが重要であろう。

３．支援者調査からみえてきたもの

支援者調査においては、本報告書の「Ⅳ　支援者ヒアリング調査の結果」で述べてきたように、６人の支援者の語りから、①支援者は学習と実践の両輪を大切にしていること、②地域参加や支援活動を後押しする人の存在がみられていたこと、③支援者に至る３つのプロセスパターンーa. 子育て当事者から支援者へ、b. 子どもの専門家から親子を支える支援者へ、c. 子育て活動主体であり続ける支援者ーを確認することができた。その、支援者に至るプロセスでは共通項を見出すことにとどまったが、画一的ではなくいくつかのパターンがあることこそが、現在の多様な家庭環境を対象とした家庭教育支援や子育て支援において、支援の幅をもたしているととらえられる。

子育て当事者にとっても、身近な先輩ママパパのような存在の支援者から専門職としての支援者、また活動主体としての支援者という多様なプロセスから至った支援が存在することによって、子育てに一つの正解を求めるのではなく、多様な子育てモデル、生き方モデルから自らが子育てモデルを構築していけるのではないかと考えられるからである。行政や地域とともに、学習機会と地域参加の環境醸成を進めていくことができれば、より多くの人が支援者に至るプロセスを経て、地域における子育て支援の循環サイクルが現実のものとなるだろう。

４．おわりに

本調査研究において、保護者の状況把握を通して、家庭教育支援や子育て支援における行政の支援事業実施と支援者の存在が不可欠であることを再確認してきた。その結果から、最後に県の生涯学習機関として期待される２つの役割を述べ結びの言葉としたい。

①県内自治体の格差是正のための取り組み

自治体の格差の是正に向けた学習機会の提供や補完、企画立案など事業実施支援、可能ならば助成事業など学習援助も視野に入れた取り組みが求められよう。

②支援者養成プログラムの充実

自治体独自で支援者養成を行うことが困難であるところも多いことから、これまで通り県レベルでの支援者養成を引き続き実施していくことが重要である。また、今回あきらかになった学習対象としての「支援者」が、多様なプロセスを経ていることにも留意して、学習プログラムを整理し、より充実した内容をつくっていくことが求められよう。

---

[1]「国勢調査人口動態」佐賀県市町一覧参照。

[2]「財政力指数」とは、地方公共団体の財政力を示す指標として用いられるものであり、基準財政収入額を基準財政需要額で除した数値である。

ここでの指数は、佐賀県 http://www.pref.saga.lg.jp/web/kensei/_14562/_12812/_13061/_53197.html「佐賀県市町財政状況一覧表」平成21年度を参照。

[3] ここで自治体の事業実施の対象として扱う事業は、①講座・講演会・イベント、②居場所づくり事業、③相談事業、④訪問事業、⑤情報提供事業、⑥サークル・ＮＰＯとの協働・共催事業とし、それぞれ①は実施回数、②は開催回数、③は窓口数、④は事業数、⑤は事業数、⑥は事業数の合計を出し点数化を行った。

[4]【Ｆ市調査】佐賀県の20市町の中から一つの市町を抽出し、子ども年齢における施策の実施状況のマトリックスを作成するためのヒアリング調査の概要。①名称：「Ｆ市の家庭教育支援および子育て支援に係る取り組み事業の調査」、② 調査の目的：Ｆ市の家庭教育支援および子育て支援事業の取り組み状況の詳細把握。また、その事業が子ども年齢のどこを担っているかをあきらかにするため。③調査の対象：Ｆ市教育委員会子ども課子育て支援係職員、Ｆ市健康増進課母子保健担当保健師。④調査の方法：ヒアリング調査、⑤調査の実施日：2011年8月31日、9月2日、9月12日

Ⅵ　調査結果を受けて　調査研究委員のコメント

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
大橋　隆司（小城市教育委員会こども課長）

平成22年度に実施した県内自治体へのアンケート調査に引き続き、平成23年度は子どもが小学校に在籍する子育て中の保護者に対してアンケート調査を実施すると同時に、子育て支援を行っている実践者に対するヒアリング調査を実施した。これらの調査により、本県における家庭教育支援事業の実態、全体像を重層的に捉え、課題を浮き彫りにできたことの意義はとても大きい。

保護者アンケート調査の結果をみて、保護者の期待が学校に向かっており、社会教育や家庭教育支援分野への期待がまだまだ小さいことを改めて感じた。そのことは、①「子どもが通っている学校や幼児教育・保育施設での行事」への参加 89%に対し、「子育てや家庭教育に関する講演会」への参加 21.2%、②子育てに関する悩みの相談相手として、「家族や親戚」「友人」に次いで多い「学校の先生」41.7%に対し、「地域の子育て支援者」や「行政」はそれぞれ9%程度、というデータからも読み取ることができる。社会教育、子育て支援に携わる行政の立場から考えると、学校や幼稚園・保育所を核あるいは舞台にした子育て支援・家庭教育支援活動のためのアイデアや仕掛けづくりなど、学校等との連携がより一層求められていくだろうという思いがする。

また、検討会議のなかで経済困窮の家庭や精神的ダメージを受けて孤立する家庭、保護者に対する子育て支援についての議論が印象に残る。行政や関係機関の支援の網からこぼれ自発的に支援を求めることができない家庭に対してどのような支援の機会が提供できるのかという問題、孤立化から脱出して社会との関係を修復し、自ら子育て支援する立場の人材として成長していくという「子育て支援の循環サイクル」の構築に関する視点は、現在社会を生きる子育て世代の厳しい現実を再認識するとともに、今後の支援のあり方を考える上でのヒントになる貴重なものだったといえる。

最後に、2 ヵ年間この調査研究に参加させていただき、家庭教育支援に関する今日的課題を認識し整理する機会を得ることができて大変有意義だった。いろいろとご教示くださった委員の皆様をはじめ、学ぶ機会を与えていただいた生涯学習センター（アバンセ）の関係各位に深く感謝します。

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
山口　ひろみ（NPO 法人唐津市子育て支援情報センター長）

今年度実施された保護者アンケート調査で、家庭教育の現状を知り得ることができたのではないかと思う。また保護者にとっては、アンケートを読む・書くことで、自分自身の子育てを振り返ることできたのではないだろうか。

現場で感じていたことが、アンケート調査結果から、やはり浮かび上がってきた。それは、子育てにおいて相談できる人・場・時間が必要ということだ。

調査では、21%の保護者が同じ小学校の保護者の中に相談できる人がいないと答え、さらに、半数以上の保護者が子育ての相談に乗ることがないと答えていた。子育て中の仲間ができる時間や場所、きっかけがないのではないか。もし、仲間がいれば、ちょっとした相談や子育ての話もできるし、相談に乗ることもあるだろう。ほんの少しでも支えになることができたと思えると、きっと自信を取り戻し、元気になる一歩を踏み出せることができるのではないだろうか。

次に、70%近くの保護者が、未就学児で出会った友人と今も交流等を続けていると答えていた。未就学児の子育て中の人と人のつながりの大切さを示している。先日、お母さんからの生の声を聞いた。子どもが未就学児の時に子育てサークル・サロンなどに参加した母親が、幼稚園、保育園、小学校等に行っても地域活動に参加する人が多いそうだ。自分が辛い時、子育てサークルで元気になれた。地域で活動している人が見えてきた。だから今の私がいるという話をしてくれた。このことからも、未就学前の親の居場所がとても必要であることがいえる。

また、課題も見えてきた。地域の支援は必要と大半の方が答えている。特に、一人親家庭へ学校、地域、行政がどのように連携し支援していくかが重要とされるだろう。子育て世代の経済困窮などの課題は、支援する側の限界を感じることもあり、支援の隙間を今後、地域、行政、関係機関等でどのようにして埋めるか議論し、実行につなげることが早急に必要である。

支援者ヒアリングからは、実際の体験をきっかけに希望をもちながら、活動を行っていることがよく分かった。私自身、支援者の立場として多くを共感でき、支援者同士も仲間やつながりが必要だと実感した。つながっていくには、知り、理解し、つながることだと考える。そのきっかけづくりとして、子育て支援者の研修会や講座などがある。ともに資質向上を高め、また情報収集や交流を行いながら、つながりを作っていく。今、とても必要とされていることではないか。それぞれの地域で、子育て中の人や子ども達を元気にしたいという思いをもちながら活動する人達の、笑顔も絶やさないような取組みを行っていくことがとても大切である。

この調査研究に参加させていただき、家庭教育支援の重要性を再認識することができました。子どもたちの笑顔がたくさん見られる地域づくりを考えていく一歩になることができたことに感謝しています。ありがとうございました。

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
新保 哲也（県くらし環境本部こども未来課副課長）

子どもたちに明るい将来を残すために、今の私たちができることは、何なのか。

この問いへの答は一つではないと思います。

教育の分野一つ取っても、様々な取組が考えられます。

そして、一つひとつの取組が連携し、他の分野の取組と相まって答えになるのではないか、そんなふうに感じています。

親が子どもを育てるのは当然として、子どもも親を育てているのです。

初めから、子育てを理解して、子どもに接することができる親はほとんどいないのが現状ではないでしょうか。

昔であれば、大家族で兄弟姉妹も多く、年長者が小さい弟や妹の面倒を見る。そういう中で、小さいころから子育てについて、ある程度の知識を得ていたでしょうし、親になっても、身近に祖父母や子育て中の兄弟姉妹に相談することもできたでしょう。

しかし、5 年前の国勢調査時点と比べて若干改善したとはいえ、人口を維持するのに必要とされる合計特殊出生率の 2.07 を依然大きく下回っています。

少子化、核家族化の波は、確実に親の世代にやって来ています。

これまでは、親の世代はいたのですが、これからは親の世代が減ってくるのです。

子育てに関して、ただでさえ手探り状態の親が、ますます孤立感を深めていくのではないでしょうか。

そういった親が子育ての相談ができるところはどこなのでしょう。

今回の調査結果では、３世代同居率が全国でも高い方である佐賀県においても、親の孤立化が、県内全域で顕著になっているということです。

子どもたちに明るい将来を残すために、今の私たちができることは、何なのか。

もちろん、行政や地域が、家庭教育相談員の制度など保護者への支援に取り組んでおり、黙って見過ごしてきたわけではありませんが、今回の調査結果をもとに、孤立化を深める親に対し、手を差し伸べるヒントとして活用していければと考えています。

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
庄嶋　美奈子（県教育庁学校教育課義務教育担当指導主事）

現在、幼稚園においては地域における幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めることが求められ、相談・情報提供・保護者との登園の受け入れ・保護者同士の交流機会の提供などの子育て支援が行われています。また、すべての市町において、幼小連絡協議会等が設置され、それを活用し、幼稚園から小学校にかけての子ども達の育ちを幼稚園・小学校双方で見ていくという実践に積極的に取り組まれています。

しかし、そういった幼稚園・小学校の取組は始まって久しいのですが、今も不安や悩みを感じる保護者は少なくありません。今回のアンケートにおいても「子育てについての悩みを相談したい人がいない。」と回答した保護者が 1.8%ありました。また、残念なことに「学校の先生に相談する。」と回答した保護者も 41.7%にとどまりました。その内容を見ると「学習や生活に対する不安」などが挙げられ、学校が積極的に家庭との連携を進めているにも関わらず、その姿勢が保護者に伝わっていないことも明らかになりました。こういった保護者とのすれ違いが問題を大きくし、幼稚園・保育所・小学校の多忙化を招いていると言っても過言ではありません。

このような結果から、子育て支援の在り方の見直しが必要であることが分かります。今回の調査委員会では、委員の皆様よりそれぞれの立場からの貴重な御意見をお聞きする中で次の 3 点について考えてみました。

１つ目の見直しとしては「預かる保育」から「保護者と共に育てる保育へ」の意識改革です。保護者が子育てに喜びを感じて親としても成長できるように働きかけをすることです。

２つ目は、子育てに関わる全ての関係機関の取組について広く保護者に知って頂くことです。例えば、小学校入学時に、学校の取組と同時に市町やＮＰＯが行っている子育て支援の紹介を行い、手が行き届いていなかった家庭にも支援が広がるようにすることです。そして、子どもを取り巻く問題を学校だけで抱え込むのではなく、地域の問題としてオープンにしていくことに努めなければならないと思います。

３つ目は、子育てスタッフ、サポーターの更なる育成・発掘です。今回のアンケートにも「私も若いお母さんが困っていたら、いつでも手をかしてあげたい。」「子育てしていて得たものを次の世代に教えられる喜びを感じている。」という感想がありました。幼児期や児童期の子育て経験者の知恵などの活用を図っていくことは、次世代の子育てへの支援となり、よりよき未来への架け橋になると考えます。

これからは、これらの取組が実効あるものとしてなされるように、それぞれの立場で、その具体的な取組を実現していかなければならないと感じます。

生涯学習基礎データ調査事業　調査研究委員会委員
向井 文子（県教育庁社会教育・文化財課社会教育主事）

平成22年度の行政を対象とした調査では、家庭教育支援の取組数や内容に、市町間で大きな違いがあることが明らかになった。しかし、一方で、他の部局や事業と連携することで、より充実した取組にできるのではないかという可能性も見えてきた。今回の保護者アンケート調査と家庭教育支援者ヒアリング調査では、「必要な家庭教育支援を、必要な人に届ける」にはどうすればよいのかという課題へのヒントを得ることができた。

保護者の子育てや家庭教育に関する情報の入手先は、「友人」が82.3%で最も高く、続いて「家族や親せき」「学校・幼稚園・保育所等の教職員」「メディア」の順だった。「市町の相談機関」が7.7%だったのに対し、学校は61.4%と非常に高い。また、「子育てや家庭教育に関する集まり」も、講演会への参加が21.2%に対し、学校や幼稚園・保育所の行事が89%、地域の祭りや文化祭が71%であった。

このことから、「身近」「友だち」「楽しい」「学校」が、「必要な家庭教育支援を、必要な人に届ける」ためのキーワードが見えてきた。それはまた、保護者が人とつながり、社会と関係をもつ入り口になっていると考える。

県では、平成23年度から、子どもの学びや育ちを支える家庭・学校・地域連携の支援体制づくりを進めている。見えてきたキーワードをもとに、「学校」をプラットホームとして、保護者自身も主体的に「身近な地域」とつながり合い、互いに「友だち」となって、「楽しい」と人に伝えたくなるような事業にしていきたい。

家庭教育支援者ヒアリング調査では、支援者自身が悩みや不安を抱え、それでも「自分にできること」を考え、人や社会とつながり、迷いや困難を乗り越えて活動を積み重ねてこられた貴重な経験が語られていた。悩みや不安を抱えた方が、支えられることでその温かさにふれ、「自分でよければ」と、今度は支える側の支援者となる。支えるために、学びを求め、「自分にできること」の質が高まる。人とつながりあうことで、さらに活動の幅が広がる。

子育て・家庭教育支援関係の皆さんと接する時、わたしは、強力なパワーとエネルギー、それと同時に包み込むような優しさを感じ、いつも元気をもらっていたが、今回のヒアリング調査で、その源の一端を垣間見ることができた。併せて、家庭教育支援者の活動のきっかけや転換点に、県や市町がこれまで開催してきた講座や交流会などの人材育成の施策が少なからずあったことも知ることができた。今後も、家庭教育支援者同士が、学び合い、高め合う場づくりと、立場や事業を超えた多様な支援者がつながり合うことのできるネットワークづくりを推進していきたい。

最後に、2年にわたる調査研究で、今後の家庭教育支援に向けて、多くの示唆をいただいたこと、委員の皆様と学び合い語り合う場を与えていただいたことに、深く感謝したい。

Ⅶ　資料編

１　保護者アンケート調査票

２　保護者アンケート自由記述【問３３】

３　保護者アンケート集計データ

子育てに関する保護者アンケート

保護者の皆様へ

日ごろから、佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）事業にご理解とご協力を賜り、ありがとうございます。

このたび、当センターでは、小学１年生の保護者の皆様を対象に、子育てに関するアンケート調査を実施することといたしました。お子さんや地域社会とどのようなかかわり方をしておられるのかなどを調査し、今後の佐賀県の家庭の教育力の向上や地域全体で家庭を支えていくための仕組みづくりに生かします。

お忙しいとは存じますが、ぜひアンケートにご回答くださいますよう、お願い申し上げます。

平成 23 年 10 月
佐賀県立生涯学習センター
館　長　　大　草　秀　幸

～アンケート記入にあたってのお願い～

・このアンケートは、保護者の方がご記入ください。
・いただいた回答は、佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）がすべて集計分析し、統計データとして報告書にまとめます。
・個別の回答内容を学校の先生に見せたり公表したりすることはありません。また、個人が特定されることもありません。安心してご記入ください。ただし、自由記述された内容を個人が特定されないようにして、報告書等で紹介させていただくことがあります。
・回答いただきましたアンケートは、添付の封筒に入れ、封をして、**１１月１４日（月）まで**に、担任の先生にご提出ください。
・このアンケートに関するご質問やご不明な点がありましたら、下記までお問い合わせください。

佐賀県立生涯学習センター
佐賀市天神三丁目２－１１
ＴＥＬ0952－26－0011
担当　重永・北村

Ａ　あなた（記入者）とご家族についておたずねします

※あてはまるものに○をつけてください。「その他」を選ばれた場合は（　）に具体的にご記入ください。

問１　あなたについて、お子さんからみた続柄でお答えください。

１　父　　２　母　　３　祖父　　４　祖母　　５　その他（　　）

問２　あなたの年齢についてお答えください。

１　20 代　　２　30 代　　３　40 代　　４　50 代　　５　60 代以上

問３　世帯の家族構成について、お子さんからみた続柄でお答えください。
下記選択肢の５～８については１年生のお子さんも含めて、お答えください。
また、（　　）にお子さんの人数もご記入ください。

１　父　　２　母　　３　祖父　　４　祖母

５　乳幼児＜０才～小学入学前＞（　　人）　６　小学生（　　人）

７　中学生（　　人）　８　高校生以上（　　人）　９　その他（　　）

Ｂ　お子さん（小学１年生）のことや日常生活のことについておたずねします

※各問ごとにあてはまるものに○をつけてください。

		回答欄			
		とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
問4	日に一度は、家族全員が揃って食事をとっている。				
問5	子どもは、毎日、朝食を食べている。				
問6	学校がある日の朝は、親などが声をかけなくても子どもは自分で起きる。				
問7	平日、子どもは 21 時頃には就寝している。				
問8	子どもを連れて、家族で夜 22 時以降まで外出をすることが、週に１回以上ある。				
問9	休日などに家族で遊んだり、出かけたりすることがある。				
問 10	子どもは、自分の道具や服など、自分で片付けている。				
問 11	平日に、子どもがテレビを見る時間やゲームをする時間などは親子で話し合って決めている。				
問 12	子どもには、宿題や家庭学習をするように声をかけている。				
問 13	子どもの宿題の答え合わせをしたり、本読みにつきあったりする。				
問 14	子どもの翌日の時間割や持っていく物については、親などが毎日、確認するようにしている。				
問 15	子どもが「欲しい」というものは、できるだけ買ってあげている。				

		回答欄			
		とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
問 16	毎日、子どもの学校での出来事について話を聞いている。				
問 17	社会の出来事などについて、子どもに話をしている。				
問 18	子どもが学校や放課後に一緒に遊ぶ友人について、５人以上名前を挙げることができる。				
問 19	現在、子どもを学習塾（通信教育を含む）に通わせている。	はい		いいえ	
問 20	現在、子どもを習い事やスポーツクラブに通わせている。	はい		いいえ	
問 21	あなたが、平日（一日）に子どもと一緒に過ごす時間は、どの位ありますか。 （もっともあてはまるもの一つに○をつけてください）	1　30 分未満／日 2　30～60 分未満／日 3　1～2 時間未満／日 4　2～4時間未満／日 5　4時間以上／日			

C　あなたの子育てについておたずねします

※各問ごとにあてはまるものに○をつけてください。
※問 29～32 で「その他」を選ばれた場合は（　　）に具体的にご記入ください。

		回答欄			
		とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
問 22	市町報や回覧板、新聞における地域情報などは、目を通している。				
問 23	子育てに関する地域(家族や友人以外)からの支援は、必要である。				
問 24	子どもの学校の友人の保護者と会った際は、あいさつや会話をかわしている。				
問 25	同じ学校に通う子どもの保護者の中に、気兼ねなく、子育てや学校生活について相談できる人がいる。				
問 26	小学校入学以後も、幼稚園・保育所やサロン・サークルで出会った友人と今も連絡・交流を続けている。				
問 27	子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある。				
問 28	自らの子育ての経験を活かした活動（子育てｻｰｸﾙ、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱなど）を将来してみたい。または現在、行っている。				
問 29	子育てについての悩みを誰に相談しましたか。また、相談しますか。 （あてはまる番号全てに○をつけてください）	1　家族や親せき 2　友人 3　学校（幼稚園・保育所を含む）の先生 4　地域の子育て経験者 5　市町保健師や相談員 6　その他（　　） 7　相談したい人がいない			

		回答欄
問 30	子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などに参加したことがありますか。 （あてはまる番号全てに○をつけてください）	1　子育てサロンやサークル 2　親子参加の体験イベント 3　ＰＴＡ等の集まり 4　子育てや家庭教育に関する講演会 5　学校（幼稚園、保育所含む）の行事 6　地域行事での祭りや文化祭など 7　地域行事での清掃活動や話し合いなど 8　その他（　　） 9　参加したことはない
問 31	子育てや育児、家庭教育に関する知識や情報は、どこから得ていますか。 （あてはまる番号全てに○をつけてください）	1　家族や親せき 2　友人 3　学校・幼稚園・保育所・児童ｸﾗﾌﾞなどの先生 4　地域の人（子育てｻﾛﾝやｻｰｸﾙ、近所の人） 5　市町の相談機関 （電話相談、児童館、母子保健センターなど） 6　メディア（ﾃﾚﾋﾞ、ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ、携帯ｻｲﾄなど） 7　子育てに関する本 8　その他（　　） 9　特にない
問 32	現在、子育てで感じる悩みや不安はありますか。 （あてはまる番号全てに○をつけてください）	1　子どものしつけや基本的生活習慣 2　子どもの学校生活（友人関係、勉強のことなど） 3　子どもの心や体の健康、発達 4　子どもの身の安全安心 5　子どもへの接し方、対応の仕方 6　子どもの教育費 7　子育てと職業の両立 8　配偶者や家族の子育てへの関わり 9　地域の子育て環境 10 その他（　　） 11 悩みや不安はない

Ｄ　その他

問 33　育児や子育て、家庭教育等について、日頃、感じていることなどについて自由にお書きください。

【自由記入】

質問はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

２　保護者アンケート【問３３】自由記述

【社会、地域への要望・・・４０件】

	記述内容
1	子どもにはのびのびと学習、遊びをさせてあげたい。現代社会は便利になりすぎて楽な方にばかり何事もやっていると感じます。教育の中にももっと老人や先輩方の昔話、苦労話、先人の知恵などを取り入れてみたらどうかなと思います。
2	育児や子育てにもっと父親も参加して欲しいと思います。仕事や自分の趣味のほうを優先していると感じる事があります。私も仕事はしています。家庭のことはほとんどしています。父親の育児、子育てはまだまだと感じてしまいます。
3	育児や子育てを社会や地域とつながりを持って行う事ができると心もずいぶん楽になると思います。できれば小さい集まりで数多く会う機会があると、人見知りの人も仲間に入りやすく連帯感も生まれる様に感じます。
4	仕事と育児の両立はかなり難しい。地域の交流とかにも参加して、同じ年齢お子さんを育てている方と出会ってみたいが、仕事をしていると平日に休みがとれない。どういう支援があるのかは理解しているが、気軽に利用できる範囲ではない。
5	子育てと職業の両立について。核家族の場合、母親が仕事の面接時に必ず「子供が病気の時はどうしますか？」と聞かれ、この点で採用されなかったりします。この不利さをどうにかできないものかと思います。
6	地区の子供クラブに入らない人がいる。交通安全の時の朝当番で横断歩道に立つことなど参加されず不公平感を感じます。
7	親以外の地域の人（子どもの友人の親も含む）が、子どもに注意しなく（しづらく）なったように思います。自分も含めて特にいけないことをしてしまった時に注意していいのか迷う時もあります。人間関係（地域の人とも）が希薄になってきているからでしょうか。みんなで子ども達を見守り、育てていくという環境になってくればいいと思います。
8	周囲には同学年又は同じ学校へ通う子がたくさん住んでいますが、学習塾に通っていたり、両親が働いていたりしてどこかに預けられており、遊ぼうにも誰もいません。遊ぶことが大切なのに友がおらず「それならば塾に一緒に行こう」という悪循環もおこりかねません。「遊ぶこと」が自由にできない子どもたちは、どんな将来を歩むのでしょうか。
9	父親が仕事でほぼ家に居ない。関わり方もあまり上手ではないので、私一人で子育てしている状態。長男（小一年生）にはとても負担をかけていると思う。今から先がとても不安。できるだけ講演会などには出かけていますが、もっと子育てにやさしい社会になってくれるといいと思います。未だスーパーや外出した時、子ども連れの母親に冷たい言葉をいう人や、にらまれる事も多い。社会全体で子育てをしようという感じの地域になればいいと思う。
10	親がいやされれば子どもに本質の自分で接することが出来ると思います。子どもを連れてのサークルやサポート活動を行っている所は多いと思いますが、子育てに関わる（母、父、祖父母等）をサポートする活動は少ないと思う。子どもは託児で、親の話に耳を傾けたり共感し「がんばりが足りないと責めてしまう自分や子どもをしかってしまう自分」などでも、「いいよ　そんなあなたも素敵だよ」と認め合える場があればいいと思う。ありのままの自分を好きになれる子どもに育てたいと思います。
11	これからもっともっと、子育てしやすい環境が整っていったらいいなと思います。
12	天候が悪くても子ども達が体を動かして遊べる健全な屋内の遊び場が地域にあればいいなと思います。
13	子どもにとって家族と過ごす時間はとても大事で、母親との関わり方はすごく影響があると感じています。子どもの小さい間はなるべく一緒に過ごしてあげたいです。仕事をされるお母さんが多いので、子どもが少しさみしい思いをしているのではと心配です。女性の社会進出も大事なことですが、今しか出来ない子育てを不自由なく出来るような社会になったらと思います。そのためには子育てについても学校（高校ぐらい）で学習する機会があればと思います。そして、福祉の充実も願っています。
14	疑問を抱いても正解のない育児は難しくもあり、喜び、楽しみでもあります。子育てサロンや育児サークルは沢山の子ども達と接する機会があり、親子で仲良くなれ、悩みも相談出来、とても有意義な場所でした。どんどんこんな場所が増えるといいなと思います。

15	子どもが3人いますが、それぞれの年齢での関わり方や対応の仕方の難しさ（3人全てに思うように手が行き届かない等）を感じることが多々あります。また、私の両親が近くに住んでいてよく協力してくれるので子育てと仕事の両立ができている状況です。協力者がいないとかなり厳しいと思います。あと、近所に変わったお母さんがいて、その方もお子さんがいるのに子どもが外で遊んでいたり、騒いでいたりすると日中でも「うるさい」と怒鳴られたり、子ども同士のトラブルですぐに言いに来たりされる方がいて、のびのび育てられる環境にないのがとても困ります。そんな時代なのかわかりませんが、子育てしずらい環境だと感じます。全国的に不審者のニュースも多いので子どもの安全面も心配になります。
16	何でも話を聞いてくれる人、自分が聞く、どちらも大切なのではと思います。特に一番大事なのは、父、母、子どもの家族ではないでしょうか。親子関係をどこまで築いていけるか、人間として自分、相手などがどんな教育をしているのか、考えているのか知る事も大事だと思います。子育ては一人では絶対に無理があります。友人、先生など、誰かの助けが必要だと考えます。身近にそういった人がいるかいないかで本当に大きな違いが出てくるはずです！手助けのバトンを色々な人に渡せていけるような親でありたいと思う。子どもにも見てて欲しい。
17	教育（学習面）では、まだ低学年のうちは何とか教える事が出来ますが、学習量が増えるにつれ不安に思います。地域で勉強会などがあったらいいなと思います。子育てサロンの延長上のようなものでいいと思います。親子で学べる機会が今は少ないですから。
18	家族や何でも話せる友人が近所にいるので、迷った時にはすぐに相談し、解決する事が出来、子育てには恵まれた環境にいますが、中には相談する相手が無く、悩まれている方もいらっしゃると思います。そういう方も気軽に立ち寄れ、子どもを遊ばせながらお茶を飲んで情報交換が出来る場がもっと身近にあるといいかなと思ったりもします。
19	子ども達がのびのびと安心して遊べる場所が遠くにしかない。一年生はその地域でしか遊べないので・・・。
20	仕事を増やしたいが、朝、夕、子ども二人にする事を考えるとまだ無理。かといってファミリーサポート事業に依頼するほどでもない。もっと地域の力があれば安全に過ごせるかもしれない。又、職場で子育て世代にもあった時間帯に仕事が出来ればと思う。ほんの少しのすきま時間を確保出来ずにいる気がする。集計結果をWEB等で公開して欲しいです。
21	子どもの成長にはたくさんの人の関わりが必要だと思います。出来るだけたくさんの友達と接し、たくさんの大人の目の届く所で子供が成長出来るような環境を作ってあげたいと思います。
22	うちの子どもはいじめにあったことがありませんが、いじめはなくなって欲しいといつも思っています。
23	子どもの教育や躾について視野の狭い親が多くなった。その子にとって何が一番大切なのかを考えきれていない親が多くて困る。
24	自分が子どもの時と今では子供を取り巻く環境が違っていて、昔と同じようにいかない部分もあり、情報が多すぎて（インターネット等）判断が難しかったりする。時代はどんどん変わるので将来どんな状況でも子ども達がたくましく生きていけるように育てていけるか不安がある。
25	習い事の費用が高い。ボランティアでもっと習い事ができる機会を増やしてほしい。もしくは、もっと情報がほしい。
26	親の収入が子どもの学力と関係があると言われています。どの子どもも一定以上の学力がつく様、地域・学校を通して関わりが持てると良いと思います。世界から見た今の日本の状況を考えるととても不安です。
27	育児と仕事の両立がやりやすい環境をつくってほしい。
28	共働きで毎日ゆっくり子どもと関わりたいと思っていても時間は限られている。職場の環境は良くなっているといっても一部であり、現実は厳しいものがあるが、せめて小さい頃だけでも優遇されても良いのではないか・・・と日々感じています。
29	他県から来ているため町のことも子育てに必要な情報も全くわからず、とても不安なまま子育てをしていました。今は他のお母さん方にとても助けていただいてありがたい。もっとお母さん方と交流できる場所や機会があればいいのにと思います。
30	父子家庭の社会対応。母子家庭との差。
31	親が子どもの部活に集中しすぎて、でしゃばり過ぎている。
32	障害をもつ子やその家族に対しての情報が少なすぎると思います。県内に限らず、県外の情報も取り入れて広めて行って欲しいと思います。色々な障害をかかえた保護者の方みんなが思われている事だと思います。
33	母親も仕事が出来るような環境整備をして欲しい

34	子育ては親のみではとても無理です。同じ保護者同士、同じ地域に住む者として私自身もたくさん支えてもらっています。そんな人間関係が築ける様にお互いが「つながる」事へ、意識を向けていったら良いと思っています。
35	最近目につく事は善悪の区別がきちんと分かっていない子、自分を見て欲しい、構って欲しくてわざと悪い態度や、人をいじめたりしているのだろうなあと思われる子どもが増えているように感じる。
36	両親共に仕事をしているので、ゆっくり関わる時間が少ないので申し訳なく思っています。社会全体が子育てを他にまかせて働かなければならない状況になっているのが心配です。子育てをしながら（子供と関わる時間を持てる）働く環境が整って欲しいと思っています。（保育所や子ども園を増やすのではなく！！）
37	もっと子どもと共に過ごしていたいが、両親共働きで難しい。祖母に大変世話になり、色んな人の手で育てて貰っている事が有難く、また子どもにとっても良いことと思います。が、出来れば働きやすい環境（子育てにも時間をかけられる）が整って欲しいと思います。
38	親がしっかり子育て（しつけや学習）すべきと思う。今の親は学校や周りにたよりすぎているところが多い。子どもとの時間をもっと持つべきだと思う。何でもしてもらう事があたりまえになっている。子ども手当も必要ない。高校無償化も必要なし。義務教育では無いので。どうしても高校にやりたいなら、親は死ぬ気で働く。
39	2度と経験できない子ども時代を習い事に費やす時間が多すぎると思っています。地域で過ごす時間、同年以外。子ども同士、自由に過ごす時間が子どもから奪われていることが子供の健全な発育を大いに妨げていると考えます。食について、学校・家庭・地域すべてが学び。いのち・こころ・からだを育む食を正すべきと考えます。
40	私は考えに考えた末、「今は子どもたちと十分に関わっておきたい。子育ては自分でやりたい」と強く思い、退職して家庭に”戻り”ました。よく周りから「子育て支援が十分だったら、仕事は辞めんやったろ？」と聞かれますが、私は子育て支援の有無に拘わらずこの選択をしました。子育て支援、今現在はいろいろ充実していると思います。それらに助けられる人も多いことでしょう。その人(お母さんやお父さん)がどんな子育てをしたいと考えるのか、ひいてはどんな生き方をしたいと考えるのか(大げさではなく)そのビジョンの確立の手助け、アドバイス、指南、相談等々…も大切なのではと思います。

【行政への要望・・・２８件】

	記述内容
1	子育ての環境は少しずつ改善しているように思いますが、まだまだ子育てと仕事の両立への支援が不足しているように思います。子どもが小学生になって困った事の一つに病児保育の対象年齢が就学前であったことです。もちろん子どもが病気の時に仕事を休めるように環境が整うことが一番良いとは思いますが、それが不可能な現状もあるので、病児保育の対象を広げてほしいです。
2	子どもの健診の時、保健師さんが子どもの成長について指摘される言葉がすごく気になります。親自身は何も気になっていなかった事が、その時指摘されると、さもうちの子はおかしいのでは？と思ってしまいます。たくさんの子どもを見ているから気づかれる事もあるかと思いますが、他の子と比べないで欲しい。どこの保健師さんでも感じる事です。
3	放課後児童保育の時間が短いため、仕事が大変。
4	地域の子育てに関することです。職場の託児所は狭く遊び場も限られているので広い保育園に移りたいが近辺に保育園が少なく困っている。実際他の市には保育園がかなり密集して３～４軒あったり全体的に保育園の数が多くどこも園児募集をされていたように思う。私の住む地域には、そんな保育園は２園だけで希望にあわなかったりで。遠くを選べば小学校に上がる時に友達と別れなければならない。人口が増えれば年代別推移をみて、小学校、保育園もそれに伴い増やさなければ育児をしながらの仕事、生活は両立できない。今のご時世、共働きをしなければ食べていけない。核家族、共働きの増加に伴い、放課後児童教室待機児童数も増加していると思う。
5	外で遊ぶ子どもの公園が少なすぎます。現在、住宅が増えているので近くで遊べる安全な環境づくりが必要かと思います。
6	医療費の助成を乳幼児だけでなくしてほしい。特に、慢性的に医療行為を要する子ども、薬代も高額で、国が助成する対象には微妙に該当せず、負担が大です。私の住んでいる所は、支援や優遇がどの市町より劣っていると思います。（役所の窓口、職員の方の対応も冷たい印象です）
7	少子化といいながら少子化の対応がなされていない(子育てしやすい産みやすい環境でない)。学童保育の充実を(時間延長を、最低 19:00 まで)。
8	ひとり親に対する医療費・教育費の免除などがもう少し緩和されればと思います。うちは何の補助もないので…。

9	もっと母親も働きやすい環境のための、子育て支援センターや一時保育をする保育園が増えましたが、親が遊びに行くなどの理由で預けている人が増えてきたように感じます。また、保育士が子育て支援事業の中で、親に「一時保育は買い物に行くなどの理由でも良いですよ。預けてください。」など言ったりしている。保育をこんなにサービス化して良いのかと思います。本当に困っていない親までこんなに手厚くサービスしなくても。子どもがかわいそうで仕方ありません。もっと子どものための保育を、行政の方は考えてほしい。親は子どもを産んで育てるということを真剣に考えてほしいです。
10	障害をもつ子どもを育てているが、遊ばせるところがなく（特に長期の休み、夏休みなど）とてもつらい。支援してくれる施設もあるが数が少なく希望が通らない。病院などで相談してもたらいまわしになり、満足のいく子育てができない。利用している施設は小学校入学前までだが、その後も利用したい。遠方に施設があるが、他の子どものことを考えると利用しにくいので、大人になるまで安心して利用できるところを作って欲しいです。
11	子どもの医療費助成をもう少し充実して欲しい。（小学校３年生くらいまでは病気しやすいため）保険証と同じように医療機関で証明書等を提示するだけで助成できるようにすると、小さい子どもを持つ親が役所で申請している間、子供が泣いたりしたり、騒いだりするのもなくなる。かつ、親にとっては毎月行かなくてよいので助かる。働いている親はなかなか平日に休みがとれず、申請に行けず困っている。
12	県外から来た事もあり、この地域に子育ての相談が出来る人がいません。学校や市町村などからの案内で相談出来る場等を転入時に紹介して頂けると有難いと思っています。
13	遊べる公園などが少なくなったと思います。大きな公園が出来ても車などで行かないといけなくて、結局は家の中で遊ぶことになります。
14	仕事と家事、子育てで時間に余裕がなく、イライラしがち。ついつい子どもにきつい言葉で叱ってしまったりする。私には実家の両親がいないので、預けられない。子どもの病気時、どうしても仕事に出る場合の不安がある。病児保育（久留米市の様な）の施設があればと思う。
15	育児に関してマニュアル、教科書（これが正しい）がないのが悩みです。自由というか。その子にあったやり方があるので、このアンケートが役にたつかどうか疑問です。時代の流れにあった方法が適していると思う。この意見も佐賀県の家庭の教育力の向上、支えていくための仕組みづくりに活かせれるか分かりませんけど。
16	一番の不安は４年生から児童クラブに行けなくなる事。一人っ子なので一人で留守番はさせたくない。現在はサポートと親にお願いしているが親は高齢なので。
17	ファミリーサポートを利用しているが児童クラブも利用出来れば助かる。急に利用してもファミリーサポーターが利用出来ない時困る。
18	おもいっきり走って遊ぶ事が出来る場所、安全な公園（外・内）がもう少しあれば良いなと思う。仕事しながらでも安心できる環境があっても良いと思う。
19	子育てには不安がいっぱいです。せめて医療費の心配をしなくて良い様に、小学校の医療費負担をなくして頂けるようご尽力願います。（耳鼻科通いをしようものなら連日なのでとても大変）
20	このアンケートの集計結果やそれに対する対応など、できればアンケートに協力した家庭に公開してほしい。このアンケートがどのようなことに実際に役立てられるのかを知りたい。
21	入学前まで国からの支援が充実しているが、生後から高校生まで一律にしてほしい。
22	両親が共働きの為、低学年の時は学童保育などがあっていいのですが、中・高学年でもそういう制度を設けて欲しい。その施設にいて、安心できるから。
23	各市町村単位で低学年から通えるようなおけいこ事を充実させてほしい。夏休み等長期間でなく平日授業が終わって、まっすぐ行けるような工作教室、習字、体育教室など
24	子どもには障害があるので、近所の人や先輩お母さんに子育ての相談をしてもこちらが惨めになるだけだと感じるので相談はしない。これからますます他の子との差が出てきて、近所の人などに変な子と思われて注意などされて子供がへこむのは見たくない。かと言って、まったくの他人に「うちの子は障害あるんです」とは絶対に言いたくない。相談はもっぱら保健センターの心理の先生にしています。でもこれからは学校のスクールカウンセラーの方にも相談できたらいいなと思っているところです。正直、近所の人などからのアドバイスでは傷つけられることがありそうで恐いです。現に、以前ありました。
25	子ども手当などは各世帯に支給ではなく、給食費を無料にするなどにあてる様な直接、子どもに関係のある様な事に使って欲しい。

26	学校終了後、児童館へ行って欲しいのですが、宿題等もせずに、思いっきり遊んで帰宅後には疲れて眠くなり、児童館の考え方と違っていて歩いて帰宅させています。児童館に要望を出しても聞くだけで、何のためにあるのか分かりません。相談機関は形だけのように感じます。
27	転勤のためあちこち住んできましたが、今住んでいる地域は人が温かくて相談しやすかったり人との交流はあります。子育ての場(教育や遊び場)が少ないように思います。そのへんを充実させないと子ども達が伸びていかないと思います。
28	少子化の問題があるのに、それに対しての国や町等の支援が少なすぎる。子育てにお金がかかりすぎているのに雇用問題や給料の削減等矛盾過ぎると思う。佐賀県の子育てに対する支援が充実してない。それでは県から出て行く者が多くても仕方ないと思う。

【学校への要望・・・１９件】

	記述内容
1	授業参観を見に行くと、一部の者が先生の話を聞かず好き勝手にしている子どもがいるので、悪影響を受けないか心配です。休みはできるだけ子どもの接する時間を設けています。
2	覚えや要領の悪い子なのですが、どんどん学校での学習面、しつけ面がおいていかれるような気がします。学校で１人１人に十分に目が向けられていないようで、もう少しそのあたりに力を入れてほしい。すぐれた子ばかりが目立って先に行き、劣っている子はとり残されています。
3	スポーツをする時間があまりなく、学校でもクラブがまだ始まらないので(１年生)クラブとかあればさせたいが、お金のことや送り迎えもあるし、家の近くに学校のスポーツをするクラブとかあればいいなと思ってます。スポーツの時間とかも学校では少ないので増やしてほしい。
4	入学してすぐに思ったことは、集団下校があるが登校は全くなかった。１か月でいいから上級生が連れていくとかあればいいのにと思った。
5	習い事を全くしていません。学校は、塾に通わせないでいい教育をお願いしたいです。
6	今はまだ１年生という事もあり全てが新しい学習生活の中で、少しずつ苦手な教科もみえはじめてきています。「きらい」にならず「楽しみながら」を親としても心がけているつもりですが、どんどん進んでいく授業の流れについてゆけるのか、いけてるのか、不安もあります。家でもその部分をふまえ学習に取り組めるよう、習慣づけていますが、わからないところをそのままに（聞けずに）ついていけなくなるのではと心配の毎日です。体調を悪くする事もあり学校を休ませる事もあり、学習の遅れが心配です。もちろん家での学習は当たり前なのですが、分らない事が聞ける雰囲気や、休んだ分の遅れをどの様に対応していただけているのかも不安や心配の１つになっております。毎日親が目を通していても進行度がわからないため教えてあげられる事もできない時もあります。先生と親との考え方の違いで子どもの頭の中がパニックになることも心配の一つで、なかなか教えるのにも考えてしまい、むずかしさを感じています。
7	昔と比べ学習内容がどんどん早くなり、家で親がかなり勉強をみないといけない感じがする。毎日、学校からの帰りも遅いしゆとりがない感じがする。家で十分に勉強をみる時間がない家庭は学校でどこまでフォローしてくれるのか疑問に思う。
8	私自身が育った県と佐賀県の教育が違いすぎてびっくりしました。子育てをするにはあまり良い環境だと思いません。土曜日も３時間でも授業をして欲しい。
9	学校の宿題の答え合わせを親がする事。
10	各家庭で育児の方針が違うとは思いますが、あまりに常識を外れている方が多いと思われる。このままだと公立学校の義務教育は崩壊するのではないかと不安である。
11	学校によってだけではなく、先生によってかなりの教育方法が違い、学力の差が激しいので、先が心配です。小学校低学年から塾は行かせたくないのです。後、教室に入れなくなった子を学校でうろうろさせてあるので、他の子にも影響があり、どうにか対策を考えて欲しいです。
12	子どもが通う小学校は、一人一人に目標達成まで見守り、指導して下さるので感謝しています。この環境が続くことを願っています。
13	塾にまで行かせて勉強させようという考えはないので、学校での授業をしっかり聞いて欲しいと思っています。
14	地域によってはされている所もあるかと思いますが、新小学一年生になって朝の登校時、集団登校があればと思いました。兄弟がいないところは一人で登校させているので・・・。最初の数カ月だけでも上級生がいれば安心するので。

15	本人の為にと思って口うるさく言っていると逆に反抗的な態度になっているのを見るとどういったらいいのかわからなくなったりします。学校では友人関係とかで悩むことが多いので先生にしっかり教育してもらいたいと思っています。
16	授業参観の時の子どもの集中力が欠けているように思えます。子どもをもっと引きつけるような授業をしてほしい。
17	子どもが伸び伸びと安全に遊べる環境が出来れば良いと思っています。また、学校教育が昔のように競争心を子ども達に持たせる様な教育をしてもらいたいです。
18	仕事と家事に追われる毎日。子どもの話を聞いてやったり本を一緒に読む時間と余裕がほしい。しかし、収入も少ないので時間給の仕事を休めない。義母は老人施設で、実父・母も高齢のため、子どもたちだけで留守をすることが多い。アパート内に恐い人がいるし、周辺の住民とも交流がないので自由に外で遊ばせられない。学校の登校班編成が、遠い子たちと組んであるのはどうして？前の家の子それぞれ別の班です。
19	子どものことを担任にどこまで相談していいものか。それにどこまで真剣に対応してくれるのか不安です。話した事で学校側から子どもに対してどのような見方をされるか不安。

【保護者としての悩み・・・８９件】

	記述内容
1	親として忍耐が必要な所がまだまだ未熟であり、子どもに感情的に接する事がある。後でよく考えるとこういった言い方もあったんじゃないかとか、子どもが悪い事をした事について、どうわかるように伝えればよいのかと悩むこともある。分かっているかな？と思う事がしばしばある。
2	子どもにいろいろな経験をさせてあげたいが、なかなか仕事の都合などでさせてあげられない。子どもたちのけんかなどがとても気になる事が多い。もう少し先生との意見交換のできる機会が必要だと思う。
3	７歳の長男ですがとてもマイペースでいつも心配になります。何をするにしても人より遅く、急いでする事をしません。親としては競争心を持ってもらいたいのですが、この子の個性と思うと悩みます。
4	末っ子でいつまでも赤ちゃん扱いしてしまったりする所もあり、本人も幼い面と上の子の影響でませている所もありで、対応が難しい時がある。上の子と生活のリズムが違うので、テレビの時間や夜の時間配分が難しい時がある。
5	転校して、まだまだ他の保護者の方と接する機会がほとんどないので、新しい学校のＰＴＡ活動についてなど、分らないことばかりです。
6	学校の宿題を家でやるとわからないと家で泣きます。子どもに勉強を教えるのは難しいです。自分が楽しく勉強した事がないので、本人に自分からやる気を出してもらいたい。
7	障害を持っている子どもを抱えているのでその子の将来像をつかめない。
8	どうしたら子ども達が色んな事に意欲的に行うようになるか（特に片付け､身の回りの事）言い方もあるだろうがなかなかやってくれないので困る。嫌々やっていたり意地になってしてくれなかったり。反抗期なのか私が言っても全然効果なしです。
9	今の子ども達の周りにはテレビ、パソコン、ゲーム、いろいろなおもちゃ、食べ物があふれています。そういう時代の中でそれらが害にならないように付き合っていく術は非常に難しい。外で遊ぶ子どもの姿は減り、両親は共働きで学童保育やお稽古事に通ったり、室内でゲームをして過ごしたり。親としては子どもと長時間一緒に過ごしたいのですが、働かざるを得ない状況です。模索しながら子育てをする毎日です。
10	小学生になり勉強についていけるか心配。
11	ついつい学校の準備・食事の時などに手伝ってしまいがちになるのですが、子どもの自立のために待つことができるようになりたいです。
12	食生活にばらつきがある(食べたり食べなかったり)。
13	10 月に入り学校へ行くのが不安になるようになり、私との別れ際に毎日泣いている日が続いてます。学校は楽しいようですのでそれだけが救いですが、これがいつまで続くのかとても不安になります。しかし、今回の事で先生には親身になって相談にのっていただき感謝しています。私以上に子どもの事を知ってあるので恥ずかしい様で子どもにも申し訳ない気持ちでいっぱいです。先生のアドバイス通りに私も愛情タンクを満タンにして、子どもが一日でも早く安心して学校に行くことができればいいなと思っています。長いつき合いになるかもしれませんが、先生よろしくお願いします。

14	仕事をしているのでゆっくり宿題など見てあげれない。できれば横に座って一緒にできたらいいけど児童クラブですませてきて帰って答えがあってるか確認する程度でいいのかなって時々思う。
15	自分の家のルールとお友達の家のルールが違う事を分かるように説明するのが大変になってきました。
16	夫が単身赴任で子供と会えるのが２カ月に１度ほどなので、家族でご飯等が食べれない。私も仕事をしているので、あまりかまってやれず子どもにさびしい思いをさせていると思います。
17	去年までフルで仕事してたので特に仕事との両立で悩みました。今はパートで行ってますがパートでも仕事に責任があるので子どもが病気になった時など困る時があります。
18	集中力がない。何をどう伸ばしていいかわからない(勉強・スポーツ。全部が中途半端(好きなことをさせても)。自分から言ってくるのを中心にさせてます。
19	仕事が忙しいからときちんと子育て、育児をしてこなかったため、子どもの気持ちがわからなくなっています。
20	市の中学校が夜間電灯が少なく不審者も出没するとの事で、他の中学校の受験も考えますが、塾代金等費用がかかるので悩みます。
21	子どもの対人関係についてどこまで見守り、どこから相談すべきか判断が難しい。
22	私が働いているので学童に預けています。毎日帰ってからは時間との戦いです。私が焦っても子どもはゆっくりマイペース。毎日、正直イライラしすぎてがみがみ言いすぎているような気がします。私がイライラしていると子どもにもよくないとはわかっているのですが、時間に余裕がないので全てにおいて悪循環だと感じています。
23	毎日学校と学童で疲れて帰って来て、それからの宿題をなかなかしないので、毎日毎日私の方がストレスです。仕事で疲れ、家では怒り疲れる日々です。どうすればスムーズに宿題をやるか分かりません。
24	仕事に追われて子どもとの時間が少なすぎる。もう少し余裕を持ちたいけど、金銭的なものもあり働かないといけない現実。たまにつらいです。
25	放課後、子ども達だけで外で遊ぶ場所や雰囲気がない。同じ年頃の子どもも近所にいない。
26	あまり子どもにやさしく接することができません。子どもには悪いなと思っています。調子に乗りやすいタイプの子なので、あまりいい顔ばかりしているといけないと思ってしまいます。
27	親が子どもとかかわって家庭教育をしたいと思っていますが、仕事で忙しくあまりかかかわりをもつ事ができず、子どもの教育にはよくないと思っています。
28	子どもが小学校へ行って、毎日が時間に追われる日々で、朝食を食べさせバタバタ登校したと思ったら、昼間は仕事をしているため、夕方帰ったら宿題、明日の用意を一緒に行い、夕食作りに洗濯など、夕食を食べお風呂に早く入って寝なさいとバタバタな毎日。もっと一緒に外で遊ぶ時間が欲しいと思うし、出来るだけ30分でも外で遊びたいと思います。
29	子どものしつけに関してはいつも悩んでいます。小学校入学を境にとても優しかった子が悪いことばかりするようになり、周りの友達に流されているのだととても心配です。流されないように家庭で指導をしなければと思いますが、今までの育児に問題があったのかなど、前向きになれず、育児の難しさが日々増しています。楽しく子育てができればと思いますが、なかなか思うように行かず、苦労しています。
30	仕事をもっているため、家に帰ってもあわただしく自分１人だけで過ごすことができずにたまにストレスに感じる。
31	うちでは子ども中心でない事が多く、夜寝かせられない事があり寝不足が心配になります。祖父などになかなか言いづらく伝わりません。子どもが少し太り気味で、食事の栄養も考えながら少しやせさせたいのですが。なかなか難しい。宿題もすらすらできる方ではないので、習い事をして帰りが遅く、急いでやらなくてはいけないとついつい怒ってしまいます。宿題を家では違う方法で考えさせたりしています。いろいろな考えで良いとは思うのですが、子どもが迷ったらとも思います。
32	仕事上、子供が帰ってくる時は家にいる事が多く、子離れ・親離れするのが働いているお母さんの子供達より遅いような気がします。
33	核家族で共働き、下に１才の子もいるのでなかなかかまってもやれません。平日の勉強がほとんど出来ません。宿題も「早く！早く！」といった感じでさせている状態です。今はまだ一年生だから、そこまで勉強について心配してませんが、来年、再来年になってくると学力の方も気になってくると思います。「くもん」などにも通わせた方が良いのか悩んでいます。
34	子ども一人にかかる教育費・養育費は本当、毎月大変です。

35	そろそろ働きたいと思っているが、小学生の子を家に残していいものだろうか？学童は３年生までしかなく、夏休みなどの長期の休みは不安だ。
36	母子家庭の為、平日とたまに土、日、祝日も仕事をしているので祖父母に預ける事が多く、ゆっくり遊んだり勉強を見てあげる事がなかなかできません。仕事から帰ってきて夕食を作り、お風呂に入れて・・・としているとあっという間に寝かせる時間になるので、もう少し子どもとの時間があれば・・と思っています。
37	3 人兄弟ですが、それぞれに性格が違い、考え方、とらえ方、行動等、全くと言っていいほどバラバラ。仕事をしながら、それぞれに合わせて子育てをするのは少しきついかな？祖母が助けてくれているので良いですが、周囲に助けてくれる人がいないと大変かな？
38	私自身の子育てで子どもが成長出来ているのか分からなくなる事がある。子どもが学校で迷惑をかけたりすると、私の子育ては間違っていると思い込んでしまう時がある。
39	仕事上、父親と接する時間があまりないので、そこが子ども達にさみしい思いをさせてしまっているなあと感じているので、私は仕事をせず、家庭にいるのですが。子ども達の習い事等の出費も子どもの人数が多いと頭が痛いです（「子ども手当」も収入額ではなく、子どもの人数も考えて欲しかったと思います）ちょっとつぶやきたかったので書きました。
40	仕事で帰りが遅く子どもを早く休ませる事が出来ない！その間、祖父、祖母に見て貰っているが高齢の為この先が心配。
41	小さい頃は母親にまかせっきりで、すごく大変な時期を叱ってばっかりで、感情のコントロールがうまく出来ず、落ち込んでいました。話がわかる小学生になったとたん、父親が勉強や子育てについて、それではダメだと参加してきました。父親は、子どもの相手が上手で、叱りません。怒る時は愛情で叱っているという感じです。毎日、私では子どもを育てられないのかと自分を責めてしまいます。今でも感情のコントロールが上手くいかず、褒めたり笑わせたりする事が苦手です。ヒステリックになるのは、いけない事ですが、なかなか治せません。カウンセリングを受けたいのですが、誰に相談すればいいのか分かりません。
42	子どもを叱る時に感情的になってしまい、口が悪くなるので子ども達に悪い影響だなと感じてます。
43	私たちの小学校の頃の勉強方法というか、問題の解き方が今と異なることがあるので教えづらい。
44	言う事を聞かない時もあり悩んでしまう。
45	私の子どもは３月生まれで、早く生まれた子どもさんと多々比べる事があります。（カタカナが書けないなど・・・）でも、その半面、３月生まれだから大丈夫と思う事があります。自分の子どもだから信じて優しい子に育てるよう、しっかり子育てを頑張ります。
46	会社から帰り、宿題を見て（音読、計算カード）
47	子どもへの声かけの仕方の難しさを感じています。一緒に遊ぶ時間を作る為に宿題ややるべき事をやるように声かけするのですが、なかなか動いてくれずついつい感情的に・・。
48	元々片付けが得意でないのと、下に二人いるのとでいつも散らかっています。見れるようになるのは家庭訪問の時だけで、こんな家庭が日常普通だと思って育つのは如何なものかと不安です。そろそろ学習机をとも思いますが、置くスペースを作れずにいます。
49	子どもと接するにあたって、自分の感情で対応が変わってしまう事に日々反省しています。家族を中心に相談は出来るものの、実際子どもに対応するのは私が主で、仕事、家事、子供の送迎（保育園、習い事 etc）など、時間に追われて気持ちに余裕がなく、イライラをぶつけてしまいます。もう少し、おおらかに子育てをしたいと思いつつもなかなか上手くいかない日々です。
50	母親の方が子どもと一緒にいる時間も多いので、学校の用意、食事の面と父親はあたりまえと思っているので手伝ってくれない。一日中、家の事、子どもの事で飛び回り、気持ちにゆとりが無い時は子どもをひどく怒る事がある。それで落ち込んでしまったりする。
51	時間に追われてゆっくり子どもと向き合う事が出来ない。言い聞かせたりゆっくり話したりする時間がないので、叱りっぱなしでいつも後から反省している。もっと大らかに子育てが出来ればと考えます。
52	子どもが病気等とした場合、預け先がなく何日も仕事を休んだりしなければならない。
53	あいさつをきちんとできるようになってほしいのですが、どういうふうに教えたらいいのか悩んでいます。
54	家庭学習を書店で購入した問題集などさせておりますが、やはり塾など通わせてみた方がいいのかと思うことがあります。それから、今は本人にまかせてやらせていますが、親が色々手助けをした方がいいのか、学校のお便りでは何でも見てやって下さいと言われます。どこまで手を出していいのかわからない時があります。

55	子育てと仕事の両立でいつも悩みます。子どもが毎日のように「ママ、私のこと好き?」と聞いてきます。毎日聞かれると逆にこちらが不安になります。「ママ大好き」ともいつも言ってはくれます。
56	義父・母と同居中だが、子育ての仕方が違いすぎて困っている。
57	もっと一緒に遊んだり、本を読んであげたりしたいと思うが、仕事で帰宅が遅く、充分ではないと感じています。
58	細かいことに目くじらを立ててしまうことがあり、後で反省しています。子どものどんなことでも受け入れられるような親になりたいです。
59	働きながら家事・育児をしていますが、夕方、買い物・食事の用意・後片付け、それと子どもの宿題・学校からの提出物などをしていると、ほとんど子どもとゆっくり話す時間はありません。理想と現実の差をひしひしと感じながら１日が過ぎていっています。また、生活チェックシートなど学校に提出する必要があるのか、別にそれを見たからといって学校側はなにも改善しないのであれば無駄だと思うのですが…。例えば９時までに寝たなどの項目があるが、どこの家庭も９時に子供を寝かせつけられるとは限りません。チェックには“×”と書くわけですが、いつも×をもらう子どもの気持ち、×をつける親の気持ちを考えると複雑です。
60	子育てをしながら、自分の気の短さ、心の狭さ、色々とかっとうしている気がします。もっと大きな心で、子どもたちをつつんであげれたら・・・と日々寝顔をみると反省します。子育てというよりも自分磨きをしているような気がします。
61	学校の教科書を見ても、聞き方を教えることができない。
62	家ではテレビやゲームばかりして、学習がなかなか出来てないです。児童クラブで宿題はしてきますが、予習・復習を全くしません。
63	平日は父親の帰りが遅く、毎日ほぼ母子で過ごす時間が多く、子どものしつけが時々わからなくなります。しつけのつもりでも、ただ感情的に怒るだけのような自分がいて、子育てって難しいです。
64	親同士の付き合いにとても気をつかいます。特に母親は仕事を持っている方と主婦の方、主婦でも実家で同居されている方とそうでない方など状況が様々で、それによって価値観が全く違います。こちらが普通と思っていてもそう受け取ってもらえているだろうかと常に不安です。
65	子どもに対する叱り方が悪いのか、どう叱ったら良いか。つい自分の感情に任せて叱ってしまう。強い口調でしか叱れない。自分に余裕がないのか？もっとおおらかな母親になりたいと思うが、性格だから仕方ないのでしょうか？
66	父親の育児に対する無関心さにいらだちを感じます。
67	夫婦共遠距離通勤、早めに出かけ、遅く帰宅する夫に頼れず、子ども達の送迎（児童クラブ、保育園）、家事、育児と一人でまかなう事が出来ず、子ども達にしわ寄せがきてしまうように感じる。家事をせずに子どもと接する時間を持ちたい。祖父母は高齢、遠方により頼れない。来年度まで遠方勤務が決定しているので、あと一年ほどこの生活が続くと思うと・・・。朝７時から夜７時まで保育園にいる娘もかわいそうです。
68	高学年生との関わりの中で教えてもらう事もたくさんあると思いますが、言葉づかいや金銭面でのやりとりが親の目のつかない所で気になる事もあります。学習面でもほとんどの方が習い事や塾に通われていますが、学校だけの学習時間だけではついていけないのではと不安に思います。
69	色んな事を同時にこなせる程器用ではないので仕事を辞めて子どもの生活をしっかり支えたいが、仕事を辞めて経済的にやっていける自信が無い為、だらだらと仕事をしています。フルタイムではなく、週３日くらいのパートなら家の事もじっくり出来そうなのに。学校は仕事している親にお構いなしに色んな事を要求します。保育園とのギャップが激しく、一時期ノイローゼになりそうでした。最近は慣れましたが・・。
70	フルタイムで働き、通勤時間も長いので児童クラブが 19:00 まで開所してある事はありがたい。ただ３年生までの利用しか出来ないので、その後が不安。特に長期休暇の場合。子どもを迎えて帰宅が 19:00 頃なので寝る時間が 21:00、22:00 を過ぎてしまうい、夜型になっていると思う。睡眠時間の確保が難しい。同時に接する時間も短いし、怒ってしまう事も多い。なかなか上手く回せないで毎日過ごしています。
71	子どもが悪い事をした時、その時々で状況が違うので、この場合、どうやって伝えたら良いのか？という対応に困る事がよくある。親が伝えたい事、子どもが理解する事は違っているので、怒り方にも苦労する。うちの家族の場合、父と母が同時に怒ってしまったり、父親がやたらと怒ってばかりという状況なので、子ども達自身も混乱しているのではないか？と頭を抱える。
72	仕事で帰りが遅いのでしっかりと勉強につきあってやれないし、あまり学校の話も聞けてないんじゃないかと不安に思ったりもします。
73	共働きの為、ゆっくり子どもと接する時間が無く、つい口うるさく言ってしまったりして日々反省しています。もっとゆっくり宿題をみてあげたり子どもとの時間が欲しいと感じています。
74	時々、子育てがしんどいなあと感じる時がある。

75	義父の子どもへの考え方が時代にあっていないのに、口を出すので辞めて欲しい。子どもは女の子ですが、近所の男の子から泣かされることが多い。男の子の親は子どもをあまり見ておらず、イライラする。庭に勝手に入ったり、ゴミを捨てたり、危ない事をする。結局、私が注意するが人の子まで見ていられない。うちの子を危ない遊びに巻き込まれたくないとも思う。
76	家が自営業で、土日休みというのが無く、子どもとなかなかゆっくり過ごす事が出来ないのが親として悲しいです。また、日頃から忙しく、ゆっくり話をする事が出来ないので、子どもに悪いと思っています。
77	子どもはとてもかわいく優しいのに、時々、自分が嫌になるくらい、叱ってしまったり、後で考えるとこんなに怒らなくても良かったと反省します。イライラが募り、時々怒っちゃいけないと思いつつもカーとなり、叩いたりしてしまいます。最近は大分怒らず、落ち着いて対応出来るようにはなりましたが。今ままで怒りすぎて叩きすぎて学力低下を起こしたり、内向的な子どもに育っていないか心配にもなります。自立心を伸ばす為にも見守る事が出来れば良いのですが、色々怒ってしまいます。時々疲れます。皆さん、ママ達はどう頑張ってあるのでしょうか。友達に聞くとみんな怒ったりすると言いますが。私が本気で怒る姿は他から見られたらひどい気がして。ひどい親だと思います。
78	児童クラブがあってとても助かっています。４年生からはどうしようという心配があります。
79	学校や友人宅などで、親の目のいかないところでもきちんとあいさつや礼儀作法などできているか心配です。
80	母子家庭で父親がいないので、そのために子ども達に不自由な思いや辛い思いをさせないようにと日々考えて悩む事もあります。悩んだときは母親や友人に話を聞いてもらったりしてなるべく一人で悩まないようにしています。
81	1 人での育児はすごく大変です。サポートも無いなら理解者もいない。だけど子どもも大切にしてる。虐待する人の気持ちが全くわからない。
82	初めての子育てでいちばんの問題は子どもの発育です。よその子は何でもできるのに自分の子だけ何もできないし、教えても「しいきらん」・「できん」と言われると何か不安になったりします。この場合、どうすればよいかとよく考えてしまうことがあります。
83	3 人子どもがいるが 3 番目の子どもにすごく手がかかり苦労している。とても頑固で悲しくなることが多い。子育てに疲れ、辛くなることが多い。
84	問 32 の中で、強いて不安を感じていることは学校生活でうまく友人と過ごせているかどうかです。今のところは、楽しんで通っていますが、これからの学年が上がるにつれて不安があります。
85	地域の行事に参加することが多々あるが、その時、子ども達も一緒に参加するが、高学年になると必ずといっていいほどＤＳなどのゲーム類を持ってくる子が多い。せっかく集っているのだから目と目を合わせ言葉を交わしながら遊んで欲しいが、そんな中でもゲームをしている子がほとんどで、何のための行事だかわからなくなっている気がする。まだ自分の子には買い与えていないが、ないと仲間外れになるから買ってと言われたら、それはそれで考えることでもあるので難しい。決して買わなくていいというわけでもなく、だからといってゲーム漬けにならないかと心配になったり…。
86	食事・お風呂の時間になると必ずっていっていいぐらいにだだこねて全然言うことときかず自分のいいようにして、怒られてから泣きながら行動します。これをどのようにしたらなおるのかなあと毎日頭を悩ませてます。
87	仕事と家庭の両立でどうしても祖父母と子どもの時間が長く、古い考え・学習の仕方を教え、子ども自身がパニック気味。学校と同じやり方は教科書にものせてないので困る(新しいカリキュラムと言われたが教科書には載ってなくて分かりづらい)。
88	一人っ子である為、過保護気味と思う事もあるが、逆に口うるさい位厳しくしているのではないだろうか？（本当はもっとノビノビと育てたいと思うのですが）と自問自答の自分自身に疲れる。もっと自分に余裕を持って育てたい！と思います。
89	言う事をなかなか聞いてくれない事、口ごたえなど（今、中学生の兄の事）

【子ども友人関係の悩み・・・９件】

	記述内容
1	宿題をしていると、友達が遊びにきて落ち着いて勉強できないどころか、通信教育をする時間すらない。
2	先日、子どもの友達が家に遊びに来た時に「お菓子が欲しいのでおやつを買ってきたい。お金を貸して下さい」と言われびっくりしました。その場でお金の貸し借りはできないと答えましたが、そう言うと今度は子どもの貯金箱から取ろうとしていました。その後、その子の親に言った方が良いのか悩みました。子ども達に伝えることは難しいなと思いました。
3	子どもの友人関係・トラブル等について、親としてどの程度まで介入するのか…と考えます。あまり大げさにするのもと思いますが、ほおっておいてエスカレートするのも怖い気がするし、子どもの方は真剣に悩んでいたりすると軽視するのもどうかと思って悩みます。

4	子どもの友達が悪い事をしていても注意してあげる事が出来ない。注意すると、逆に自分の子どもがその子にいじめられたり、悪口を言われたりする心配があるので。
5	子どもが児童クラブで特定の友人の事でいつも悩んでいるようです。アザが出来て帰ってくる事もあり、心配しています。
6	子どもの友達について、また、付き合い方について、親がどこまで関わるべきか？
7	子ども達だけで物々交換をしているみたいで、まだ一年生なので”返しておいで”と言っているんですけど、他の親御さん達の考え方が違うので難しいです。家の中で遊ぶんでなく、外で遊ぶ教育をして欲しい。
8	近所の子ども同士のつきあいなど、クラスも同じで、いじめではないとは思いますが、親子さんとの付き合い方が難しいと感じています。今までにないタイプの方で、子ども達は子ども達とは思ってはいますが・・・。泣いて帰ってきたり（置いて走って帰られたり・・・）少し不安に思っています。
9	子どもの友人が家に遊びに来ると物珍しさからか、家中を見て回られ、親の部屋やキッチンに行っては勝手に手を伸ばす。注意は一応するのですが、その子どもの親を知っていると知らないとではとても注意しにくい事があります。又、帰宅時間の設定も各家庭で違うと、これも子ども達に注意しにくい。次第にその子と自分の子どもとの関係に影響しないかと思う時もあります。

【講座、イベント関係への要望・・・５件】

	記述内容
1	フルタイムで仕事を始めたので以前より子どもと過ごす時間が減りました。子どもにしてあげたい事、一緒にしたい事、沢山あるのですが現実はなかなか思うように行かないです。子育ての本や情報に振り回され悩んだ時期もありましたが、私自身、子どもに学びながら母親という私を作っている毎日です。子どもがやりたい事、伸ばせる能力など、実際、経験や体験してみないと分らないので、もっと気軽に参加できるイベントや教室等が近くであればいいなと思います。
2	第１子が小学生で第３子が２歳。なかなか一緒にイベントや講習など行きたいけど、託児がないと大変です。
3	長期休み（夏休みなど）や休日、イベントや体験に多く参加させたいと思っています。そして、感じたり考えたりしてほしいです。
4	近所に児童館や遊ぶ施設がない、親子参加等の行事を増やしてほしい。（イベント・お祭り等）
5	親子参加の体験イベントなど参加してみたいと思うのですが、時間帯でどうしても下の子まで連れて行かなくてはいけなくてなかなか参加できません。下の子２人連れて行けば思うように参加できないので、上の子にもごめんねというしかありません。もう少し参加時間など考えていただけたらありがたいです(土曜の午前中など)。

【子育てに関する感想など・・・４１件】

	記述内容
1	仕事中心の生活で子どもとの時間があまりとれないことが気になります。しかし、兄弟で支え合ってくれているので、その点は安心しています。（大変ですが、３人産んでいてよかったと思います）
2	家族全員で過ごす時間は私にとってもとても大切なので、土日は友達と遊ぶことはさせず、家族の日にしています。小さい時からそうしているので、友達から誘われても自然に断っている様です。子ども達もそれが苦になっておらず、その気持ちが続く限り続けていけたらと思います。
3	双子を育てています。このアンケートを２枚書きました。双子を育てる上で地域の方、家族（実家の母や姑、妹）に助けられながらなんとか仕事と子育てを両立できています。双子を育てている人からどうやって両立できているのとよく聞かれます。私はできるだけ詳しくアドバイスしています。あくまでも私の経験でしか話していないので、すべてあなたの家にあてはまらないかもしれないけれど、何かのヒントになればと思い話します。子育てしていて得たものを次の世代の方に教えられる喜びを最近感じています。
4	子どもを児童クラブに預けています。その点で先生方には本当に感謝しています。安心して子育て仕事が両立できています。現在は１日６時間のパートです。そのおかげで両立できているのだと思っています。
5	親の一言で子どもは大きく変わると実感しています。子どもにかける一言一言が大事だなぁと思っています。
6	自分の子育ては自信を持って、責任を持って！

7	夫とよく話すことは、しつけについてです。やはり家庭での小さい頃からのあいさつや食事のマナー、電話の応対、他の家におじゃまする時の事など、親が日頃から話して教えていくべきだと思います。あとは、どんな友達とも仲良くできる子どもに成長してもらいたいと思ってます。
8	母子家庭で仕事をしている為、子どもとあまり一緒にいてあげられないことが時々かわいそうになりますが、私が一緒にいない分、周りの先生方や親せきなど、子ども達をかわいがってくれる方がいてくださるのでありがたい気持ちです。
9	近所に子どもが多く、放課後も遊び相手に困りません。親も自分の子どもだけを見るのではなく、子ども達を関わる大人がみんなで育てるという雰囲気の場所なので、ありがたいと思います。私も若いお母さんが困っていたらいつでも手をかしてあげたいと思います。お互い様でおかげさまです。
10	大変な面もありますが、楽しい幸せを感じます。
11	平日は学校から帰宅する時間が早くて 3:30、遅い時間で 4:30 なので、宿題や片付け等をしていると、ほとんど外で遊ぶ時間がないのがかわいそうに思う時があります。
12	宿題を帰宅後にする習慣づけをすると、外で遊ぶ時間がなく、視力や体力が低下してきたように感じます。
13	今までの子育てで、ＰＴＡ活動にほとんど参加したことが無かったので、今は小学生のＰＴＡ活動に意欲的に参加している。
14	毎日元気に楽しく過ごしてくれればいいと思います。学校に行くときも「行ってきまーす」と言って、帰ってきたときは「ただいまー」と元気に言ってくれます。毎日家族と一緒に過ごせる事はすごく幸せな事と思います。１年生の子どもは今からだんだん成長していきます。それを見守り、困った時は手をさしのべ、伸び伸びと育ってくれるように思っています。
15	早くからの基本的生活習慣を身に付けさせたいと思っています。しかし、しばりつけるのも子どもがストレスとなる為、「時間を見て動き、自由時間を作る」を目標にすれば楽しい一日が出来ているなと思ってます。
16	こうあるべきという理想はあるが、出来なくても落ち込まない。健康管理は色んな人から意見を聞きたい。心と体が元気ならばそれで良い。
17	子どもの教育はもちろんであるが、母親（父親）、人間としての常識のない親、祖父母が増えていると思う。先生たちの苦労を感じる。
18	子どものしつけ、基本的な生活習慣などは教育より大切だと思い、あいさつなどをきっちりできる様、社会に対応出来る子どもにしたいと思っています。
19	子どもが何となく日々楽しそうで毎日嫌がらず登校しているので、今はこのまま成長を見守りたいと思います。
20	今は昔に比べ、子どもと親だけが住んでいる家庭が多く、子育て中の母親の身体的精神的に負担というか、ストレスが多いような気がします。地域のサークルや支援センターを上手く利用して、息抜き出来ている人はごく一部なのではないかと時々思う事があります。私自身は良く利用して楽しんでいました。子どもと二人になると気が重くなる時もありましたので、上手に気分を換えられたら良いなあと今でも良く思います。
21	日々子どもに育てられているのを実感しています。子どもの為でなくては耐えられない事、考えない事がたくさんです。息抜きしながらぼちぼち一緒に育っていきたいです。
22	問 32 の不安や悩みと言えば「全てが不安だし、全てについて悩みながら」の子育てですが、毎日楽しく過ごしています。
23	私が少し神経質なのか、その感情が子どもに伝わる事が多々あります。もう少し自分が冷静になって子どもと接したいのですが、現実はそうはいきません。でも毎日の会話は欠かさず交わしています。子ども達もの問いかけには素直に答えてくれます。
24	一緒に居る時間を大切にしています。
25	学校の出来事は、自分から怒られた事、楽しかった事など、何でも話をしてくれてますから、かくし事もないまま生活してる感じなので、このまま何でも話し合えるような親子関係が続けばと思います。
26	勉強はあまりできる方ではないですが、学校生活は楽しいらしく、友達とも上手くつきあってる様です。まだ一年生だから、とりあえずは楽しんでいるようなので、このまま元気な明るい子に育ってほしいと思います。
27	習い事等は親がさせるのではなく、子ども自身がやりたい事をさせる様にしています。悪い事をした時はもちろん注意しますが、がんばったり良く出来た時は思いっきりほめる様にしています。帰宅後は何も言わなくても自主的に宿題してます。
28	自分達が子どもの時は親の考え方等、あまりばらつきはなかった様に感じましたが、今子育てする中で、親の考え方が多様になっている様に感じます。放任主義な家庭はとことん放任で、その家庭のお子さんと我が子が放課後遊ぶとなった時、とまどう事が少なからずあります。子どもは「つ」がつく年齢まではある程度親の手、目が大事と思いますが古いのでしょうか？
29	今のところでは別になにもありません。交通事故などにあうことのないようにと少し心配しています。

30	子どもと接していると日々成長が見られ面白く、色んな事もありますが自分も勉強させられ、何事にもポジティブに考える様にしています。我が家は結構笑顔が絶えません。
31	初めての小学校生活で、子どもより私の方が不安に思う事がありましたが、子どもは意外にたくましい事に気付きました。”見守る”ことって大切だなあと感じる毎日です。
32	日頃なんとか頑張ってやっています。楽しく自分なりに毎日過ごしています。
33	なるべくお手伝いをさせています。勉強はあまり、しなさいとは言わないようにしています。自分からするのを待ちたいと思います。宿題は必ずするように言っています。
34	お金と時間が無く、習い事をさせられない。色々な体験をさせてあげられていない。子どもの視野や力を伸ばしてあげれない。料理をしたり植物を育てたり掃除をしたり。小さな事しかしてあげられてないように感じています。将来の夢が見つかれば親として全力で応援してあげたいと思っています。
35	我が子は小さく生まれましたが病院のスタッフの皆さんのおかげで安心して育てることができました。ほとんど不安も感じずにおおらかに育てています。当初、子育てを楽しもうと心に決めて産んだ子だったので、一年生になった今でも欲しがれば抱っこもしていますよ。
36	子育ては、本当親育てだと思います。個性をみとめて育てていけたらと考えています。
37	子どもが産まれた時から”育児”は“育自”で、共に成長しなければならないと日々反省しています。家事・家業・育児に追われる日々で自分に余裕がないのが現実。ついつい忙しいと子どもにもきつく言ってしまったり、自己嫌悪です。母親自身のストレス発散は重要だと考えますが、その際、やはり”ママ友”は大事だなと痛感します。この様なアンケートを通じ、他のお母様方の考え方を私も知りたいなと思いました。育児にやり直しはききません！！これを忘れないで日々楽しくがんばろうと思っています。
38	私は仕事柄、人と接する事が多く、子育てをしているママを見ると、あっという間に子どもは自立して大きくなっていくので、今の子育てを楽しんで欲しいなと思います。私も４人の子育ては大変ですが楽しんでいます。また育児書など情報はたくさんありますが、一人一人個性があるので、あてはめず、伸び伸びと育てられたらなと思います。子育ては思い通りにはいかないものなので。
39	私の場合、家族（特に祖母）が子どもの塾やクラブ等の送迎をしてもらっているので大変助かっているが、核家族では時間の都合で子どもにクラブや習い事をさせたくても出来ない所があると思う。
40	私は特技は出産、趣味は育児と言えるほど子どもは大好きでたまりません。子育てとか教育とか思うより自然が良いです！子どもは癒される人間です。親の方が子どもから親育てされてます。育児を楽しんでください。あっという間に大きくなります。
41	今は育休中でゆっくり家にいてあげられますが、職場に戻るとそうもいきません。ただ、隣に祖父母がいてくれるので、とても助かっています。子どもたちを見るとやはり私たちの頃とはずいぶん変わってきていると思います。地域の子ども達という目で色んな子ども達にも声をかけて町中で環境作りが出来ると良いなと思います。

３　保護者アンケート集計データ

問１　あなたについて、お子さんからみた続柄でお答えください。

	父	母	祖父	祖母	無回答	計
全体(n=825)	**4.1%**	**95.2%**	**0.1%**	**0.5%**	**0.1%**	**100.0%**
佐城地区(n=230)	3.0%	96.5%	0.0%	0.4%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	5.7%	94.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	4.5%	94.2%	0.0%	0.6%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	1.5%	97.0%	0.7%	0.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	6.3%	92.9%	0.0%	0.9%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	2.9%	97.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	3.1%	96.1%	0.0%	0.8%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	4.6%	95.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	7.1%	92.9%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	5.7%	92.0%	0.0%	1.1%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	2.9%	97.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	2.0%	97.1%	1.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	0.0%	97.0%	0.0%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	4.6%	95.4%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	8.5%	89.4%	0.0%	2.1%	0.0%	100.0%

問２　あなたの年齢についてお答えください。

	20代	30代	40代	50代	60代以上	無回答	計
全体(n=825)	**8.0%**	**65.7%**	**25.0%**	**1.0%**	**0.2%**	**0.1%**	**100.0%**
佐城地区(n=230)	6.5%	64.8%	28.3%	0.4%	0.0%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	8.3%	66.1%	25.0%	0.0%	0.5%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	7.1%	69.2%	21.8%	1.9%	0.0%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	14.1%	63.0%	21.5%	1.5%	0.0%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	4.5%	65.2%	26.8%	1.8%	0.9%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	4.9%	68.9%	26.2%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	7.9%	61.4%	29.9%	0.8%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	7.4%	65.7%	26.9%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	9.5%	66.7%	22.6%	0.0%	1.2%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	4.5%	71.6%	21.6%	2.3%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	10.3%	66.2%	22.1%	1.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	12.7%	65.7%	20.6%	1.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	18.2%	54.5%	24.2%	3.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	6.2%	61.5%	29.2%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	2.1%	70.2%	23.4%	0.0%	2.1%	2.1%	100.0%

問３　世帯の家族構成

（家族形態）

	核家族	多世代	一人親	その他	計
全体(n=825)	**66.4%**	**21.8%**	**11.3%**	**0.5%**	**100.0%**
佐城地区(n=230)	78.3%	10.9%	10.4%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	73.4%	17.2%	9.4%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	54.5%	33.3%	11.5%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	60.0%	25.9%	13.3%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	54.5%	31.3%	13.4%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	81.6%	1.9%	15.5%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	75.6%	18.1%	6.3%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	81.5%	10.2%	8.3%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	63.1%	26.2%	10.7%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	63.6%	25.0%	10.2%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	42.6%	44.1%	13.2%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	71.6%	15.7%	11.8%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	24.2%	57.6%	18.2%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	64.6%	21.5%	13.8%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	40.4%	44.7%	12.8%	2.1%	100.0%

（家族人数）

	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人以上	無回答	計
全体(n=825)	1.9%	9.6%	38.2%	26.3%	12.8%	7.2%	3.6%	0.4%	100.0%
佐城地区(n=230)	2.2%	10.9%	45.2%	27.0%	9.1%	3.5%	1.7%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	1.6%	9.9%	40.1%	30.2%	9.4%	6.8%	2.1%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	1.9%	8.3%	32.1%	28.2%	17.3%	8.3%	3.2%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	1.5%	8.1%	42.2%	21.5%	14.1%	6.7%	5.2%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	2.7%	9.8%	24.1%	21.4%	18.8%	14.3%	8.9%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	1.0%	3.9%	20.4%	40.8%	28.2%	4.9%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	0.0%	0.8%	3.1%	48.8%	26.0%	12.6%	5.5%	3.1%	100.0%
Ｃ小学校	0.0%	0.0%	8.3%	48.1%	27.8%	7.4%	7.4%	0.9%	100.0%
Ｄ小学校	0.0%	3.6%	11.9%	29.8%	33.3%	11.9%	6.0%	3.6%	100.0%
Ｅ小学校	1.1%	1.1%	10.2%	34.1%	29.5%	18.2%	4.5%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	0.0%	2.9%	5.9%	29.4%	26.5%	16.2%	13.2%	5.9%	100.0%
Ｇ小学校	1.0%	1.0%	9.8%	51.0%	18.6%	12.7%	2.9%	2.9%	100.0%
Ｈ小学校	0.0%	3.0%	3.0%	15.2%	30.3%	18.2%	18.2%	12.1%	100.0%
Ｉ小学校	0.0%	4.6%	16.9%	30.8%	18.5%	18.5%	7.7%	3.1%	100.0%
Ｊ小学校	0.0%	0.0%	0.0%	14.9%	25.5%	19.1%	23.4%	17.0%	100.0%

（子どもの数）

	1人	2人	3人	4人以上	無回答	計
全体(n=825)	12.1%	48.4%	30.8%	8.4%	0.4%	100.0%
佐城地区(n=230)	10.4%	51.7%	31.3%	6.1%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	11.5%	50.5%	29.7%	8.3%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	13.5%	47.4%	32.1%	6.4%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	12.6%	51.9%	25.2%	9.6%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	14.3%	34.8%	36.6%	14.3%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	17.5%	47.6%	26.2%	7.8%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	4.7%	55.1%	35.4%	4.7%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	8.3%	54.6%	29.6%	7.4%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	15.5%	45.2%	29.8%	9.5%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	13.6%	45.5%	33.0%	6.8%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	13.2%	50.0%	30.9%	5.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	11.8%	55.9%	23.5%	7.8%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	15.2%	39.4%	30.3%	15.2%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	21.5%	44.6%	23.1%	10.8%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	4.3%	21.3%	55.3%	19.1%	0.0%	100.0%

問４　日に一度は、家族全員が揃って食事をとっている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**41.8%**	**35.4%**	**17.0%**	**5.5%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	39.1%	35.2%	19.2%	6.2%	0.4%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	42.2%	38.9%	14.4%	4.4%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	55.9%	31.2%	8.6%	3.2%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	40.0%	30.4%	22.2%	7.0%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	39.6%	37.5%	18.2%	4.2%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	44.2%	41.0%	11.5%	2.6%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	45.9%	37.0%	11.9%	5.2%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	41.1%	32.1%	17.9%	8.9%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	41.7%	29.1%	19.4%	9.7%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	38.6%	31.5%	24.4%	4.7%	0.8%	100.0%
Ｃ小学校	38.9%	34.3%	22.2%	4.6%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	40.5%	41.7%	13.1%	3.6%	1.2%	100.0%
Ｅ小学校	44.3%	43.2%	10.2%	2.3%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	44.1%	38.2%	13.2%	2.9%	1.5%	100.0%
Ｇ小学校	47.1%	36.3%	12.7%	3.9%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	42.4%	39.4%	9.1%	9.1%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	43.1%	27.7%	18.5%	10.8%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	38.3%	38.3%	17.0%	6.4%	0.0%	100.0%

問５　子どもは、毎日、朝食を食べている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**89.5%**	**9.5%**	**0.7%**	**0.0%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	90.1%	9.3%	0.5%	0.0%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	88.3%	9.4%	1.1%	0.0%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	87.1%	10.8%	1.1%	0.0%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	89.1%	10.0%	0.9%	0.0%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	85.4%	13.0%	1.0%	0.0%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	91.0%	7.7%	0.6%	0.0%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	91.9%	8.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	92.0%	6.3%	0.9%	0.0%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	90.3%	9.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	88.2%	10.2%	1.6%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	88.0%	10.2%	0.9%	0.0%	0.9%	100.0%
Ｄ小学校	82.1%	16.7%	1.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	90.9%	8.0%	1.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	91.2%	7.4%	0.0%	0.0%	1.5%	100.0%
Ｇ小学校	96.1%	3.9%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	78.8%	21.2%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	92.3%	6.2%	1.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	91.5%	6.4%	0.0%	0.0%	2.1%	100.0%

問６　学校がある日の朝は、親などが声をかけなくても子どもは自分で起きる。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**8.1%**	**24.6%**	**47.6%**	**19.5%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	8.0%	23.4%	48.9%	19.5%	0.2%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	8.3%	29.4%	44.4%	17.8%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	8.6%	21.5%	48.4%	21.5%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	8.7%	21.3%	52.6%	17.4%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	8.9%	21.4%	55.7%	14.1%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	6.4%	28.8%	43.6%	20.5%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	7.4%	29.6%	34.8%	28.1%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	8.9%	25.0%	44.6%	21.4%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	10.7%	24.3%	51.5%	13.6%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	7.1%	18.9%	53.5%	20.5%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	6.5%	23.1%	55.6%	14.8%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	11.9%	19.0%	56.0%	13.1%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	8.0%	29.5%	39.8%	21.6%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	4.4%	27.9%	48.5%	19.1%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	8.8%	21.6%	36.3%	33.3%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	3.0%	54.5%	30.3%	12.1%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	10.8%	24.6%	43.1%	21.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	6.4%	25.5%	46.8%	21.3%	0.0%	100.0%

問７　平日、子どもは 21 時頃には就寝している。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**40.8%**	**38.8%**	**16.2%**	**4.1%**	**0.0%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	41.6%	38.7%	16.1%	3.6%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	44.4%	33.9%	17.8%	3.9%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	30.1%	49.5%	14.0%	6.5%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	41.7%	34.8%	18.3%	5.2%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	39.6%	38.5%	18.2%	3.6%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	46.8%	39.1%	12.2%	1.9%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	30.4%	40.7%	21.5%	7.4%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	45.5%	44.6%	8.0%	1.8%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	35.9%	35.9%	22.3%	5.8%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	46.5%	33.9%	15.0%	4.7%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	44.4%	34.3%	17.6%	3.7%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	33.3%	44.0%	19.0%	3.6%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	45.5%	40.9%	11.4%	2.3%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	48.5%	36.8%	13.2%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	34.3%	37.3%	19.6%	8.8%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	18.2%	51.5%	27.3%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	36.9%	49.2%	10.8%	3.1%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	57.4%	38.3%	4.3%	0.0%	0.0%	100.0%

問８　子どもを連れて、家族で夜 22 時以降まで外出をすることが、週に１回以上ある。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**0.4%**	**1.6%**	**19.2%**	**78.5%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	0.2%	1.3%	18.1%	80.5%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	1.1%	1.1%	18.9%	77.8%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	0.0%	4.3%	25.8%	68.8%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	0.9%	1.7%	19.6%	77.8%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	0.0%	1.0%	18.8%	79.2%	1.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	0.0%	1.9%	13.5%	84.6%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	0.7%	1.5%	27.4%	70.4%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	0.0%	1.8%	17.0%	80.4%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	0.0%	2.9%	17.5%	79.6%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	1.6%	0.8%	21.3%	76.4%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	0.0%	0.9%	16.7%	80.6%	1.9%	100.0%
Ｄ小学校	0.0%	1.2%	21.4%	77.4%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	0.0%	3.4%	10.2%	86.4%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	0.0%	0.0%	17.6%	82.4%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	1.0%	2.0%	24.5%	72.5%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	0.0%	0.0%	36.4%	63.6%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	0.0%	1.5%	16.9%	81.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	0.0%	2.1%	17.0%	78.7%	2.1%	100.0%

問９　休日などに家族で遊んだり、出かけたりすることがある。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**38.2%**	**53.0%**	**8.4%**	**0.4%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	39.8%	51.6%	8.4%	0.2%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	33.3%	57.2%	7.8%	1.1%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	36.6%	53.8%	9.7%	0.0%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	37.0%	53.9%	8.7%	0.4%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	44.3%	50.5%	5.2%	0.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	34.6%	56.4%	9.0%	0.0%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	36.3%	51.9%	11.1%	0.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	37.5%	51.8%	8.9%	0.9%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	34.0%	54.4%	10.7%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	39.4%	53.5%	7.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	47.2%	49.1%	3.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	40.5%	52.4%	7.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	42.0%	52.3%	5.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	25.0%	61.8%	13.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	42.2%	49.0%	8.8%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	18.2%	60.6%	18.2%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	40.0%	52.3%	7.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	34.0%	51.1%	10.6%	2.1%	2.1%	100.0%

問 10　子どもは、自分の道具や服など、自分で片付けている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**11.5%**	**58.8%**	**28.0%**	**1.3%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	11.1%	62.4%	25.2%	1.1%	0.2%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	11.7%	55.0%	30.6%	1.7%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	12.9%	45.2%	39.8%	2.2%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	12.6%	58.7%	26.5%	1.7%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	11.5%	61.5%	26.6%	0.5%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	10.9%	56.4%	30.8%	1.9%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	9.6%	63.0%	24.4%	2.2%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	12.5%	52.7%	33.9%	0.0%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	12.6%	59.2%	25.2%	2.9%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	12.6%	58.3%	27.6%	0.8%	0.8%	100.0%
Ｃ小学校	13.0%	63.9%	22.2%	0.9%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	9.5%	58.3%	32.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	12.5%	60.2%	26.1%	1.1%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	8.8%	51.5%	36.8%	2.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	11.8%	63.7%	20.6%	2.9%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	3.0%	60.6%	36.4%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	16.9%	56.9%	26.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	6.4%	46.8%	44.7%	0.0%	2.1%	100.0%

問 11　平日に、子どもがテレビを見る時間やゲームをする時間などは親子で話し合って決めている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	17.5%	46.2%	30.9%	5.5%	0.0%	100.0%
核家族家庭(n=548)	18.2%	47.1%	28.5%	6.2%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	15.0%	43.9%	37.2%	3.9%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	17.2%	46.2%	32.3%	4.3%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	18.7%	45.2%	30.4%	5.7%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	18.8%	43.2%	32.8%	5.2%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	18.6%	46.2%	29.5%	5.8%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	13.3%	40.7%	39.3%	6.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	16.1%	59.8%	20.5%	3.6%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	22.3%	45.6%	25.2%	6.8%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	15.7%	44.9%	34.6%	4.7%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	20.4%	40.7%	33.3%	5.6%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	16.7%	46.4%	32.1%	4.8%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	20.5%	47.7%	25.0%	6.8%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	16.2%	44.1%	35.3%	4.4%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	15.7%	40.2%	36.3%	7.8%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	6.1%	42.4%	48.5%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	20.0%	64.6%	12.3%	3.1%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	10.6%	53.2%	31.9%	4.3%	0.0%	100.0%

問 12　子どもには、宿題や家庭学習をするように声をかけている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**59.2%**	**36.2%**	**3.8%**	**0.5%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	59.3%	35.9%	3.8%	0.4%	0.5%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	57.2%	38.9%	2.8%	1.1%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	61.3%	33.3%	5.4%	0.0%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	61.3%	34.8%	3.0%	0.4%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	55.2%	40.1%	4.2%	0.0%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	64.1%	32.7%	2.6%	0.6%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	57.8%	37.0%	4.4%	0.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	56.3%	36.6%	5.4%	0.9%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	66.0%	29.1%	4.9%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	57.5%	39.4%	1.6%	0.8%	0.8%	100.0%
Ｃ小学校	52.8%	41.7%	4.6%	0.0%	0.9%	100.0%
Ｄ小学校	58.3%	38.1%	3.6%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	65.9%	31.8%	1.1%	1.1%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	61.8%	33.8%	4.4%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	55.9%	39.2%	3.9%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	63.6%	30.3%	6.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	52.3%	36.9%	7.7%	1.5%	1.5%	100.0%
Ｊ小学校	61.7%	36.2%	2.1%	0.0%	0.0%	100.0%

問 13　子どもの宿題の答え合わせをしたり、本読みにつきあったりする。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**55.9%**	**39.3%**	**4.6%**	**0.2%**	**0.0%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	57.7%	37.4%	4.7%	0.2%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	56.1%	40.0%	3.9%	0.0%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	44.1%	49.5%	5.4%	1.1%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	57.0%	38.7%	3.9%	0.4%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	57.3%	36.5%	6.3%	0.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	54.5%	42.3%	3.2%	0.0%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	57.8%	36.3%	5.2%	0.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	50.9%	44.6%	4.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	51.5%	42.7%	4.9%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	61.4%	35.4%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	58.3%	35.2%	6.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	56.0%	38.1%	6.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	58.0%	37.5%	4.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	50.0%	48.5%	1.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	59.8%	33.3%	5.9%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	51.5%	45.5%	3.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	50.8%	46.2%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	51.1%	42.6%	6.4%	0.0%	0.0%	100.0%

問 14　子どもの翌日の時間割や持っていく物については、親などが毎日、確認するようにしている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**41.0%**	**41.2%**	**15.6%**	**1.9%**	**0.2%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	40.7%	42.2%	1.5%	15.7%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	42.2%	41.7%	1.1%	14.4%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	37.6%	36.6%	6.5%	18.3%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	39.6%	43.5%	14.8%	1.7%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	47.4%	38.0%	13.5%	1.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	41.0%	40.4%	17.3%	1.3%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	38.5%	41.5%	17.0%	3.0%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	35.7%	42.9%	17.0%	3.6%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	37.9%	44.7%	14.6%	1.9%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	40.9%	42.5%	15.0%	1.6%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	38.0%	42.6%	18.5%	0.9%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	59.5%	32.1%	7.1%	1.2%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	42.0%	34.1%	22.7%	1.1%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	39.7%	48.5%	10.3%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	38.2%	40.2%	17.6%	3.9%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	39.4%	45.5%	15.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	23.1%	50.8%	20.0%	6.2%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	53.2%	31.9%	12.8%	0.0%	2.1%	100.0%

問 15　子どもが「欲しい」というものは、できるだけ買ってあげている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**0.7%**	**22.5%**	**69.5%**	**6.5%**	**0.7%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	0.5%	23.2%	69.2%	7.1%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	0.6%	21.1%	71.7%	3.9%	2.8%	100.0%
一人親家庭(n=93)	1.1%	21.5%	68.8%	7.5%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	0.9%	27.8%	61.7%	9.6%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	0.5%	23.4%	67.7%	7.8%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	1.3%	17.9%	76.9%	2.6%	1.3%	100.0%
東松地区(n=135)	0.0%	21.5%	73.3%	3.7%	1.5%	100.0%
藤津地区(n=112)	0.9%	17.9%	73.2%	7.1%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	0.0%	28.2%	63.1%	8.7%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	1.6%	27.6%	60.6%	10.2%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	0.9%	22.2%	70.4%	6.5%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	0.0%	25.0%	64.3%	9.5%	1.2%	100.0%
Ｅ小学校	2.3%	17.0%	76.1%	2.3%	2.3%	100.0%
Ｆ小学校	0.0%	19.1%	77.9%	2.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	0.0%	23.5%	71.6%	4.9%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	0.0%	15.2%	78.8%	0.0%	6.1%	100.0%
Ｉ小学校	0.0%	13.8%	75.4%	10.8%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	2.1%	23.4%	70.2%	2.1%	2.1%	100.0%

問 16　毎日、子どもの学校での出来事について話を聞いている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**36.7%**	**55.4%**	**7.6%**	**0.1%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	36.5%	55.3%	8.0%	0.2%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	40.0%	51.7%	7.8%	0.0%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	31.2%	63.4%	5.4%	0.0%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	34.3%	57.8%	7.8%	0.0%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	34.9%	55.2%	9.9%	0.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	44.9%	48.7%	6.4%	0.0%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	33.3%	61.5%	5.2%	0.0%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	37.5%	52.7%	8.0%	0.9%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	36.9%	51.5%	11.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	32.3%	63.0%	4.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	30.6%	59.3%	10.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	40.5%	50.0%	9.5%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	52.3%	45.5%	2.3%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	35.3%	52.9%	11.8%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	36.3%	58.8%	4.9%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	24.2%	69.7%	6.1%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	40.0%	55.4%	3.1%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	34.0%	48.9%	14.9%	0.0%	2.1%	100.0%

問 17　社会の出来事などについて、子どもに話をしている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**10.5%**	**52.2%**	**34.9%**	**1.8%**	**0.5%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	10.0%	52.4%	35.8%	1.5%	0.4%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	11.7%	52.8%	32.8%	2.2%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	10.8%	49.5%	35.5%	3.2%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	10.0%	51.7%	34.3%	2.2%	1.7%	100.0%
三神地区(n=192)	9.4%	54.2%	34.9%	1.6%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	11.5%	53.8%	31.4%	3.2%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	10.4%	51.9%	37.0%	0.7%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	12.5%	48.2%	38.4%	0.9%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	12.6%	51.5%	32.0%	2.9%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	7.9%	52.0%	36.2%	1.6%	2.4%	100.0%
Ｃ小学校	13.9%	49.1%	37.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	3.6%	60.7%	32.1%	3.6%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	13.6%	60.2%	25.0%	1.1%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	8.8%	45.6%	39.7%	5.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	9.8%	53.9%	36.3%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	12.1%	45.5%	39.4%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	13.8%	49.2%	35.4%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	10.6%	46.8%	42.6%	0.0%	0.0%	100.0%

問 18　子どもが学校や放課後に一緒に遊ぶ友人について、５人以上名前を挙げることができる。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**34.2%**	**38.3%**	**21.1%**	**5.5%**	**1.0%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	34.3%	39.2%	19.2%	5.8%	1.5%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	37.2%	33.9%	25.6%	3.3%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	28.0%	43.0%	22.6%	6.5%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	32.2%	40.0%	22.2%	5.2%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	32.3%	40.6%	19.8%	6.8%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	39.1%	37.8%	19.2%	3.2%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	28.9%	39.3%	22.2%	6.7%	3.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	41.1%	30.4%	22.3%	5.4%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	25.2%	36.9%	28.2%	8.7%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	37.8%	42.5%	17.3%	2.4%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	32.4%	40.7%	19.4%	7.4%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	32.1%	40.5%	20.2%	6.0%	1.2%	100.0%
Ｅ小学校	37.5%	38.6%	20.5%	2.3%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	41.2%	36.8%	17.6%	4.4%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	28.4%	38.2%	21.6%	7.8%	3.9%	100.0%
Ｈ小学校	30.3%	42.4%	24.2%	3.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	35.4%	36.9%	20.0%	7.7%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	48.9%	21.3%	25.5%	2.1%	2.1%	100.0%

問 19　現在、子どもを学習塾（通信教育を含む）に通わせている。

	はい	いいえ	無回答	計
全体(n=825)	**28.8%**	**70.7%**	**0.5%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	29.7%	69.9%	0.4%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	28.9%	70.6%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	24.7%	74.2%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	28.3%	71.7%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	29.7%	69.3%	1.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	35.3%	64.1%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	21.5%	77.8%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	28.6%	71.4%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	29.1%	70.9%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	27.6%	72.4%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	34.3%	65.7%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	23.8%	73.8%	2.4%	100.0%
Ｅ小学校	31.8%	68.2%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	39.7%	58.8%	1.5%	100.0%
Ｇ小学校	25.5%	73.5%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	9.1%	90.9%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	35.4%	64.6%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	19.1%	80.9%	0.0%	100.0%

問 20　現在、子どもを習い事やスポーツクラブに通わせている。

	はい	いいえ	無回答	計
全体(n=825)	60.8%	38.5%	0.6%	100.0%
核家族家庭(n=548)	62.8%	36.7%	0.5%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	64.4%	35.6%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	43.0%	54.8%	2.2%	100.0%
佐城地区(n=230)	63.0%	36.1%	0.9%	100.0%
三神地区(n=192)	60.9%	38.5%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	60.9%	38.5%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	54.8%	44.4%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	63.4%	36.6%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	56.3%	41.7%	1.9%	100.0%
Ｂ小学校	68.5%	31.5%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	58.3%	41.7%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	64.3%	34.5%	1.2%	100.0%
Ｅ小学校	58.0%	40.9%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	64.7%	35.3%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	57.8%	42.2%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	45.5%	51.5%	3.0%	100.0%
Ｉ小学校	64.6%	35.4%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	61.7%	38.3%	0.0%	100.0%

問 21　あなたが、平日（一日）に子どもと一緒に過ごす時間は、どの位ありますか。
（もっともあてはまるもの一つに○をつけてください）

	30 分未満	30～60 分未満	1～2 時間未満	2～4 時間未満	4 時間以上	無回答	計
全体(n=825)	**0.4%**	**2.4%**	**6.7%**	**26.4%**	**63.2%**	**1.0%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	0.4%	2.2%	5.7%	26.8%	64.4%	0.5%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	0.0%	3.3%	9.4%	22.2%	63.9%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	1.1%	2.2%	7.5%	32.3%	54.8%	2.2%	100.0%
佐城地区(n=230)	0.9%	1.3%	6.5%	30.0%	61.3%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	0.5%	3.6%	5.7%	19.3%	70.8%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	0.0%	3.2%	9.0%	26.3%	59.0%	2.6%	100.0%
東松地区(n=135)	0.0%	0.7%	7.4%	28.1%	63.0%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	0.0%	3.6%	4.5%	29.5%	59.8%	2.7%	100.0%
Ａ小学校	1.9%	1.0%	6.8%	33.0%	57.3%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	0.0%	1.6%	6.3%	27.6%	64.6%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	0.0%	4.6%	5.6%	19.4%	70.4%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	1.2%	2.4%	6.0%	19.0%	71.4%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	0.0%	4.5%	5.7%	22.7%	62.5%	4.5%	100.0%
Ｆ小学校	0.0%	1.5%	13.2%	30.9%	54.4%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	0.0%	1.0%	5.9%	25.5%	66.7%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	0.0%	0.0%	12.1%	36.4%	51.5%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	0.0%	1.5%	3.1%	33.8%	61.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	0.0%	6.4%	6.4%	23.4%	57.4%	6.4%	100.0%

問 22　市町報や回覧板、新聞における地域情報などは、目を通している。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**36.4%**	**50.1%**	**12.4%**	**1.1%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	37.4%	53.1%	9.1%	0.4%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	33.9%	50.0%	14.4%	1.1%	0.6%	100.0%
一人親家庭(n=93)	32.3%	34.4%	28.0%	5.4%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	40.9%	49.1%	9.1%	0.9%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	35.9%	51.6%	11.5%	1.0%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	32.7%	57.7%	9.6%	0.0%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	35.6%	45.9%	16.3%	1.5%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	33.9%	43.8%	19.6%	2.7%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	38.8%	49.5%	9.7%	1.9%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	42.5%	48.8%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	30.6%	53.7%	14.8%	0.9%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	42.9%	48.8%	7.1%	1.2%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	38.6%	54.5%	6.8%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	25.0%	61.8%	13.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	38.2%	47.1%	13.7%	1.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	27.3%	42.4%	24.2%	3.0%	3.0%	100.0%
Ｉ小学校	30.8%	47.7%	18.5%	3.1%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	38.3%	38.3%	21.3%	2.1%	0.0%	100.0%

問 23　子育てに関する地域(家族や友人以外)からの支援は、必要である。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**36.6%**	**41.2%**	**18.8%**	**2.9%**	**0.5%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	36.3%	40.7%	19.5%	3.3%	0.2%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	38.3%	39.4%	18.9%	2.2%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	33.3%	49.5%	14.0%	2.2%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	37.8%	37.4%	21.7%	3.0%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	26.6%	51.6%	19.3%	2.1%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	45.5%	37.8%	14.1%	1.9%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	39.3%	35.6%	20.7%	3.7%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	35.7%	42.9%	16.1%	4.5%	0.9%	100.0%
Ａ小学校	32.0%	43.7%	21.4%	2.9%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	42.5%	32.3%	22.0%	3.1%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	27.8%	50.9%	18.5%	1.9%	0.9%	100.0%
Ｄ小学校	25.0%	52.4%	20.2%	2.4%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	39.8%	42.0%	14.8%	3.4%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	52.9%	32.4%	13.2%	0.0%	1.5%	100.0%
Ｇ小学校	37.3%	34.3%	22.5%	4.9%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	45.5%	39.4%	15.2%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	36.9%	41.5%	15.4%	6.2%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	34.0%	44.7%	17.0%	2.1%	2.1%	100.0%

問 24　子どもの学校の友人の保護者と会った際は、あいさつや会話をかわしている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**54.1%**	**41.2%**	**4.1%**	**0.2%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	54.2%	41.1%	4.0%	0.4%	0.4%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	58.3%	39.4%	2.2%	0.0%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	44.1%	46.2%	8.6%	0.0%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	46.5%	49.6%	3.5%	0.0%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	55.7%	40.1%	3.1%	0.5%	0.5%	100.0%
杵西地区(n=156)	60.3%	32.1%	6.4%	0.6%	0.6%	100.0%
東松地区(n=135)	52.6%	42.2%	5.2%	0.0%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	59.8%	37.5%	2.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	46.6%	51.5%	1.9%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	46.5%	48.0%	4.7%	0.0%	0.8%	100.0%
Ｃ小学校	52.8%	43.5%	3.7%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	59.5%	35.7%	2.4%	1.2%	1.2%	100.0%
Ｅ小学校	60.2%	29.5%	8.0%	1.1%	1.1%	100.0%
Ｆ小学校	60.3%	35.3%	4.4%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	52.0%	41.2%	6.9%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	54.5%	45.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	58.5%	36.9%	4.6%	0.0%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	61.7%	38.3%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

問 25　同じ学校に通う子どもの保護者の中に、気兼ねなく、子育てや学校生活について相談できる人がいる。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**45.2%**	**33.2%**	**16.6%**	**5.0%**	**0.0%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	46.0%	33.8%	15.9%	4.4%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	49.4%	35.0%	11.7%	3.9%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	33.3%	25.8%	30.1%	10.8%	0.0%	100.0%
佐城地区(n=230)	43.0%	32.6%	17.4%	7.0%	0.0%	100.0%
三神地区(n=192)	42.7%	37.0%	15.6%	4.7%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	44.9%	32.7%	17.9%	4.5%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	44.4%	33.3%	17.0%	5.2%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	55.4%	28.6%	14.3%	1.8%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	35.9%	36.9%	19.4%	7.8%	0.0%	100.0%
Ｂ小学校	48.8%	29.1%	15.7%	6.3%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	42.6%	36.1%	15.7%	5.6%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	42.9%	38.1%	15.5%	3.6%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	43.2%	34.1%	15.9%	6.8%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	47.1%	30.9%	20.6%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	43.1%	34.3%	17.6%	4.9%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	48.5%	30.3%	15.2%	6.1%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	53.8%	29.2%	15.4%	1.5%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	57.4%	27.7%	12.8%	2.1%	0.0%	100.0%

問 26　小学校入学以後も、幼稚園・保育所やサロン・サークルで出会った友人と今も連絡・交流を続けている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**38.8%**	**30.9%**	**21.9%**	**8.2%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	39.1%	31.8%	22.3%	6.9%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	40.0%	31.1%	20.0%	8.9%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	34.4%	25.8%	23.7%	15.1%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	34.8%	37.4%	16.1%	11.3%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	38.0%	29.2%	28.1%	4.7%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	44.2%	25.0%	24.4%	6.4%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	35.6%	27.4%	26.7%	10.4%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	44.6%	33.0%	14.3%	8.0%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	34.0%	42.7%	10.7%	11.7%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	35.4%	33.1%	20.5%	11.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	40.7%	28.7%	25.9%	4.6%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	34.5%	29.8%	31.0%	4.8%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	37.5%	30.7%	25.0%	6.8%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	52.9%	17.6%	23.5%	5.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	36.3%	29.4%	23.5%	10.8%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	33.3%	21.2%	36.4%	9.1%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	40.0%	40.0%	12.3%	7.7%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	51.1%	23.4%	17.0%	8.5%	0.0%	100.0%

問 27　子どもを預かったり、子育ての相談に乗ることがある。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**13.0%**	**33.9%**	**38.2%**	**14.8%**	**0.1%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	13.1%	36.1%	35.8%	15.0%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	13.9%	28.9%	44.4%	12.8%	0.0%	100.0%
一人親家庭(n=93)	10.8%	30.1%	39.8%	18.3%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	12.2%	34.3%	37.0%	16.1%	0.4%	100.0%
三神地区(n=192)	16.7%	33.9%	39.1%	10.4%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	12.8%	36.5%	31.4%	19.2%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	8.1%	33.3%	40.0%	18.5%	0.0%	100.0%
藤津地区(n=112)	14.3%	30.4%	46.4%	8.9%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	7.8%	33.0%	40.8%	17.5%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	15.7%	35.4%	33.9%	15.0%	0.0%	100.0%
Ｃ小学校	18.5%	31.5%	39.8%	10.2%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	14.3%	36.9%	38.1%	10.7%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	9.1%	38.6%	28.4%	23.9%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	17.6%	33.8%	35.3%	13.2%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	5.9%	37.3%	38.2%	18.6%	0.0%	100.0%
Ｈ小学校	15.2%	21.2%	45.5%	18.2%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	10.8%	29.2%	52.3%	7.7%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	19.1%	31.9%	38.3%	10.6%	0.0%	100.0%

問 28　自らの子育ての経験を活かした活動（子育てサークル、ボランティアなど）を将来してみたい。または現在、行っている。

	とても当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	無回答	計
全体(n=825)	**6.9%**	**16.6%**	**44.4%**	**31.8%**	**0.4%**	**100.0%**
核家族家庭(n=548)	7.7%	17.7%	44.9%	29.7%	0.0%	100.0%
多世代同居家庭(n=180)	5.6%	16.7%	42.8%	33.9%	1.1%	100.0%
一人親家庭(n=93)	4.3%	10.8%	43.0%	40.9%	1.1%	100.0%
佐城地区(n=230)	3.9%	16.5%	46.5%	32.2%	0.9%	100.0%
三神地区(n=192)	7.8%	15.1%	45.8%	31.3%	0.0%	100.0%
杵西地区(n=156)	9.6%	17.9%	44.9%	27.6%	0.0%	100.0%
東松地区(n=135)	5.9%	14.8%	37.8%	40.7%	0.7%	100.0%
藤津地区(n=112)	8.9%	19.6%	44.6%	26.8%	0.0%	100.0%
Ａ小学校	1.0%	17.5%	39.8%	40.8%	1.0%	100.0%
Ｂ小学校	6.3%	15.7%	52.0%	25.2%	0.8%	100.0%
Ｃ小学校	6.5%	13.0%	47.2%	33.3%	0.0%	100.0%
Ｄ小学校	9.5%	17.9%	44.0%	28.6%	0.0%	100.0%
Ｅ小学校	11.4%	18.2%	43.2%	27.3%	0.0%	100.0%
Ｆ小学校	7.4%	17.6%	47.1%	27.9%	0.0%	100.0%
Ｇ小学校	6.9%	15.7%	38.2%	38.2%	1.0%	100.0%
Ｈ小学校	3.0%	12.1%	36.4%	48.5%	0.0%	100.0%
Ｉ小学校	10.8%	18.5%	47.7%	23.1%	0.0%	100.0%
Ｊ小学校	6.4%	21.3%	40.4%	31.9%	0.0%	100.0%

問 29　子育てについての悩みを誰に相談しましたか。また、相談しますか。
（あてはまる番号全てに○をつけてください）

	1 家族や親せき	2 友人	3 学校（幼稚園・保育所を含む）の先生	4 地域の子育て経験者	5 市町保健師や相談員	6 その他	7 相談したい人がいない
全体(n=821)	**86.2%**	**81.6%**	**41.7%**	**9.0%**	**9.0%**	**4.4%**	**1.8%**
核家族家庭(n=546)	88.3%	82.1%	40.5%	9.0%	9.3%	4.6%	1.5%
多世代同居家庭(n=179)	83.8%	81.6%	45.8%	7.8%	9.5%	4.5%	1.7%
一人親家庭(n=92)	79.3%	79.3%	41.3%	10.9%	5.4%	3.3%	4.3%
佐城地区(n=228)	88.2%	83.8%	40.8%	7.0%	6.6%	4.4%	1.3%
三神地区(n=192)	88.5%	82.3%	39.6%	6.3%	12.5%	2.1%	1.6%
杵西地区(n=155)	83.9%	76.1%	40.6%	12.9%	8.4%	1.9%	3.2%
東松地区(n=135)	83.0%	82.2%	40.7%	11.1%	7.4%	8.1%	2.2%
藤津地区(n=111)	85.6%	82.9%	49.5%	9.9%	10.8%	7.2%	0.9%
Ａ小学校	84.3%	83.3%	40.2%	7.8%	2.9%	3.9%	2.0%
Ｂ小学校	91.3%	84.1%	41.3%	6.3%	9.5%	4.8%	0.8%
Ｃ小学校	91.7%	83.3%	41.7%	6.5%	11.1%	2.8%	2.8%
Ｄ小学校	84.5%	81.0%	36.9%	6.0%	14.3%	1.2%	0.0%
Ｅ小学校	86.2%	78.2%	40.2%	14.9%	6.9%	2.3%	2.3%
Ｆ小学校	80.9%	73.5%	41.2%	10.3%	10.3%	1.5%	4.4%
Ｇ小学校	82.4%	82.4%	40.2%	10.8%	4.9%	6.9%	1.0%
Ｈ小学校	84.8%	81.8%	42.4%	12.1%	15.2%	12.1%	6.1%
Ｉ小学校	84.6%	80.0%	49.2%	7.7%	10.8%	10.8%	0.0%
Ｊ小学校	87.0%	87.0%	50.0%	13.0%	10.9%	2.2%	2.2%

問 30　子育てや家庭教育に関する集まり、地域の行事などに参加したことがありますか。
（あてはまる番号全てに○をつけてください）

	1 子育てサロンやサークル	2 親子参加の体験イベント	3 ＰＴＡ等の集まり	4 子育てや家庭教育に関する講演会	5 学校（幼稚園、保育所含む）の行事	6 地域行事での祭りや文化祭など	7 地域行事での清掃活動や話し合いなど	8 その他	9 参加したことはない
全体(n=817)	**33.2%**	**32.6%**	**42.1%**	**21.2%**	**89.0%**	**70.1%**	**54.1%**	**0.9%**	**4.2%**
核家族家庭(n=542)	37.1%	33.6%	40.8%	22.7%	90.4%	69.4%	56.3%	1.1%	3.5%
多世代同居家庭(n=178)	32.0%	35.4%	55.1%	20.2%	87.1%	77.5%	56.2%	0.0%	3.4%
一人親家庭(n=93)	14.0%	20.4%	26.9%	11.8%	80.6%	57.0%	34.4%	1.1%	9.7%
佐城地区(n=227)	32.6%	36.1%	32.2%	19.8%	90.7%	72.7%	57.3%	1.3%	4.0%
三神地区(n=189)	42.3%	32.8%	42.9%	24.3%	86.2%	68.3%	61.4%	0.5%	4.2%
杵西地区(n=155)	34.8%	34.8%	41.9%	20.0%	88.4%	72.3%	51.0%	1.3%	3.9%
東松地区(n=134)	29.9%	20.1%	38.1%	19.4%	88.1%	67.2%	42.5%	0.0%	6.0%
藤津地区(n=112)	20.5%	36.6%	66.1%	22.3%	92.0%	68.8%	53.6%	0.9%	2.7%
Ａ小学校	34.7%	35.6%	36.6%	19.8%	89.1%	67.3%	43.6%	2.0%	5.0%
Ｂ小学校	31.0%	36.5%	28.6%	19.8%	92.1%	77.0%	68.3%	0.8%	3.2%
Ｃ小学校	41.5%	34.0%	49.1%	30.2%	85.8%	67.0%	52.8%	0.9%	3.8%
Ｄ小学校	43.4%	31.3%	34.9%	16.9%	86.7%	69.9%	72.3%	0.0%	4.8%
Ｅ小学校	29.9%	37.9%	39.1%	21.8%	81.6%	71.3%	49.4%	1.1%	5.7%
Ｆ小学校	41.2%	30.9%	45.6%	17.6%	97.1%	73.5%	52.9%	1.5%	1.5%
Ｇ小学校	32.4%	18.6%	40.2%	20.6%	89.2%	62.7%	35.3%	0.0%	6.9%
Ｈ小学校	21.9%	25.0%	31.3%	15.6%	84.4%	81.3%	65.6%	0.0%	3.1%
Ｉ小学校	23.1%	29.2%	70.8%	29.2%	92.3%	58.5%	56.9%	1.5%	3.1%
Ｊ小学校	17.0%	46.8%	59.6%	12.8%	91.5%	83.0%	48.9%	0.0%	2.1%

問 31　子育てや育児、家庭教育に関する知識や情報は、どこから得ていますか。
（あてはまる番号全てに○をつけてください）

	1 家族や親せき	2 友人	3 学校・幼稚園・保育所・児童クラブなどの先生	4 地域の人（子育てサロンやサークル、近所の人）	5 市町の相談機関（電話相談、児童館、母子保健センターなど）	6 メディア（テレビ、インターネット、携帯サイトなど）	7 子育てに関する本	8 その他	9 特にない
全体(n=809)	**72.9%**	**82.3%**	**61.4%**	**26.7%**	**7.7%**	**48.2%**	**27.2%**	**2.1%**	**2.7%**
核家族家庭(n=536)	75.0%	84.5%	61.4%	28.7%	7.3%	51.1%	28.4%	1.9%	1.7%
多世代同居家庭(n=176)	69.9%	77.3%	64.8%	26.7%	9.1%	45.5%	29.5%	1.7%	2.8%
一人親家庭(n=93)	66.7%	78.5%	54.8%	15.1%	7.5%	36.6%	15.1%	4.3%	8.6%
佐城地区(n=224)	76.3%	83.5%	62.1%	30.4%	5.8%	51.8%	23.7%	0.9%	1.8%
三神地区(n=188)	75.5%	83.0%	58.5%	26.1%	7.4%	51.1%	31.4%	2.7%	1.6%
杵西地区(n=153)	71.9%	78.4%	61.4%	30.1%	8.5%	49.0%	29.4%	1.3%	4.6%
東松地区(n=133)	66.2%	81.2%	57.9%	25.6%	9.0%	39.1%	24.8%	3.8%	4.5%
藤津地区(n=111)	71.2%	85.6%	69.4%	17.1%	9.0%	45.9%	27.0%	2.7%	1.8%
Ａ小学校	78.8%	80.8%	55.6%	27.3%	3.0%	46.5%	26.3%	2.0%	3.0%
Ｂ小学校	74.4%	85.6%	67.2%	32.8%	8.0%	56.0%	21.6%	0.0%	0.8%
Ｃ小学校	77.1%	85.7%	61.9%	25.7%	7.6%	51.4%	33.3%	1.9%	2.9%
Ｄ小学校	73.5%	79.5%	54.2%	26.5%	7.2%	50.6%	28.9%	3.6%	0.0%
Ｅ小学校	76.5%	80.0%	69.4%	27.1%	8.2%	55.3%	35.3%	1.2%	4.7%
Ｆ小学校	66.2%	76.5%	51.5%	33.8%	8.8%	41.2%	22.1%	1.5%	4.4%
Ｇ小学校	65.7%	83.3%	54.9%	22.5%	6.9%	41.2%	24.5%	3.9%	4.9%
Ｈ小学校	67.7%	74.2%	67.7%	35.5%	16.1%	32.3%	25.8%	3.2%	3.2%
Ｉ小学校	66.2%	81.5%	69.2%	10.8%	7.7%	46.2%	30.8%	3.1%	3.1%
Ｊ小学校	78.3%	91.3%	69.6%	26.1%	10.9%	45.7%	21.7%	2.2%	0.0%

問 32　現在、子育てで感じる悩みや不安はありますか。
（あてはまる番号全てに○をつけてください）

	1 子どものしつけや基本的生活習慣	2 子どもの学校生活（友人関係、勉強のことなど）	3 子どもの心や体の健康、発達	4 子どもの身の安全安心	5 子どもへの接し方、対応の仕方	6 子どもの教育費	7 子育てと職業の両立	8 配偶者や家族の子育てへの関わり	9 地域の子育て環境	10 その他	11 悩みや不安はない
全体(n=805)	**52.2%**	**56.0%**	**30.1%**	**28.2%**	**29.4%**	**22.9%**	**29.6%**	**12.5%**	**6.6%**	**1.7%**	**6.6%**
核家族家庭(n=536)	50.6%	59.9%	31.2%	29.7%	31.3%	23.5%	28.0%	11.8%	7.3%	1.7%	6.3%
多世代同居家庭(n=174)	54.0%	48.9%	23.0%	21.3%	25.9%	17.2%	25.3%	16.7%	5.2%	1.7%	6.3%
一人親家庭(n=92)	59.8%	47.8%	37.0%	32.6%	25.0%	28.3%	47.8%	9.8%	5.4%	2.2%	7.6%
佐城地区(n=224)	46.4%	55.4%	32.1%	30.4%	28.6%	25.9%	30.8%	11.6%	6.3%	1.3%	6.3%
三神地区(n=185)	54.1%	61.6%	27.0%	29.2%	31.4%	18.9%	25.9%	9.7%	8.1%	1.6%	6.5%
杵西地区(n=154)	57.8%	59.7%	29.9%	22.7%	29.9%	22.7%	26.0%	13.6%	6.5%	1.9%	7.1%
東松地区(n=132)	49.2%	48.5%	28.8%	34.1%	25.8%	19.7%	36.4%	11.4%	8.3%	2.3%	6.1%
藤津地区(n=110)	56.4%	51.8%	32.7%	22.7%	31.8%	27.3%	30.0%	19.1%	2.7%	1.8%	7.3%
Ａ小学校	45.5%	64.6%	30.3%	34.3%	25.3%	28.3%	31.3%	12.1%	4.0%	2.0%	4.0%
Ｂ小学校	47.2%	48.0%	33.6%	27.2%	31.2%	24.0%	30.4%	11.2%	8.0%	0.8%	8.0%
Ｃ小学校	56.7%	68.3%	31.7%	32.7%	35.6%	19.2%	23.1%	8.7%	7.7%	1.9%	5.8%
Ｄ小学校	50.6%	53.1%	21.0%	24.7%	25.9%	18.5%	29.6%	11.1%	8.6%	1.2%	7.4%
Ｅ小学校	57.0%	58.1%	39.5%	24.4%	31.4%	24.4%	30.2%	8.1%	7.0%	1.2%	11.6%
Ｆ小学校	58.8%	61.8%	17.6%	20.6%	27.9%	20.6%	20.6%	20.6%	5.9%	2.9%	1.5%
Ｇ小学校	48.5%	48.5%	28.7%	36.6%	25.7%	19.8%	33.7%	10.9%	6.9%	3.0%	5.9%
Ｈ小学校	51.6%	48.4%	29.0%	25.8%	25.8%	19.4%	45.2%	12.9%	12.9%	0.0%	6.5%
Ｉ小学校	54.7%	53.1%	32.8%	26.6%	28.1%	29.7%	28.1%	21.9%	3.1%	1.6%	6.3%
Ｊ小学校	58.7%	50.0%	32.6%	17.4%	37.0%	23.9%	32.6%	15.2%	2.2%	2.2%	8.7%

発 行 日:　平成２４年３月

編　　集:　佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）

発　行：　（財）佐賀県女性と生涯学習財団
佐賀県佐賀市天神三丁目２－１１
ＴＥＬ：０９５２－２６－００１１
ＦＡＸ：０９５２－２５－５５９１
E-Mail：syougai@avance.or.jp